

# とある転移の学園都市

Natrium

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界召喚された学園都市が暴れまわるだけの話。

グラ・バルカス帝国編も終了目前です。

あとはア皇戦を経由するだけで魔法帝国戦に突入するので、もうしばらくのお付き合いを。

2020/04/24追記

今年は大学受験が控えていますので更新速度は大幅に落ちると思います

年に二・三話更新できれば上々、というレベルになりそうです。申し訳ございません

# 目次

## 序章

第一話 交錯せし二つの世界 Ina

dvertent Contact W

ith: 1

第二話 魔術で無知な子供たち We

lcome To Science

9

第三話 悲劇では終わらせない Or

Relief, Or Despai

r 17

第四話 明確な分岐点 Is It

R ight Or Left...?

33

第五話 明かされる真実 Alrea

dy Too Late: 45

## 第二章

第六話 運命の転換点 New Ge

neration 56

第七話 紺碧の光線放つ救星主 Al

l Stars 65

第八話 次の喧嘩を始めましょう R

elease Monster 74

第九話 盲目なる外交官 Stunt

ed Sense of Pride

85

e	第十四話	白より白き純白の	Con	151	第二十話	終わることのない悲劇	N	219
trasting	第十四話	白より白き純白の	Con	151	第十九話	命の価値	Inequal	219
Two	第十四話	白より白き純白の	Con	151	第十八話	終わりと始まりの大海戦	Step to the Next	209
Peopl	第十四話	白より白き純白の	Con	151	第十七話	命刈り取る無慈悲な歯車	Mechanical Slaughter	201
151	第十四話	白より白き純白の	Con	151	第十六話	妄想、想定、拡張と	Science Adventure	180
	第十四話	白より白き純白の	Con	151	第十五話	きつと正義はどこにでも	Black to Light	163
	第十三話	何処にでも居る平凡な	H	125	第十四話	一万年の時を経て	In T	
	第十三話	何処にでも居る平凡な	H	125	第十三話	何処にでも居る平凡な	Hero Who Are Everyw	138
	第十二話	剣の代わりに持つものは		114	第十二話	剣の代わりに持つものは	Girls' Talk	125
	第十一話	西へ向かう太陽	Beigi	97	第十一話	西へ向かう太陽	Beginning of the End	114
	第十一話	西へ向かう太陽	Beigi	97	第十話	一万年の時を経て	In T	
	第十話	一万年の時を経て	In T		第九話	命の価値	Inequal	219
	第十話	一万年の時を経て	In T		第八話	終わりと始まりの大海戦	Step to the Next	209
	第九話	命の価値	Inequal	219	第七話	命刈り取る無慈悲な歯車	Mechanical Slaughter	201
	第九話	命の価値	Inequal	219	第六話	妄想、想定、拡張と	Science Adventure	180
	第八話	終わりと始まりの大海戦	Step to the Next	209	第五話	きつと正義はどこにでも	Black to Light	163
	第八話	終わりと始まりの大海戦	Step to the Next	209	第四話	剣の代わりに持つものは	Girls' Talk	125
	第七話	命刈り取る無慈悲な歯車	Mechanical Slaughter	201	第三話	何処にでも居る平凡な	Hero Who Are Everyw	138
	第七話	命刈り取る無慈悲な歯車	Mechanical Slaughter	201	第二話	命の価値	Inequal	219
	第六話	妄想、想定、拡張と	Science Adventure	180	第一話	一万年の時を経て	In T	
	第六話	妄想、想定、拡張と	Science Adventure	180	第一話	一万年の時を経て	In T	
	第五話	きつと正義はどこにでも	Black to Light	163				
	第五話	きつと正義はどこにでも	Black to Light	163				
	第四話	剣の代わりに持つものは	Girls' Talk	125				
	第四話	剣の代わりに持つものは	Girls' Talk	125				
	第三話	何処にでも居る平凡な	Hero Who Are Everyw	138				
	第三話	何処にでも居る平凡な	Hero Who Are Everyw	138				
	第二話	命の価値	Inequal	219				
	第二話	命の価値	Inequal	219				
	第一話	一万年の時を経て	In T					
	第一話	一万年の時を経て	In T					

nce	280				
bsolute Power Balance		271	第三章		
			第二十五話	真の王者は井の中に	A
			第二十四話	皇国の終焉	New Government
			第二十三話	ひとつの結末	End
			第二十二話	侵蝕	Creeping Shadow
			第二十一話	?がされた鍍金	Give Oneself Away
			第二十六話	踊り狂う会議	Breaken Conference
			第二十七話	完全なる支配へ	Complete Discussion
			第二十八話	捕食者は斯く墜ちる	Debauched Eagle
			第二十九話	科学の都市の大戦艦	Escape from...
			第三十話	脅威、もしくはは唯一の希望	Flamboyant Glitter
			第三十一話	科学の英知が組み上げた	Science



## 序章

## 第一話 交錯せし二つの世界 Inadvertent

## | Contact | With :

1

◇中央暦1639年1月24日午前8時 クワトイネ公国

その日は快晴な空が広がっていた。

ワイバーンと呼ばれる飛竜を操り、竜騎士であるマールパティマは公国北東方向の警戒任務に就いていた。

公国北東方向には、国は何もない。

東に行っても海が広がるばかりであり、幾多の冒険者が東方向へ新天地を求めて進行していったが、今まで帰ってきた者はいない。

哨戒勤務の必要性、それは最近ロウリア王国と緊張状態が続いているため、軍船による迂回、奇襲が行われた場合に早期に探知、対策をとるため、彼は相棒を公国北東の空へ飛ばしていた。

それは突然の出来事であった。

「……………」

彼の眼が遙か遠くの空に飛翔する黒い何かを捉えた瞬間——

どつつつガツツツ!!!! と。

彼とその相棒である飛龍は真横からの謎の衝撃により吹き飛ばされた。

あの黒い飛行物体は何だったのか、どこから攻撃を受けたのか。愛騎から投げ出された竜騎士にそんなことを考える余裕はなかった。

未確認騎とは距離があったことが幸いして、直接的なダメージこそ無かったものの、現在進行形で高度四千メートルからパラシュートなしのスカイダイビングを行っている彼にとって、それはなんの慰めにもならない。

時間にして数十秒、高度を半分にまで下げ、死を覚悟したマールパーティマであったが、そんな彼に救いの手が差し伸べられた。

いいや、違う。そのような生易しいものではない。彼が知りうる限り、それは『手』などというモノではなかった。

では何だというのか。

——それは『鉤爪』であった。

ならば、自身の相棒が救ってくれたのか、と竜騎士は考えたが、実際にはそうではな



い。

実際に、彼を掴んでいたものは『黒金の鉤爪』であった。

正確には。前面が真っ黒に塗りつぶされた正体不明のナニカから伸びる、機械仕掛けのアームであった。

自分は助かったのだろうか？ などと楽観的に考えることは、彼にはできなかつた。

当然のことだ。窮地を救われたからといって、この黒いナニカが完全な善意だけで助けてくれたと考えるほど彼は盲目ではない。

そもそも、コレは何なのか。彼が知る限り近隣諸国の飛龍にこんなモノはなかつたし、噂に聞くとある文明圏国の飛行機械も、こんな文明圏外まで航続距離が続くとは考えにくい。

どこかの国の秘密兵器ならば、と仮定するも、ここまでの速度を誇る兵器があるならとうに世界征服など果たしているだろうし、何よりこんな辺境に用があるとは思えない。

ならば——、と思考が迷走し始めたマールパティマであったが、ふと首を傾げながら、

（おかしい。この飛龍の速度で振り回されたら人間などとうに死んでいるはずだ。しかし、何故減速を——）

などと、疑問を浮かべると同時に、

ストツ!!? という軽快な音と共に竜騎士はその解を得ることになる。  
気づけば。

自らの体を掴んでいたアームが離れていた。だからといって再び自由落下を始めたわけではなく、まるで何かに跨っているようで――。

――そこまで考えて、

「ツ――!!」

声。

声が出なかった。

跨っていたものがSAN値を脅かすようなクトゥルフ的生命体だったから。生物としての本能が絶対に勝てないと警鐘を鳴らすような危険生物だったから、というわけではない。

その感触自体は慣れ親しんだものであった。戦場で苦楽を共にしてきた相棒のそれであった。

しかし。

彼は自分の体の震えを止めることができなかった。どうやって、という素朴な疑問すら浮かべることができなかった。

既存の数倍の速度を誇る飛行物体という存在だけなら、まだ受け入れられた。操作性や安全性を度外視すれば三大文明圏の大国ならば可能性はあると考えることもできた。それでも。

一切揺れることなく飛龍の五十倍もの最高速度で天を駆け抜け、僅かな接触だけでも大惨事になる空中で、物品のやり取りをも可能とする飛行機械。そんな化物を一体どこの国が造れるというのだろうか。少なくとも三大文明圏の国々では到底力不足だ。

速度や強度。

安定性や操作性。

どこを取つても明らかに異常。異質でしかない。ならば。

どこの国がこの化け物を創り出したのかと、国籍の確認を行おうとするも。

ゴツツツ!!!! と。

爆音を伴い、圧縮された空気が生み出した白いもやを引き連れながら、正体不明の飛行物体はマイハーク方面へ姿を消した。

2

——わずかに。

ほんのわずかに。竜騎士が確認作業に入るのが早ければ機体に描かれた文字列が見えたかもしれない。それを理解できるかはさておき、その正体に一步近づけたかもしれない。

その手掛かりとは何か。それは機体後部の翼に刻まれている。

H s C D A | 1 3

すなわち。

<sup>Hard Science</sup>  
自然科学と。

行間1

本来、このような事件は起きなかったかもしれない。

本来、召喚されるのは『日本国』だったのかもしれない。

けれども、この世界線においては。

世界を f r g a y 滅 i b g s の運命から逃すための t y h s 喚 k d b w を行おうとした w g h f d 神 k l r e t は、『g y u 神 i k p 浄 d g t』の機能を持つ右腕の所有者の魂の輝きに惹かれ、その英雄とそれが所属している国家を g v s 呼 m k r v p とした。

しかし。

想定外の現象により、力の大半が消滅したために、召喚できたのはとある一都市のみであった。

それでも、かの世界において、

その都市は、世界最大の国土面積を持つ大国と戦争しても、涼しい顔であしらうなど、一都市が持つには強力すぎる軍事技術を以って覇権を敷いていた。

故に、この世界線では本来の歴史とは大きくズレが生じるだろう。

それは正か負か。どちらに転がるかは未だ誰にもわからない。

故に、ここから先は未知の世界線。

誰も観測したことがない、何もかもが未確定の世界線。

これは、そんな世界線で巻き起こる、『変革』の物語。

3

『しっ、司令部!!! 我、未確認騎を発見、及び確認しようとするも、速度が違いすぎる!!! 最低でも、本騎の数十倍の速度が出ている!!! 未確認騎は本土マイハーク方向へ進行、繰り返し。マイハーク方向へ進出した!!!』

報告を受けた司令部では、蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。

眉唾物ではあるが、本当にワイバーンの数十倍の速度の未確認騎が存在しているなら、クワトイネ公国の経済の中枢都市マイハークは壊滅的な打撃を受けるだろう。攻撃を受けたら、軍の威信に関わる。

だが、敵騎は速度からしておそらく既にマイハークへかなり近づいているはず。もしくは既に侵入しているかもしれない。

それでも、何もしないよりかはましと、

司令官は通信魔法で、第六飛龍隊へ全力出撃の命令を出そうとするも、

『司令部へ報告!!!』 第六航空基地の二番滑走路に国籍不明の航空機が!!!』  
ついに。

運命の歯車が噛み合い、本来の仕様とは異なる形で動き出した。

4

こうして、史実とは違う形で二つの世界のファーストコンタクトは成った。

これから始まるのは、本来の歴史とは異なる、圧倒的な不条理による一方的な蹂躪劇である。

## 第二話 魔術で無知な子供たち Welcome To

## Science

1

「貴国は農作物の生産に産業の重きを置いていると聞いているのだけど」

「……農業しかない、と言い換えても過言ではない程に比重が高いのは事実です。……それが何か？」

異世界の国家とのファーストコンタクトの担い手は、まさしく二十にも満たない少女であった。

「先ほどの技術支援の話。その食料との交換で手を打とうではないか、と思つた次第ですね」

「つ、良いのですか?! あれだけの技術を、ただの食糧輸出だけで……ッ!!」  
名を雲川芹亜。

統括理事会メンバー・貝積継敏のブレインを務め、学園都市第五位の超能力者・食蜂操祈に匹敵する程の人心掌握術を一切の能力を使わずに再現できる。それだけの特殊技能を持つ、裏の世界の住人であった。

彼女は囁くように大使へ告げる。

「貴国の農作物は質がいい。学園都市にも生産プラントはあるが、やはり生の食品を求めめる声が多数出ている」

「？ 食料自給率が低い訳ではないのですよね？」

「生産プラントと言っただろう？ 人間が一から種を植えて、手間暇かけて育てるという訳ではない。まあ農作物の完成度は高いためそれほど問題は無いが……肉類は違う。あの、合成肉特有の食感を苦手とする学生もそれなりに多いのだけ」

「？ ??？」

「……とにかく、生産分とは別に食料の輸入が必要だということさえ分かってくればいいけど」

雲川は机に置いていた書類を手に取り、大使側へと滑らせる。

元より食料の買い付け量はさほど多くない。この書類を見る限りでは、せいぜいが娯楽品にしかない量だ。

人口はおよそ380万人で、輸入量としては全体の五パーセント程度。

これでは貿易面での赤字が懸念されるが、結果的に得られる経済効果は絶大であるのも事実。

そのため、大使は事前の指示に従ってこの条件で受けようと考えたが、



「なるほど、理解しました。ですが……、何故これほどの譲歩をしていただけのですか？」

「いくらなんでもこの条件は、破格すぎではないでしょうか？」

「……いいや、それほど深く考える必要はないさ。これから良き隣人になり得る貴方たちへの、ほんの些細な心遣いだよ」

「つ……、感謝します。雲川殿……」

「改まらなくていいけど。私たちの関係性は主と従ではない。あくまでも対等な、友好国としての関係だ」

「つ!! で、ですが——」

「これだけの国力を持つ巨大国家と対等？」

「しがたない貧乏国家であるクワトイネが、弱点の一つも見当たらない学園都市と対等な関係だと？」

「何かの聞き間違いではないかと、大使が発言しようとするが、」

「気後れする理由は無いぞ。なぜなら貴国は、私たちが認めた良き友人。これからも、仲良くしていこうではないか」

「そんな、驕ることのなく謙遜に満ち溢れた発言を聞いて。」

（学園都市とは、なんと崇高な存在であるのか……。たとえば世界が貴国を反発しようと、私は一生あなたの方へ付いて行きますぞ）

（何だちよろいな）

## 2

ロウリア王国 王都 ジン・ハーク ハーク城 御前会議

月の綺麗な夜、秋になり、少し涼しくなったこの日の夕方、城では松明が集れ、薄暗い部屋の中、王の御前でこの国の行く末を決める会議が行われていた。

「ロウリア王、準備はすべて整いました」

白銀の鎧に身を包み、筋肉が鎧の上からでも確認出来るほどの筋肉を持った、パタジーンと呼ばれる將軍は王に跪き、そう報告した。

「二国を同時に敵に回して勝てるか？」

威厳を持った声で、三十四代ロウリア大王、ハーク・ロウリア三十四世はその男に尋ねると、

「片や農民あがりの小国。もう片や、作物すら育たない不毛の土地。負ける要素など、何

処にも見当たりませんよ」

余裕を持った表情でパタジンは嘯いた。

「宰相よ、一ヶ月ほど前に接触してきた学園都市なる者共の情報はるか」

学園都市は、ロウリア王国にも接触したが、事前にクワ・トイネ公国と、クイラ王国と国交を結んでいたため、敵性勢力と判断され、ロウリアに門前払いを受けていた。

「ロデニウス大陸のクワトイネ公国から北東に約一千キロメートルの所にある、新興国家です。一千キロも離れていることから、軍事的に影響があるとは考えられません。自ら『都市』と名乗ってあるだけあって、面積も七百平方キロメートルと非常に小さい小国であるようです。また、奴らは我が部隊のワイバーンを見て、初めて見たと驚いていました。その後、似たようなものならある、などと喚いていましたが、小国如きにそのようなものがあるとも思えないため、竜騎士の存在しない蛮族の国と思われず。情報はあまりありませんが」

航空支援の有無は、戦場で目に見えるほどの差を生み出す。

空爆だけで騎士団は壊滅しないが、一方的な攻撃を受ければ精神への負担も大きい。

士気への影響、さらに偵察などの効果も認められるのだ。

それがない分、学園都市は弱い。少なくとも彼らはそう判断した。

「そうか……。しかし、この作戦が終わればロデニウス大陸が統一され、亜人どもが大陸

から消滅すると考えると……、何やらこみあげてくるものがあるな」

王はしばらく湧き上がる愉悅に浸っていたが、これを邪魔する者が現れる。

「大王様。統一の暁には、あの約束もお忘れ無く……、くくくつ」

黒衣にフードで顔を隠した不気味な男が、あからさまな嘲笑を浮かべながら王に向かって囁いたのだ。

「ちつ、解つておるわ!」

その不快な声に耐えられず、怒気をはらんだ声で王は言い返す。

(三大文明圏外の蛮地と思つてバカにしおつて。ロデニウスを統一したら、フィールアデス大陸にも攻め込んでやるわ)

「……將軍、作戦の概要を説明せよ」

王は歪んだ顔を隠そうともせずに、パタジンに命令した。

「説明致します。今回の作戦用総兵力は五十万人、本作戦では——」

將軍からすべての概要を聞き終える同時に、

「そうか……。ではこれより、クワトイネ、及びクイラへ対する侵攻作戦を開始する!!」

諸君、今宵は我が人生で一番良い日だ! 吉報を期待しているぞ!!」

フウーハハハ! と笑いながら開戦の合図を告げた。

## 3

## 学園都市 クワトイネ大使館

クワトイネとロウリア国境にて、ロウリア王国の兵力が集結しており、戦闘が近いと判断したクワトイネ側は学園都市に説明に来ていた。

「と、言うわけでロウリア王国との戦争で我々が敗戦すれば、貴国はともかく、クイラ国に対して約束した食料を供給できないでしょう。あなた方がクイラへ食糧を輸出できないなら別でしょうけどね」

暗に、産業資源の宝庫であるクイラはクワトイネが滅ぼされたら崩壊する、と告げた駐留大使であったが、

「よせよ、それだけならこちらが援軍を出す理由にはならないけど。食糧生産プラントを大幅に増設すればいいだけの話だ。今じゃ外周回りには大量のメガフロートなんてものもあるし、場所はある余っているけど」

統括理事会のブレインである雲川芹亜は一切動揺を見せずにそう言い返した。

とは言うものの、実際には学園都市だけでクイラを支え切ることが不可能だ。

数か月前の交渉では余裕があるように振舞っていたが、本当の自給率はおおよそ八十パーセントに過ぎない。

そのために人口を150万人ほど多く偽造して、不足分の輸入を行おうとしたのだから。

しかし、だ。

それでは底が見えてしまう。

学園都市が、何をどこまでできるか分からない状態を維持する事。

たったそれだけで相手は自縄自縛になり、この交渉における最適解を見失う。  
だから。

この学園都市製兵器による支援要請についてもこちらからは何も仕掛けない。

悠々と相手が交渉カードを切るのを待ち、それに応じてこちらもカードを切る。

あなた方が何をしようと、我々学園都市が揺らぐことはない、と言わんばかりに。

別に学園都市側に、援軍を出すことに対しての問題があるという訳ではない。既に大  
国と一戦交えている上に、そもそももな現代兵器すら持つていない国など一時間も  
かからず滅ぼせる。

ならばなぜか。

それは、クワトイネの大使が心を折られて限界を超えた譲歩を行い、本国に泣きつき  
かけた頃に交渉がまとまったと言えば、知れずとうかがい知れるだろう。

## 第三話 悲劇では終わらせない Or Relief,

## Or Despair

1

クワトイネ公国、西部、国境から二十キロメートル離れた町、ギム

中央歴1639年4月11日午後――

クワトイネ公国、西部方面騎士団、及び西部方面、第一飛龍隊、第二飛龍隊

西部方面騎士団団長モイジは、焦燥感にかられていた。

西部方面隊の兵力、歩兵二千五百人、弓兵二百人、重装歩兵五百人、騎兵二百人、軽騎兵百人、飛龍二十四騎、魔導師三十人。

準有事体制であり、クワトイネの総兵力から考えると、かなりの兵力、しかし、国境沿いに張り付いている敵兵力はこちらの兵力を遥かに凌駕する。

それに加え、こちらからの通信の一切を、ロウリア王国側は、無視しつつづけている。すでに、市民の一部は、ギムから疎開を開始しているが、完了には程遠い。クワトイネ公国政府も、市民に対し、疎開を励行していた。

「ロウリアからの通信はないか？」

モイジは魔力通信士に尋ねる。

「こちらからの通信は、確かに届いているはずですが、現在のところ、返信はありません。こちらからの通信は無視し続けています」

多少の兵力差なら、作戦によっては負けずに済む。しかし、今回は圧倒的すぎる差がある。いったいどうすれば良いのか。団長は顔をしかめながらも、考える。

「上への、増援要請はどうなっている？」

「司令部には、再三に渡り、要請していますが、我が国の援軍は「現在非常召集中」とのみ回答が着ており、学園都市からの援軍に関しては、未だ本国にすら入っていないようです」

「のんびりしている暇は無いというのに!!! さっさと今ある兵力だけでも増援をもらわないと、ギムを放棄することになるぞ!! 畜生!!!」

モイジは舌打ちをすると、今後の方針を決めるため思考の海に潜った。

## 2

中央歴1639年4月12日早朝

突如として、ギムの西側国境から、赤い煙が上がる。と、同時に通信用魔法から、緊



迫した通信が入る。

「ロウリアのワイバーン多数がギム方向へ侵攻、同時に、歩兵数万が国境を越え、侵攻を開始した。繰り返す——はっ！！！！ 総員退避！！ 退避せ——」

魔法通信が突如途絶える。

「第一飛龍隊及び第二飛龍隊は全騎上がり、敵ワイバーンにあたれ！！ 軽騎兵は、右側側面から、かく乱しろ！！ 騎兵二百は遊撃とする、指示あるまで待機！！ 最前列に重装歩兵、その後歩兵を配置、隊列を乱すな。弓兵は、その後ろにつけ、最大射程で支援しろ！ 魔道士は、攻撃しなくて良い、全員でこちら側を風上としろ！！」

赤いのろし、襲撃の合図であるそれを目撃した騎士団団長モイジは吼えた。

3

双方の飛龍隊はギムの上空で乱戦に陥っていた。

「オラオラアツ！！ クワ公のトカゲ乗りの力つてのはそんなものかア！！！！」

ロウリアの竜騎士、ベルゼルはクワトイネの竜騎士を墜しながら叫ぶ。

「ツ——！！！！」

クワトイネ側に、そのあからさまな挑発に言い返す余裕は無い。

総数でも、技量でも劣っているクワトイネの飛龍隊に、乱戦になった今、勝ち目が生まれることはない。本国から援軍が来ても、この数では制空権は奪えないだろう。

今彼らが行っていることはせいぜいが延命治療でしかない。どうあがいても死ぬことには変わりない。

そういつた諦めの感情を感じ取ったのか、ベルゼルはつまらないとばかりに、

「あくあ、ギムを守る竜騎士がこんなざまとは、住民も不憫なこつて。このままじゃあお前らの家族含め、大勢の女共が犯されることだろうなあ。まあ俺が知ったことじゃないが」

「貴様アアア——！！！！」

流石に我慢できなかつたのか、若手竜騎士が突撃をしたが、ズガゴツツ！！！！ という音と共に炎上し、墜落していった。

「威勢がいいのは結構だが、実力が伴ってないなあ。なあ、アンタもそう思うだろう？」  
「ナイルツ！！ クソツ——」

とある竜騎士が親友の悲劇を嘆くも、現実が変わることはない。

一人の竜騎士が戦い抜くことを誓うも、現状を打破することはない。

最古参の老兵が相打ち覚悟で突撃するも、戦況が揺らぐことはない。

開戦後、わずか十五分でクワトイネの竜騎士は既に半数を切っていた。

相対するロウリアの竜騎士には、大した被害は出ていない。

誰もがこの地獄から逃れたいと願った。

——爆音が鳴り響く。

また一人、竜騎士が撃ち落される。

——爆音が鳴り響く。

親友と同じ末路を辿った死体が一つ増える。

——が聞こえる。

——撃……が……にする。

——爆音が鳴り響く。

背後から奇襲を受けた竜騎士が墜落してゆく

——轟音——り響く。

音……闘……が……的を補……する。

——爆音が鳴り響く。

突撃した竜騎士が包囲され、何もなせずに消えて——

ゆくことはなく。

代わりに。

途轍もない轟音と共に、ロウリアの竜騎兵の四割が吹き飛んだ。

否、吹き飛んだのではない。

消滅。そう表現するほうが正しいだろう。

FIVE Over. Model case RAILGUN

第三位の超電磁砲を超える駆動鎧の主兵装である、ガトリングレールガン。

戦車数台を一撃で破壊する弾丸を、毎分四千発もの勢いで発射する凶悪兵器。

そんな最凶の武器を搭載した超音速戦闘機、その最新型。

HSFB-18

たった数機でロシア空軍を完封するほどの、圧倒的な戦闘力を誇る学園都市製の戦闘機。その第二十五世代型。

吹きすさぶ轟音の中、純粹なる科学の怪物が異世界の空へと顕現した。

行間2

ランチエスターの法則、というものを知っているだろうか。

現在では企業の経営戦略などに使われているが、その本来の用途は戦争にある。

硫黄島上陸戦。

トラファルガー海戦。

戦闘時間に対する双方の兵員の減少数を算出するこの方程式で、大抵の戦の勝敗は説明できる。

その一次法則は、一対一の古典的な近接戦闘、二次法則は、集団対集団の現代的な銃撃戦にそれぞれ対応している。

魔法や飛龍などによる無差別攻撃を除けば、この異世界での戦闘は大方一次法則で説明可能だろう。

このギムでの戦いもそうだ。

兵数や練度、双方で優っているロウリア軍の圧勝であることは、この方程式からも読み取れる。

過去には、それらを見殺しして逆転勝利をした戦いもあったが、これほどの差があればそれも難しい。聡明な軍師、歴戦の英雄、その程度で勝敗を変えられる領域は既に超えている。

完全無欠な戦術も力業で突破され、戦場の勇者も包囲網によって、いずれこと切れるだろう。

人類最強の名を持つ戦士でも、圧倒的な物量の前では押し潰されるということは自明の理である。

ならば。

最強のその先にある、絶対的な力であれば。戦う気にもなれないほどの一方的な力であればどうだろうか。

一厘もの勝率すら許さない、航空戦力の到達点であれば。

——ここが歴史の転換点。

地獄への扉はまだ開いたばかりだ。

3

ロウリア軍の第一弓兵隊隊長であるオリバーは焦っていた。

得体の知れない銀龍が空に降臨したと共に、自軍の飛龍部隊は一人残らず撃ち落された。

しかも、こちら側の竜騎兵だけを狙ったかのように撃墜し、相手側には一切の被害を与えないのだ。もはやロウリア側は軍として成り立たない程に混乱していた。

この銀龍が敵味方問わずに殺しているのであれば、それはただの災害であり、被害を受けてしまうのも仕方がないことであつた。

だが、こうも正確にロウリア兵だけを狙うのであれば、作為的なものであることは明

確だ。

全くもって理解できなかった。どうやってこれ程の力を持つドラゴンを手懐けたのか、どれ程の対価を支払ったのか。これは明らかに人が制御できる域の力ではない。

ギムの近辺に、伝説級の飛龍がいるという情報も無かったはずだ。そんなものがあればすぐにでも、大国が調査にでも来るだろう。

そもそも何故このような理不尽にさらされなければならぬのか。こちら側から侵略したとはいえ、まだ何も残虐な行為はしていないのだ。この街が堕ちればそうなっただろうが、自分たちはまだ何もしていない。

それなのに何故このような天罰がくだるのだろうか。

オリバーが頭を抱えながら現実逃避をしていると、

ボツツツばつつつ!!!! と。

再び、異様な音をたてながら、地面から焔獄が噴出した。ちょうど、両軍が争っている丘の直下の地盤から。

いや、本質的には違うのだろう、と弓兵隊長は三周ほど回って逆に冷静になった頭で考える。

(銀龍が通過した直後に地面から噴出することから考えても、あれは件の龍からの直線攻撃であろう。おそらく、ブレスか何かを放っているのだろうが、速すぎて着弾の瞬間

が見えないために、突然地面から炎の壁がせりあがったように感じるのだろうか。ならば――)

敵やその攻撃の速度からも、この地獄から生き残るための条件が、ただ単に距離を取るといふ事ではないのだろう。どうすれば無事に逃げられるだろうか、かつてない程のスピードで頭を回転させて一つの結論を得た後に、オリバーは味方がいない方面へ逃走を開始した。

## 4

オリバーの推測は正しかった。

詳細については異なるが、初見でこれだけの答えを導き出したのであれば、それは正解であると言っても過言ではないだろう。

その火焰の正体は、摂氏三千度にまで加熱された砂鉄による、気体状のブレードであつた。

かつて、アビニヨンの街を四方に切り抜き、教皇庁宮殿を爆撃した『地殻破断』、その派生型。

ブレード表面の『模様』を分子レベルで操作することによって、ミリ単位での超精密



爆撃を可能としたその『緻密爆破』<sup>グレネードスライサー</sup>は、乱戦状態となった戦場での支援爆撃を行うことも可能だ。

対大陸兵器のような大雑把な攻撃ではなく、正確無比な攻撃が必要とされる作戦のために制作されたこの超兵器は、効果範囲を設定するための正確なコントロールが必要であるが故に威力は『地殻破断』<sup>アースフレイト</sup>の半分以下となったものの、対人、対建造物兵器としての性能に一切影響はない。

事実、ロウリア軍の歩兵部隊は二度の爆撃を受けて、後詰めを除いた全部隊が蒸発していた。

今は前線に出ている部隊だけが狙われているが、いずれ後方に陣取る部隊にまで魔の手が伸びてくるだろう。

もはや全滅は避けられない。作戦遂行不可という意味での全滅ではなく文字通りの全滅を。

それでも。

操作系統までも自動化されたこの殺戮兵器に一切の慈悲はない。人間が操っているのなら別であったが、自立プログラムに感情はなかった。『彼ら』は無駄を切り詰め、効率的に兵を殺していくことしかしない。

情に訴えても諸共爆破され、降伏しようとしても、行動に移す前に殺害される。

『彼ら』は躊躇しない。

故に。

この惨劇が終わることは絶対にない。

5

十数分の地獄体験ツアーを終えた弓兵隊長オリバーは、自身の幸運と機転に感謝し、その場にへたり込んだ。足腰が弛緩して立てないでいるが、一軍人としての役割を果たそうとクワトイネ公国侵攻軍の本陣に通信を行おうとするも、一向に繋がらない。

分かり切っていたことだ。結局、こんなものは自己満足からの確認作業でしかない。

恐らく、本陣にいた幹部クラスの間は一人残らず亡くなったのだろう。そのうえ、隊長などの現場指揮官の大半も、指揮する部隊と共にあの世へ向かったに違いない。

オリバーは、銀龍が大部隊を優先して進路を取っていることに気が付くと同時に、錯乱した隊員たちを捨てて一人で逃げ出したために、辛うじて生き残れた。外聞を捨て、誰もいない茂みに籠りながら、自分の部隊が消し飛ぶのを見届けることで、自分自身の命を救った。

何も思わなかったわけではない。長年戦場を共にしてきた仲間たちが死ぬというの

はとても心苦しい。特に副長とは十年來の付き合いで、親友とも呼べる存在だった。それなのに。

あの時の自分は、銀龍の狙いが自分の部隊に向いてくれと、切に願った。部隊を犠牲にして、一人だけ生き残ろうとした。親友であった人間を見捨てて。

空爆が収まった時には涙が止まらなかつた。悲しみの涙でなく、喜びの涙で。涙が収まった今でも心に残っているのは『幸福』という感情である。親友を失った悲しみはどこにもなかつた。それ程に彼の心は壊れていた。

しばらくして、生存者を探し終えたあとで彼は歩きだした。

一人の人間として、友人の命を奪った最凶の存在を本国へと伝えるために。

一人の軍人として、銀龍からこれ以上の犠牲者を出さないために。

本国へと繋がる魔信機などとうに壊れている。食料も手持ちの携帯用しか無い。

水は火傷を避けるためにすべて使った。周囲には、血のように真っ赤に染まった灼熱の川しかない。

それでも彼は歩き出す。

祖国のために、一人の国民として。

中央歴1639年4月22日 クワトイネ公国 政治部会

学園都市からの援軍によって、西の町、ギムはロウリア王国に落とされずに済んだ。しかも、町には一切の被害が無いうえに、竜騎士を除いた軍隊の大半が無事であるという大戦果だ。それなのに、政治部会は重苦しい雰囲気にもまれた。

「――以上が、学園都市の援軍である超音速戦闘爆撃機なる兵器の戦果です」

参考人招致を受けた西部方面騎士団団長のモイジは、一連の戦闘の報告を行っていた。

「見間違いではないのかね。それほどの戦場だったのだ、気の一つや二つ動転していてもおかしくはないのでは？」

自信なきげに誰かがそう呟いた。だがそれは、彼が学園都市を下に見ているからというより、学園都市が此処まで絶対的な強さを持つことを信じたくない、という思いから来ているのであろう。自信が無いのも、学園都市の大使が一切の底を見せないように交渉を行っているために、真の実力を把握できていない、というのが実情だ。

モイジはそういった事情を把握しつつも、

「いいえ、もしあの光景が幻覚であるのなら、私は今ここにはいないでしょう。私の妻も無事では済まなかつたはずですよ」

「それはそうなのだろうが、いくら何でもこの戦果は信じられないのだよ。事実であるのなら、一体彼らはどれ程の力を持つことになるのだね？ それに、派遣されるまでの時間も異常だ。報告書が正しいのであれば学園都市へ戦争の開始を伝えてから、たった五分後に援軍が到達していることになる。それだけの時間で到着したとでもいうのか、まったくもって理解不能だ、正気の沙汰とは思えない」

「しかし……………」

モイジがなんとか説明しようとするも、

「失礼、少しいいかね？」

秘書官から耳打ちされた外務卿が会話を遮った。

「先ほど、学園都市に問い合わせた事例に対する返答がありました。」

信じられないことでしょうか、と彼は続け、

「件の戦闘機なるものの性能はこちらで確認したものと大した差はなく、概ね一致しているとのことですよ」

「わざわざわつ!! と。」

過去に類を見ない程に政治部会は騒めいた。

ああでもない、こうでもないで野次を飛ばしたりもしたが、

「静粛に!!!!」

首相カナタの発言により、すぐに静まり返った。

「いずれにしろ、これで陸からの侵略は防げた。これ程の被害を与えたのなら、今後は陸からの侵攻はないとみてもいい」

ならば。

「学園都市にロウリア海軍の撃滅を依頼しろ!! 報酬ならいくらでもくれてやれ! 何

としてでも彼らに援軍を派遣させるのだ!」

首相は声を張り上げ、そして宣言した。

6

二日後に、クワトイネと学園都市との交渉はまとまった。

しかし、しばらくして首相室から、

「予算が…今年度の予算が……」

などのうめき声が聞こえてきたとかこなかったとか。

# 第四話 明確な分岐点

Left:?:

1

クワトイネ公国、第四航空基地、一番滑走路

中央歴1639年4月25日

おりひめⅢ号からの観測により、ロウリア王国が、四千隻以上の大艦隊を出向させたという情報を掴んだ学園都市が、派遣部隊をクワトイネ公国へと送り込んだ。学園都市としては戦場へと直通で向かうこともできたが、先のギム戦役で活躍した学園都市製兵器の能力を見たいと懇願したクワトイネの上層部の意向に従い、観戦武官を一人連れていくことになった。

「これが……飛龍だというのですか……?」

第四航空基地のエースパイロットであるケリシスは目の前にそびえたつ巨大な構造物に圧倒されていた。

「いいや、そうじゃないにやー」

機内からどこか気が抜けた声が聞こえてきた。

「上のほうから話は聞いてないかにやー。こいつは超音速爆撃機つー学園都市製の航空兵器なんですたい」

H s B — 13

全長百メートル程の銀の翼を持つ、空の支配者。

学園都市内では若干旧型機にあたるが、この任務に最適とばかりに、保管庫から引つ張り出された航空兵器である。これ以上の速度が出る機体もあるが、それと同時に肉体の凍結処理も必要となるので、そんなものに観戦武官を乗せるわけにはいかない。

よってこの兵器を差し向けることとなったのだ。

「あなたは？」

突然現れた金髪サングラスにケシリスは問いかけた。

「オレは土御門元春。まあ、学園都市トップの使いっぱしりみたいなものだと思ってくれていいにやー。歓迎するぜい、クワトイネの竜騎士殿。こんな狭い機内じゃたいしたものを出せねえが、今の内にゆっくりにくつろいでくれ。」

にやーにやーサングラス改め土御門元春は機内へ案内しながら続ける。



「さて、もうすぐ出撃準備が整うが、何か聞きたいことはあるかにやー？」

「いえ、これといったものは特に」

「ならサツサとここに座るといいにやー。ずっと立ってたままじや全身大怪我するぜい」

土御門の軽い脅しに一瞬、ピクツと反応したケシリスであったが、

「なあに、こいつにさえ座っていれば安全は保証される。ちよつとした『念動能力』モドキを発現させて搭乗者を慣性力から保護するつー仕掛けがあるからにやー。まあ、余程の急旋回、急加速をしない限りはなにも感じないだろうぜい」

『『念動能力』ですか？』

異世界では馴染みがないのだろうか、と土御門は考えながら、

「学園都市で超能力開発つてのが行われていることは流星に知っているにやー？」

土御門はケシリスが頷いたのを確認して、口を開く。

「簡単言うと『念動能力』つてのは――」

言いかけたところで、空間表示型のディスプレイにメッセージが表示された。

「ん？もう時間みたいだにやー。続きはコイツが飛んでからにするかにやー。おっと、シートベルトはむやみに外すなよ、億が一に慣性制御装置が作動しなかつたら、そのまま陀仏になるからにやー」

それを聞いたケシリスは慣れない手つきで、慌てて体を固定する。

「それでは、超音速での空の旅をご堪能あれ。作戦空域には十数分で着きますが、どうぞごゆっくりおくつろぎくださいにやー」

土御門が合図を出すと、その巨体が垂直に浮かび上がり、音を置き去りにしながら西へと飛び去った。

2

クワトイネ領海上、超音速爆撃機機内

中央歴1639年4月25日

「え？それでは、国ごと転移しただけでなく、国外にいた人間までも一緒に転移してきたことになるのでしょうか。いくら何でも信じられないのですが」

観戦武官ケシリスは、スクリーンを流れる景色に圧倒されたのちに、土御門から転移の経緯を聞いて驚いた。

「まあ、言いたいことはわかるぜ。オレだって初めは信じられなかったしにやー。だが、

あの日気づいたときには、既に学園都市にいた。オレが学園都市に転移したつてだけなら、まだ信じられたが、学園都市が丸ごと異世界に召喚されましたつー話になるとな。外部との通信途絶やら星の位置の変動、他大陸の消失つてのを確認したら流石に信じたが、未だに記憶操作とかを疑ってるんですけどい」

ま、義妹も一緒だったのが幸いだったにやー、などとのたまう土御門を横目に見ながらケシリスは考える。

（嘘を言っている気配はなかった。コイツが相当のやり手だとしても、こんな嘘を吐く理由はないはずだ。まさか、事実だともいうのか。しかし、かの列強も自らを転移国家と称していたな。今まで眉唾物だと思っただが、双方ともに機械文明であることからしても、可能性はある……のか？）

彼は真偽を探るためにも土御門に問いかける。

「そういえば、列強国にも同じような転移国家あるらしいですね。確か……一万二千年前だったかなあ……そのくらいにこの世界へ転移してきたらしいですよ。まあ、ほとんどの人間は信じていないようですが」

ピクツと、長年の暗部活動で鍛え上げられたはずの土御門の表情が少し歪んだ。

突然黙り込んだ土御門を疑問に思うケシリスであったが、

「どこだ？」

「へっ？」

「どこの国だと聞いている」

急に真面目な口調となった土御門に困惑しながら、ケシリスは返答する。

「えっ、えっと、ですから列強国のムーですよ。ご存知なかったのですか？」

「場所は？」

間髪入れずに土御門が続ける。

「えっと、公国から西に——」

ケシリスは懸命に説明したが、いまいち要領を得ない。

土御門は一瞬ためらったものの、衛星写真をもとにした世界地図をディスプレイに表示した。

「なっ、これは——」

世界の果てまで表示された地図に驚愕し、声が途切れたケシリスであったが、土御門に一睨みされると慌てて説明しだした。

「ここです、地図の中央部の——」

説明を聞き終えた土御門は、いつもの軽い口調に戻ると、

「済まなかったにやー。少しばかり思うところがあつてな。まあ、情報提供感謝するぜい」

「よく分かりませんが、役に立ったのならよかったです」

しばらく会話していると、デイスプレイにメッセージが表示された。

壁にある装備品を一つ取り、状況が分かっているケシリスに、

「なに、ちよつとした通過儀礼だ。直ぐに終わるだろうから座って待っている」

謎の機械の電源を入れながらそう呟いた。

### 3

ロウリア王国東方討伐海軍、旗艦ロイズ、艦橋

海将のシャークンは困惑していた。

『はあ、いい、ロウリア海軍の諸君、こんな辺境までわざわざご苦勞。だが残念なことに、この先はクワトイネの領海、つまり、侵入は禁止つっわけだにやー』

理論上、解析が極めて難しい魔導通信機から、明らかに関係者でない人間の声が聞こえてきたのだ。しかも暗号はパーパルディア皇国からの支援を受けて作られたもので簡単には解けない。ましてや文明圏外の蛮族共に解析できるような代物ではなかつたはずだ。

シャークンは様々な可能性を考えるも、謎の人物からの通信は続く。

『おっと、一度に話されても分からないうぜい、オレは別に聖徳太子でも何でもないので、いやー。だがまあ、オマエらが聞きたいことならわかる』

同時に幾つもの通信機に介入できるのか、そう言いながら謎の人物は続ける。

『オレは土御門元春だ。学園都市からの援軍として派遣された部隊の指揮を務めている。率直に言おうか。今すぐにその海域から離れる、それ以上踏み込んだら、テメエら命の保証はしない。だが、尻尾巻いて逃げ帰るのなら追撃はしない。繰り返すぞ——』

そこまで聞いて、シャークンは吐き捨てるように言う。

「はっ、何かと思えば学園都市か。一体どんな大国が介入してきたのかと思つたが、貴様らみたいな小国だつたとはな。それで、新興国家——もとい、新興都市如きが誇り高き我が海軍をどうすると？内容によつては——」

『分からなかつたか？壊滅させるつつつたんだ。そんなことも理解できないつてなら、ロウリアの海軍は余程人員不足つてことになるがにやー』

「貴様ツツツ!!言わせておけば!!我々を誰だと心得ているツ!!我らは誇り高き

『あんた今、オレ達が通信に介入出来ているつて事実を忘れてるだろ?』

「ツ!!」

『だろうと思つたよ。この状況でその話し方を続けられるのなら、余程の樂觀主義者か、もしくははこの状況ですら把握できない馬鹿のどつちかだ。まあ、要するにツケが回つてきたということだ。今まで学園都市に全く注意を向けなかつたことへのツケがな』

軽蔑するかのような声で土御門は吐き捨てる。

「たつ、ただの偶然であろう!!そんなもの、幾らでも偶然で片付けられる!!」  
『声が震えているぞ。ただの偶然で解けてしまうような暗号じゃなかつたことはアンタが一番理解しているだろ?』

とはいえ、学園都市にとつて暗号を解くことは容易かつた。むしろ問題は魔法による通信に介入する方法がなかつたということの方が大きかつた。だが、木原一族が『魔法』

に強い関心を抱いてしまったがために、魔法の解析は僅か一ヶ月で完了した。

二ヶ月が経つ頃にもなると、機械による魔法の再現までもが成され、学園都市に新しく魔法学科が成立することになった。

つまるどころ。

H s E C H | 0 0 V e r s i o n . M

周辺を飛び回る魔力の波のパターンを解析して、数式として読み取ることにより、魔法的な通信すら傍受するシステム。まだ試作段階のため効果範囲は狭いが、最終的にはこの世界すべての通信情報を思うがままに閲覧できることだろう。そのような目的のために作られたので、かつての世界の通信傍受システムからもじって名付けられた機械だ。

『いいか、これで最後だ、降伏しろ。もはや撤退は受け入れない。戦って死ぬか、降伏して生き延びるかだ。簡単な二択問題だが、アンタが賢明な判断を下してくれることを祈っているよ』

「貴様ツツ!!どこまで愚弄すれば気が済む!!誇り高き王国軍人である我々に『降伏』の二文字は無い!!!!!!そもそも、姿すら見せない卑怯者どもに我々が敗北するとで  
も——



『なら、その誇り諸共に死ね、益暗共』

直後、艦隊を縦に切り裂くかのように摂氏八千度にも及ぶ巨——気の刃——襲イ——  
り——……………。

## 4

直撃を受けて死んだ人間はまだ良かった。熱によって一瞬で死んだ人間も、まだ幸せなほうだったはずだ。

なぜなら、彼らの大半は、

副次的に発生した水蒸気爆発の爆風によって、限界まで沸騰した海水の中に突き飛ばされたのだから。

5

こうして、一つの海戦が終結した。

後に、鮮血の海域と呼ばれることになるその海域に、

——生存者の反応は見つからなかった。

## 第五話 明かされる真実 Already Too L

a t e . . .

1

ロウリア王国クワトイネ征伐隊東部諸侯団

ギム西側二十キロメートル地点 . . .

「先遣隊に連絡はとれないのか!!?!」

副将アデムが、軍の通信隊を怒鳴りつけるが、

「導師から、魔通信を送っていますが、返信がありません」

数日前から先遣隊が消息を絶っている。

しかし、先遣隊とはいえ、三万もの軍、一会戦としては非常に多い大軍だ。通信を送る前に全滅するなんて事は考えられなかったが、クワトイネへと向かったはずの艦隊も消息を絶ったとも聞く。まさかとは思いますが……。

アデムは頭を振りながら、

「偵察隊はどうなっている?」

「間もなく先遣隊が消息を絶った付近の上空に到達します」

副官がそう答えるとアテムは、

派遣した部隊が真実を持ち帰ってくれんことを願いながら、今後の作戦を考え始めた。

2

ロウリア王国クワトイネ征伐隊東部諸侯団所属、ワイバーン小隊 竜騎士ムーラ

「そろそろ……か」

エジエイ周辺の偵察隊十二騎は、それぞれ分かれ、様々な方向に向かっていた。ムーラはその中でも先遣隊が消息を断った付近が割り当てられていた。

今日は少し涼しく、晴れた空ではあるが、雲が多い。少し飛び辛いが気分は良い。

数日前に消えた先遣隊。彼の任務はその真偽の確認であった。

「ん？」

何か、人のような姿が見えたが……まさか——

「な……なんだ？これは……？」

巨大な渓谷のようなものが、あちこちにある。そして、それ以外の場所にも、もともと人だったであろう『モノ』が放置されている。馬も人も問わずにすべて混ざっていた。

そして、ロウリア王国の悪魔の象徴である漆黒の鳥がその肉をついばんでいる。  
着陸を行う。

しかし、動く人間は一人もいない。

「ぜん……めつ……?!全滅しただと!!?!そんなバカなことが——」

恐怖で動けないムーラに、

グワアツ!!と。

東の方向を見ていた相棒のワイバーンが警戒の鳴き声をあげようとして——。

バババババツツツ!!!!!と。

激しく空気を叩く音が聞こえる。目を凝らし確認すると、超高速で飛翔している何かを発見した。

「あの竜は何だ?!」

遠い……けし粒のような大きさの黒い点が見える。何か、魂の無い者、竜というよりはむしろ物。ただ、速度が異常であるという事しか分からない。

「ツツツ!!!!!」

突如としてその竜から煙が吹き出し、小さな火炎が音速を超える速度で自分に向かってくる。ムーラは戦場での経験からその正体を看破した。

「導力火炎弾か!」

ムーラは飛び立つ。いくら遠くから速い攻撃を受けても、気付いていれば避けることができる。こういつた攻撃は、不意打ちでこそ効果がある。そう考え、一瞬気を抜くも、「なツツ<sup>!!</sup>付いてくるだ<sup>!!</sup>」

敵の火炎弾は軌道を変えてムーラを捕捉し続ける。

「クソつたれっつ<sup>!!</sup>」

全力で飛び廻って回避を試みるも、敵の火炎弾はその度向きを変える。

馬鹿げている。

そんな攻撃は聞いたことが無い。

「先遣隊は全滅<sup>!!</sup>!! 現在、本騎も攻撃を受けている!! 敵の正体は不明、追尾式の導力火炎弾を放てる模様<sup>!!</sup>!!」

死期を悟り、ムーラは魔通信具に向かつて、伝えられるだけの情報を叫んだ。

「ちっ……畜生ツツ<sup>!!</sup>!!」

顔に叩きつけられる合成風、死の予感、脳の中を様々な思考が廻る。

——いつてらっしやい。妻は、戦に行く時、笑顔で送り出してくれた。

——ほら、お父さんにいつてらっしやいは？

——あつ、あつ。一歳になったばかりの娘が笑顔で抱きついてくる。

——これ……お守り、持っていて。

良く解らない軽い金属性の物体を渡された。それからはいつもお守りとして腰に着けている。

そんな妻のためにも。

「死んで……たまるかアアアッ！！！！！！」

——急上昇、導力火炎弾は、やはり軌道修正し、自分に向かってくる。

——急降下、無理な操縦があたり、飛龍がバランスを崩す。

そして。

腰に着けた妻からもらった大切なお守りが外れ、

最愛の女性からの加護を失った竜騎士へ、火炎弾が——

## 3

ロウリアの竜騎士を攻撃したのは、学園都市製のヘリコプターだった。

H S A F H | 2 1

『一枚羽』とも呼ばれるこの攻撃ヘリは、ロウリアからの小規模な襲撃の対処を行うた

めに国境付近に配備されていた。

新世界で万が一、植民地を獲得しなければならぬ状況に陥った際に、低コストで運用できる治安維持兵器として開発が進められていたものであったが、クワトイネ防衛のため、安価に使用できる対空・対人兵器が必要となり、この機体に白羽の矢が立った。

一枚羽は対空兵装として、赤外線誘導式の、短距離対空用ミサイルのSRM31を搭載し、対空・対人兵器を兼ねて、空気抵抗により弾丸が超高温に至る『摩擦弾頭』を装備している。『四枚羽』のさらに廉価版である格安兵器ではあるが、異世界の軍隊にとつての脅威は語るまでもないだろう。

フルオートで弾を打ち続けてもなお、一時間以上の継戦能力を持つこの兵器を撃墜できるとは限られる。それも、多大な犠牲を払った上での戦果だ。そんなものでは到底勝利と呼べない。

これが科学の極致。  
故に。

ただの軽金属製のフレアでSRMの追跡から逃れられる可能性は、絶無である。



とある戦場で、爆炎が発生した。

それに伴い、空中からかつて人だったモノが撒き散らされる。

その、誰かが愛した妻からのお守りは何の効果も与えることなく、『残骸』の隣に、悲しげに横たわるだけであつたという。

## 4

ロウリア王国東部諸侯団

「一体どうなっているのだ!!!!」

副将アテムは絶叫する。

偵察隊と通信を行っていた最中、突然に、悲鳴と共に十二騎の偵察隊と連絡が途絶えたのだ。

しかも、その中には『先遣隊の全滅』『追尾性能を持つ導力火炎弾』、といったロウリア軍にとって無視することができない情報も存在していた。

「現在調査中でして……」

「具体的にどのような方法で調査しているのか！たわけがあー！」

静まり返った空気の中、将軍パンドールが話し始める。

「まあ仕方がない、出来る事をしよう。本軍の護衛は？」

「ワイバーンが百騎常時直衛にあがります。残りはギムの竜舎で休ませています。もちろん、命あれば、いつでも出撃いたします」

その返答に、パンドールは僅かに首を傾げながら副長に問う。

「百騎も？ いや、先の報告からも察するに、今まで以上に敵を警戒するべきか……。」

「ええ、今までの部隊の消失事件、もしかしたら敵はとてつもない力を手に入れたのかもしれない。それによって本軍が壊滅したら、今回のクワトイネ攻略作戦は失敗となりますから」

「そうか……」

上空には多数のワイバーンが編隊を組み、乱舞している。その雄姿は何者が来ても勝てると思わせるほどの威容だ。伝説の「魔帝軍の行進」でさえ、これほどの軍があれば、きつと跳ね返せるだろう。

しかし、敵は一体何もの——

パンドールの思考は轟音によって強制的に中断させられた。

ゴツツツばつっつ！！！！と。

上空を乱舞していたワイバーンのうち、三十二騎が突如として爆炎に飲み込まれ消滅した。

さらに。

ガガガガッツツ!!!!と。

追加で十二騎が、次の瞬間には四十八騎が、跡形もなく吹き飛ぶ。

「なっ——何だ?!何が起きた!!!!」

パンドールは上空を見上げながら、訳も分らないまま叫ぶと、

東の空に六つの黒点が見えた。

徐々に近づいてくるその黒点から赤い光のラインが無数に伸びると同時に、

最期の八騎がバラバラにその肉体を寸断され、落ちていく。

通信機から断末魔が聞こえる。

軍上空を凄まじい速度で通り過ぎた『それ』は鏃のような形で、黒色の装甲をもって

いた。

H s C D A—13

かつて、超音速戦闘機と共に日本上空の防御を担った小型戦闘機。

その改良型がロウリア軍本陣周辺を飛び回る。

音速の十二倍という猛烈な速度で大気を切り裂いた戦闘機によって発生したソニッ

クムープが轟く。

「はっ……速すぎる!!!!何なのだコイツはツツ!!?!」

未だ理解することができない。

しかし、悲劇は待つてくれなかった。

先ほど飛び去った敵の鉄龍が戻ってきて、さらに焰の槍を発射する。

ワイバーンの数こそが軍の力と思っていた。これだけの数のワイバーンがいれば、炎神龍にさえ勝てると思っていた。

それが……まるで何かのゲームのように一方的に撃破される。

「畜生つつつ ！！！！！！」

吹き飛ばされる滑走路を見ながらパンドールは悪態をつく。

ワイバーン部隊などとうに存在しない。対抗手段などなかった。

將軍。パンドールの脳裏に、『先遣隊の消滅』という言葉が思い浮かぶ。

「何か、こつちに向かっ——」

最期まで言い切ることはできなかった。

直後。

一瞬にして。

灼熱の業火が本陣を文字通りの意味で『蒸発』させた。

これが学園都市。生半可な軍隊では彼らの道を遮ることはできない。戦況は今、完全に傾いた——。

### 行間3

ロウリア王国とクワトイネ公国の戦争は、軍隊が壊滅し、国王を確保されたロウリア側の敗戦で幕を閉じた。

だが、この戦いは『序章』に過ぎない。

まだ、学園都市は全力を出していない。

世界最強と名高い『魔法帝国』との戦争は未だ始まっていない。学園都市の『暗部技術』というものはこの程度のものではない。

この物語は——

ただ存在するだけで『世界』を歪めるほどの力を持つ帝国の、絶対的な力を以って『世界』の常識を覆していく科学都市の、

——圧倒的な不条理による一方的な蹂躪劇である。

## 第二章

## 第六話 運命の転換点 New Generation

1

パーパルディア皇国、第三外務局

「あの計画はどうなっている！」

「はい……間もなく皇国監査軍東洋艦隊二十二隻がフェン王国に懲罰のため出撃します」

そう叫んだ上司に、冷や汗をかきながらも部下が答える。

パーパルディア皇国第三外務局、皇宮を離れ施設の外側に位置するこの部署は、日本でいうところの外務省であり、外交を行うが、パーパルディア皇国では第一、第二、第三の三つに分かれている。

第一外務局は、皇宮の内部に位置し、第3文明圏の5大列強国のみを相手として外交を行う部署だ。対外関係に細心の注意が必要であり、高度な政治判断が求められる、勤務員はエリート中のエリートである。

第二外務局は、皇宮の外側に位置し、列強国以外の文明圏に属する国家を相手にしている。国力を後ろ盾にし、無理な要求を押しつつ、国益をいかに引き出すかが求められている。また、対象には列強保護国も含んでいるため、一方的に高圧的になるわけにもいかず、高度な判断が必要であり優秀な人材が配置される。

第三外務局は文明圏以外の国、いわゆる蛮国相手の仕事である。いかに高圧的に出て、相手から絞りとれるかが試される部署だ。蛮国は量が多いため、外務局人員の6割がここに属する。また、他の部署と異なり、独自の皇国監査軍と呼ばれる軍に命じ、懲罰行動を行わせる権限を有する。

また、三か月前には学園都市もこの第三外務局に接触を試みていたが、統括理事会で何らかの判断が下されたのか、ここしばらく大使は派遣していない。

#### 閑話休題。

第三文明圏列強国、パーパルディア皇国の東側約二百十キロメートルの位置に、まが玉を逆にしたような形の島国がある。

名をフェン王国という。

また、その東側には内海を挟んですぐフェン王国を鏡写しにしたような、同じくまが玉状をしたガハラ神国があり、そこから東へ五百キロメートルほど離れた位置に学園都

市がある。

皇帝の国土拡大計画の一端として、第三外務局では、フエン王国の南部の森林地帯をパーパルディア皇国に献上するよう求めた。皇国外務局としては、追加で国土を得たという実績が残る。フエン王国としても、使用していない土地を献上するだけで、対価として様々な利益を得られる絶好の機会であった。

準文明圏国家として、技術供与が成され、さらにパーパルディア同盟国として国名に箔が付き、周囲からの侵略の可能性が激減する。国土が発展し、国も富む良晏であったはずだ。

しかし、予想に反してフエンはその案を蹴った。

そのうえ、第二案として準備していた、同場所の四百九十八年間の租借案を出すも、フエン王国の剣王シハンに再び断られた。

——列強国の顔をつぶされた。

そう判断した局長カイオスの命により、監査軍東洋艦隊の派遣が決定された。



フェン王国、王宮騎士団訓練場

「アイン、ちよつと来てくれ」

王宮騎士団の十士長アインは、剣を振っていたところを騎士長に呼び止められた。

「何でしょう?」

アインの上司である騎士長マグレブは神妙な顔をしながら、

「剣王シハンが呼びびだ」

「え? 私をですか?」

十士長ごのときが剣王に呼ばれるなんて今までにない事だった。

しかし。

「いや、私もだ。全騎士団の十士長以上の者が対象だ、どうやら国の一大事らしい」

——フェン王国首都アマノキ王城

「パーパルディア皇国と紛争になるかもしれない」

「つつつ ！！！！！！」

剣王が放った一言により、場に衝撃が走った。

フェン王国には魔法が無い。そこで問題になるのが、魔通信が使えないことである。

情報伝達速度の差で、同量の兵力でも戦力差は変化する。

パーパルディア皇国とフェン王国もその例に漏れない。

兵数、所有艦数、兵器性能、航空戦力数。そのいずれでも負けているのに、情報速度でも下回るフェンに勝ち目は無い。

戦力差は絶望的であり、さらに敵は列強だ。兵士の装備も全く違うので、数値以上の差がある。そもそも敵が文明圏というだけでも避けるべきであるにも関わらず、よりによって相手は列強……正気の判断とは思えない。

ざわめきを無視して、剣王は続ける。

「現在、ガハラ神国にも援軍をもらえないか、要請している。各方面に対策を実施中だ」  
剣王はガハラ神国の首都、タカマガハラ神宮に住まう神王ミナカヌシに親書を送っていた。かの国の風竜の力を借りれば、幾らかマシにはなるだろう。

「とにかく、各人戦の準備をしておいてくれ」

その言葉で、張り詰めた空気が少し流れた。

「剣王、学園都市なる国からの使者が、国交を開くために交渉したいと参っております。いかがいたしましたでしょうか？」

会議が終わり通常の執務に戻った際、王の側近である剣豪モトムが話しかける。

「学園都市？ ああ、ガハラ神国の大使から情報のあった、ガハラ東側にある新興国家

か。あの辺は、小さな群島で、海流も乱れていたな……。各島の集落が集まって国でも作ったのか？」

剣王は小さな島国であろうと推測した。

「ええ、ちなみに、人口は二百三十万人程らしいです」

「ふむ、まあ妥当なところか……。だがこの状況下で何故そのような小国の話を？」

モトムは資料を捲りながら、

「それが……。ガハラ神国経由の情報に少し気になるものがありました……。両国とも、すでに国交を結んでいるのですが、ガハラが学園都市は列強をも超える超文明を実現している……。」「

「ほう……。列強を超えるというのは過剰であろうが、ガハラ神国がそこまで褒めるのであれば、それなりの国家なのだろうな……。」「

剣王、他の側近は学園都市の使者に会うことにした。

## 3

国中が厳しく、厳格な雰囲気漂っている。武士の治める国……。これが、学園都市の使者が抱いた印象だった。生活レベルとしては、低く、国民は貧しい。しかし、精神レ

ベルは高く、誰もが礼儀正しい。日本が忘れた真の武士道のようなものがそこにはあった。

「剣王が入られます」

声があがる。派遣された外交官は立ち上がって礼をする。

「そなた達が、学園都市の使者か」

相手は達人の域を大きく超えている。『暗部』としての顔も持つ島田は、剣王の動きを見て感じ取る。

「はい……貴国と国交を開設したく思い、参りました。ご挨拶として、我が国の品をご覧下さい」

剣王の前には、学園都市からの様々な献上品が並ぶ。

日本刀、着物、真珠のネックレス、扇、運動靴……。

剣王は日本刀を手に取り、引き抜く。

「ほう……これは良い剣だ」

気を良くした剣王が呟いた。

そして、事前に聞いた、学園都市からの提示条件と、書類に間違い無いか確認する。

「失礼ながら、私はあなた方、学園都市を良く知らない」

話が続く。

「学園都市からの提案、これはあなた方の言う事が本当ならば、すさまじい国力を持つ国と対等な関係が築けるし、夢としか思えない技術も手に入る。我が国としては、申し分ない」

「それでは……」

外務省の人間の顔が明るくなる。

それを遮って剣王は続ける。

「しかし、異世界からの転移や、海に浮かぶ鉄船等、とても信じられない気分だ」

「なら、我が国に使者を派遣していただければ……」

「いや、我が目で見て確かめたい」

「と……言いますと?」

「貴国は、新たに水軍を創設したと言ったな?」

「ええ、そうですね。主戦力ではないため、あくまで『形』だけですが」

転移後、この世界の文明レベルが低いことに気が付いた学園都市は、砲艦外交が行われることを見越して戦艦を建造していた。現代戦では空母機動部隊が主力で、戦艦など時代遅れとなっているが、そもそも航空機が異常に発達している学園都市に『航空母艦』など必要ない。薄っぺらい空母よりも圧力を掛けられる、という考えもあり、結果的に戦艦が導入されることとなった。

「構わん。その内の一つをここに派遣してくれぬか？今年、我が国の水軍船から廃船が四隻出る。それを敵に見立てて攻撃してほしい。要は、力が見たいのだ」

使者達は面食らった。

通常、他国の軍が国交も無いのに来るといふのは、威嚇であり、細心の注意を払う。非常に嫌がるのが普通であるのに、この国は「力を見せろ」という。しかも首都アマノキの沖に持つてこいという。異世界で、しかも武の国だから、そんな事もあるのかと考え、理事會に報告した。

近日中に訓練も兼ねて、戦艦——H s B B Y—01を派遣する事が決定された。

## 第七話 紺碧の光線放つ救星主 All Stars

1

フエン王国、首都アマノキ沿岸部

「あれが学園都市の戦艦か．．．まるで城だな」

「いやはや、ガハラ神国から事前情報として聞いてはいましたが、これほどの大きさの金  
属で出来た船が海に浮かんでいるとは．．．」

剣王シハンが漏らした感想に騎士長マグレブが同意する。

「私も数回、パーパルディア皇国に行つた事がありますが、これほどの大きさの船は見た  
事がありません」

彼らの視線の先には、学園都市の最新兵器、H s B B Y—01が浮かんでいた。

沖合にはフエン王国の廃船が四隻、標的船として浮かんでいた。距離は護衛艦から二  
キロメートル離れている。剣王シハンは望遠鏡を覗き込む。今回は戦艦なる船が、一隻  
だけで攻撃を行うようだ。

「剣王、今から我が国の廃船に対する学園都市の戦艦からの攻撃が始まるようです」

その言葉と同時に、学園都市製の戦艦の主兵装、『陽電子衝撃砲』にエネルギーが収束

し始め、

どつっつガッツ と。

青白い光が、束と成りながら標的艦に突き刺さった。

直後、標的船は猛烈な爆発を起こし、消滅した。

爆散ではない、文字通りの『消滅』。そう表現する他なかった。

「……………これは……………声も出んな……………。……………なんとも凄まじい」

剣王シハン以下フェン王国の中枢は、自分たちの攻撃概念とかけ離れた威力を目の当たりにし、啞然としていた。

一回の攻撃で、四隻をあつさり沈める。しかも、有り得ない程の攻撃力で。列強パーパルディアア皇国でも、そんな芸当は出来ない。

「すぐにでも、学園都市と国交を開設する準備に取り掛かろう。不可侵条約はもちろん、出来れば安全保障条約も取り付けたいな……………」

剣王は少しばかり引きつった笑みで宣言した。

2

学園都市製戦艦、H s B B Y—01第一艦橋



学園都市製の超高感度レーダー『九九式空間電波探信儀』が、西側から近づく飛行物体を捉えた。時速にして約三百五十キロメートルで、二十機ほどが近づいてくる。

「レーダーに感あり。この反応は……ワイバーンロードですね」

金髪の女性レーダー手が報告を上げた。

「確か、西方にはパーパルディア皇国という国があったな」

「はい」

「フェン王国の軍祭に招かれているのではないのか？」

「……一応、フェン王国に確認をしましょうか」

その飛行物体はフェン王国首都アモノキ上空に至ったが、王国からの返答は無かった。

### 3

パーパルディア皇国皇国監査軍東洋艦隊所属のワイバーンロード部隊二十騎は、フェン王国に懲罰的攻撃を加えるために、首都アモノキ上空に向かっていた。

軍祭には文明圏外の各国武官がいる。その目前で、皇国に逆らった愚か者の国の末路はどうなるか知らしめるため、あえてこの祭りに合わせて攻撃を行うことが決定された

のだ。

これで、各国は皇国の力と恐ろしさを再認識することだろう。そして逆らう者の末路、逆らった国に関わっただけでも被害が出ることを知らしめる。

しかし、ガハラ神国の風竜三騎も首都上空を飛行している。

風竜が皇国ワイバーンロードを一目見ると、ワイバーンロードは、不良に睨まれた気の弱い男のように、風竜から目を逸らしてしまう。

よって。

「ガハラの民には、構うな。フェン王城と、そうだな……あの目立つ黒い船に——  
そこまで言つて、ようやく気が付いた。

「何だあの馬鹿げた大きさはつつ!!?! 蛮族如きがこんな船を……いや、外面だけならいくらでも作れるか……。なら、あの船モドキに航海能力、ましては攻撃能力など無い!!!! ただのこけおどしだ!! 蛮族には新兵器だとも勘違いさせられるだろうが、我らには通じぬ!!!! 命令変更だ、あの船に総攻撃を仕掛けよ!!!! 奴らの希望諸共、へし折つてやれつ!!!!!!」

彼の部下たちは、朝日を浴びて黒光りする巨大戦艦へ突撃した。

「未確認機、本艦に急降下——これは、魔力反応!!?!」

第一艦橋に悲鳴のような報告があがる。

「いかんつつつ!!?!」

次の瞬間、パーパルディア皇国の皇国監査軍東洋艦隊所属のワイバーンロード二十騎は、直下約五百メートル付近に停泊中のH s B B Y—01に向けて、導力火炎弾を放出した。

「未確認機、我が方へ発砲!!」

「出力最大!! 艦上方に『魔導防壁』を展開せよ!!?!」

H s B B Y—01は機関の出力を最大にし、唸りを上げる。

そこに、火炎弾が迫り、

ギユイイン!! と。

突如出現した青いヴェールが火炎弾を吹き散らした。

そして。

「対空戦闘用意!!?!」

戦闘班長の掛け声で、『四連装高角速射光線砲塔』八基が敵機に照準を合わせた。

「何だツツ!!」 今の障壁は!! 火炎弾を全て防いだだと!!?!」

急降下から、水平飛行に移行したワイバーンロード二十騎は、自身の攻撃が通用しないモノを前にして困惑していた。ワイバーンの強化個体であるロードの導力火炎弾は、並大抵の装甲では防御できない。列強国の砲艦でも無傷とはいかないだろう。

だが、目の前にあるものはなんだ？

船全体を包み込むように結界魔法が張られているとも言えるのか？ いや、そんな魔法は聞いたことがない。列強でも実現されていないのだ、文明圏外の蛮族共に作れるはずがない。

（ならば一体どういう事だ？ 列強以上の力を持つ国など、この世界にあるはずもないし……まさか、『果ての世界』か？ それならば未発見であるのも頷けるが——）

——竜騎士の思考はそこで停止した。

何か特別なことが起きたわけではない。彼はただ、カシヤン という音を聞いただけである。

それ自体は非常に小さい音だった。しかし、致命的な事態に陥ったような気がしてならない。その感覚に従い、振り向いて敵船を確認するために振り向き——

——目があつた。そんな風に感じた。

振り向いた先に人がいた訳ではない。だが、『ナニカ』に狙われている気がしたのだ。現に、ハリネズミのように船に突き刺さる鉄の棒が寸分狂わずこちらに向かつて……彼は全力で急降下した。

直後。

赤い閃光に引き裂かれた仲間の遺体が、竜騎士の頭上に降り注いだ。

「ツツツッ!? ⊠」

明らかに即死。しかし理由が分からない。

あの細長い棒は大砲だったのだろうか。だが何故上空を飛び回る標的に、こうも正確に命中させられるのかが分からない。こんな事、決して人間にはできない。

相手が人間でないとするのなら何だ？ 古の魔法帝国でも復活したとでも言うの

か!?

(もしそうなら、急ぎ本国へ報告をしなければ——)

ズバチユツツ!!!! と。

上空の竜騎士を殲滅し終えたパルスレーザーが、低空飛行を行っていた最後の一騎を絡め取った。

剣王シハン及びその側近たちは、開いた口が塞がらなかつた。

ワイバーンロードは、間違ひなくパーパルディア皇国のものだろう。我が国が、ワイバーンロードを追い払おうと思つたら、至難の技だ。

一騎に対して一個武士団でも不足している。そもそも、奴らは鱗が硬く、弓を通さない。

バリスタを不意打ちで直撃させるか、我が国に伝わる伝説の剛弓、「ベルセルクアロー」を使うしか無いが、ベルセルクアローは硬すぎて国に三名しか使える者はいない。つまり、戦闘態勢にあるワイバーンロードを仕留めるのは、事実上不可能に近い。よつて、文明圏外の国で、一騎でもワイバーンロードを落とすことが出来れば、国として世界に誇れる。

我が国は、ワイバーンロードを叩き落すことが出来るほど精強であると。

それを、学園都市の奴らは、いともあっさりと、地面を這うアリの踏み潰すかのよう  
に、ワイバーンロード竜騎士隊の精鋭を二十騎も叩き落してしまつた。

歴史が動く、世界が変わる予感がある。

ワイバーンロードは、おそらく自分たち、フェン王国への懲罰的攻撃に来ていたのだ

ろう。

学園都市をこの紛争に巻き込めたのは、天運ではなからうか……。

剣王シハンは笑いながら、そう考えた。

## 7

「竜騎士隊との通信が途絶しました」

魔導通信を担当する武官からの報告によって、艦隊に衝撃が走った。

「いったい何があった……」

提督ポクトアールは思わず嘆きそうになる。何かいやな予感がする……。しかし、これは第三外務局長カイオスの命である。国家の威信をかけた作戦だ、実行しない訳にはいかなかった。

皇国監査軍東洋艦隊二十二隻は、フェン王国へ懲罰を加え、今回ワイバーンロードを倒した皇国にたてつく者に対し、各国武官の前で滅するため、風神の涙を使用し、帆をいっぱい張り、東へ向かった。

——科学と魔術、双方の技術を利用して建造された化物戦艦が待ち構えている海域に……

## 第八話 次の喧嘩を始めましょう Release\_M

## o n s t e r

1

学園都市外交部は事態の悪化を防ぐため、情報収集を行ったところ、下記の事項が判明した。

○フェン王国及び各国武官の反応から、襲ってきた部隊は、フェン王国西側約五百キロメートルにあるフィルアデス大陸の第三文明圏に属する世界五大列強国の一つ、パールディアア皇国で間違いないと思われる。

○パーパールディアア皇国の皇国監査軍と呼ばれる部隊であり、文明圏外の国を対象とする第三外務局の影響により動く部隊である。

○フェン王国に対する懲罰的攻撃を、各国関係者の集まる軍際に合わせ、自己の権威を高め、他国を従わせるために行われた、いわゆる砲艦外交のような攻撃と思われる。

○学園都市の人工衛星から、フェン王国西側約二百キロメートルの位置を、速力十五ノット程度の速度で移動する二十二隻の艦隊が確認されている。

事態は切迫していた。



本来、本日の夕方にフェン王国側との会議が予定されていたが、外交部が予定を早めるよう求めたため、急遽場が持たれることになった。

来賓室で待つ学園都市の一団だったが、

一時して、フェン王国騎士長マグレブが現れた。

「学園都市のみなさま、今回フェン王国を不意打ちしてきた者たちを、真に見事な武技で退治していただいたことに、まずは謝意を申し上げます」

騎士長は深々と頭を下げる。

「いえ、我々は、貴国への攻撃を追い払ったものではありません。我々に攻撃が及んだので、振り払っただけでありあます」

「さっそく、国交開設の事前協議を……実務者協議の準備をしたいのですが……」

フェン王国は、もう学園都市を味方に引き入れたくて、たまらないようである。

「貴国は、もう戦争状態にあるのではないですか？状況が変わりましたので、我々の権限だけでは、戦争状態にある貴国と、現時点で国交開設の交渉が出来ません。事態の重みを考えるに、一度帰国し、内容を詰めてから再度ご連絡したいと思います。」

外交部は西から来る艦隊が到着する前に、一刻も早く、この場から引き上げたかった。「解りました。良い返事を期待しています。ただ一つ、これだけは、心に留めおいて下さい。あなた方があっさりとは片付けた部隊は、第三文明圏の国、しかも列強パーパルディ

ア皇国です。我が国は、パーパルディアから土地の献上という一方的な要求をされ、それを拒否しました。それだけで襲つて来たような国です」

騎士長は嘆きながら続ける。

「過去に、我々のようにパーパルディアに懲罰的攻撃を加えられた国がありました。その国は敵のワイバーンロードに対し、不意打ちで竜騎士を狙い殺害しました。たつたそれだけで、かの国はパーパルディア皇国に攻め滅ぼされ、国民は、反抗的な者はすべて処刑され、その他の全ての国民は奴隷として、各国に売られていききました。王族は、親戚縁者すべて皆殺しとなり、王城前に串刺しでさらされました。パーパルディア皇国、列強というのは、強いプライドを持った国というのを、お忘れなさらぬようお願いいたします」

一通りの脅しを聞いた後、外交部の一団は統括理事会へ報告を行った。

## 2

「ふむ、経過は良好のようだな」

何処かで声が聞こえた。

「ここ」まで『計画』通りに事が進むのはいつ以来のことだろうか」

そんなティーン特有のソプラノボイスが、とある一室に鳴り響く。

## 3

フェン王国、王宮直轄水軍十三隻はパールディア皇国との戦争の可能性があつたことから王国西側約百五十キロメートル付近を警戒していた。警戒にあたる水軍は、フェン王国の中では精鋭をそろえており、比較的経験の浅い者は、今回警戒の任にはつかず、軍祭に参加している。水軍は木製の船に効率の悪そうな帆を張り進む。

船には、火矢を防ぐための木製盾が等間隔に整然と置かれ、敵船体を傷つけるためのバリスタが横方向へ向かい、三基ずつ設置されていた。火矢を放つための油の壺も、船上に配置されている。

十三隻の水軍を束ねる旗艦は、他の船に比べひとまわり大きく、船首には一門だけ大砲が設置されている。

水軍長クシラは西方向の水平線を睨んでいた。

「軍長、パールディア皇国軍は来ますかね……」

「先ほどワイバーンロードが我が国に向かい飛んでいった……必ず来る！」

それを聞き、艦長は不安げに呟く。

「……勝てますか?」

「ふ……列強国相手とはいえ、タダではやられんよ。うちはかなりの精鋭揃いだからな。それに……」

軍長は艦首にある大砲を見ながら、

「あれを見よ! 文明圏でのみ使用されていると言われる魔道兵器だ! 球形の鉄の弾を一キロメートル近くも飛ばして、船にぶつけ、その運動エネルギーをもって破壊する。これほどの兵器を船に積んだのだ!」

軍長は艦長にそう言うが、彼は知っていた。列強には、砲艦と呼ばれる船ごと破壊出来る超兵器が存在することを。

フェン王国のトップシークレットだった。おそらく砲艦は、このフェン王国最強の船、旗艦剣神のように、文明圏に存在する大砲と呼ばれる魔道兵器を船に積んだものに違いない。しかも、その最強クラスの船が、列強では普通に存在するのだろう。

(どうすれば——勝てる?)

水軍長クシラの頭脳は、来るべき列強パーパルディア皇国との戦闘に備え、フル回転を始め——

「艦影確認!! 艦数二十二!!」

マストの上で見張りをしていた見張り員が大声で報告する。

水平線に艦影が見える。望遠鏡と通して見えるその艦は、フェン王国王宮直轄水軍の船に比べ、遙かに大きく、先進的である。デザインと機能性を兼ね備えたマストに風の魔法で吹き付けられる風を受け、フェン王国式船より速い速度で船は進む。

水平線から徐々に大きくなっていく敵艦隊は、フェン王国水軍長クシラの目を持つてしても優雅であり、美しく、力強い。各艦の乱れない動きから、錬度の高さが伺える。

「総員、戦闘配備!!」

号令と同時に船員が慌しく動きまわる。

しかし。

「思ったより接近が早いな……………」

彼の想定する船速よりも速く艦隊は近づいてくる。

「くっ…………初弾だ!最初に一番威力のある攻撃を行ない、その後魔導砲を放ちながら最大船速で敵に突っ込むぞ!!」

「各自、戦の準備を!!旗艦剣神を最前列とし、縦一列で敵に突っ込め!!」

(頼むぞ————)

水軍長クシラは旗艦剣神の船首に一門だけ設置された魔導砲に願いを込めた。

「艦影確認、あの旗は……フエン王国水軍です」

パーパルディア王国皇国監査軍東洋艦隊の提督、ポクトアールは部下に報告を受け、「フエン王国か……。ワイバーンロード部隊の通信が途絶している。新兵器を持っているのかもしれない……」

ポクトアールは声を張り上げて命令する。

「相手を蛮族と侮つてはいかん！ 列強艦隊を相手にする意気込みで、全力で叩き潰すぞ！！」

艦隊は速力を上げ、フエン王国水軍へ向かって行く。

「間もなく敵との距離が二キロメートルに接近します」

しばらくして、報告があがった。

「もうすぐ魔導砲の射程に入るか……」

そして。

「面舵一杯！！！！」

パーパルディア水軍の艦隊が一齐に横を向く。

「進路そのまま、宜候！！」

（今頃、奴らは我が艦隊の動きを怪しんでいるであろうか——）

ポクトアールはそう考えながら、

「砲撃準備、撃ち方始めええっ！！！！！！」

バババババツツツ！！と。

魔導砲に煙が立ち込める。

直後。

敵艦隊周辺に水飛沫が上がる。

（敵艦からの発砲は確認できない、新型魔導砲は持っていないようだな。新兵器は対空兵器なのか、飛龍なのか——）

提督はフェン王国海軍の新兵器の正体を考えながら、

「第二射用意、撃てええっ！！」

ゴバツツと。

遂にパーパルディア側の砲に命中弾が出始める。

初めに、敵旗艦剣神の後方を航行していた船に、敵の魔導砲が着弾した。

砲弾は炸裂し、船上に設置してある火矢を放つための油壺をなぎ倒し、撒き散らされた油に引火、船は炎上し始める。

フェン王国お得意の剣術が発揮される事無く船上で焼かれ、転げまわる船員が目に入った。

(哀れなものだ、剣術など海戦で役に立つ時代など疾うに過ぎていくというのに)

次々と砲弾がフェン王国水軍に着弾してゆく。

敵旗艦剣神が、せめてもの反撃として球形砲弾を放つも、

次の瞬間、敵砲が着弾し、船上に大穴が開く。

砲艦の数、一艦あたりの砲数の差、砲の射程距離及び威力、そして艦の船速、どれも

が桁違いであり、フェン王国水軍に勝ち目はなかった。

こんな様子じゃ、こちらが一艦だったとしても余裕を持って勝利できただろう。

「最後だ、愚かな王国軍に砲弾をくれてや——

ポクトールは止めを刺すために、命令を出そうとし、

どつつつガッツツ!!!!と。

青い閃光がパーパルディア艦隊に突き刺さった。

直撃を受けた五隻は蒸発、煽りを受けた船も大きく傾いた。

「——ツツ!!」

ポクトールは振り返り、攻撃の正体を見極めようとして——

「なん……だと、馬鹿なデカすぎる!! 一体何だあれは!!!!」



——目を見開き、発狂する。

目測でも、全長三百メートルを優に超えている。しかも総鉄製であろう。何故それだけ巨大な船が浮いているのか理解が出来なかった。

フェン王国の新兵器を気にしている場合ではなかった。目の前の、皇国でも再現できない程の力を持つ砲艦は、とても新兵器に収まる代物ではなかったのだ。

——いや、もはや砲艦などといった矮小な船ではない。

言うならば戦艦。戦場を支配する程の圧倒的な力を持つ戦船。

しかし、一体どこの国家が持つというのであろう。少なくともフェン王国ではない。文明圏外の野蛮人にそんなモノを作れるはずがない。何処かの大国がフェン王国に手を貸したとしか考えられないが、わざわざフェン王国などに肩入れする理由などどこにもない筈だ。

(だが、決めつけるのは早計か。フェンへの肩入れというより、皇国監査軍、即ちパーパルディア皇国軍を狙ったものと考えるべきか……。なら先ずは——)

そこまで考えてポクトアールは部下に命令する。

「急ぎ本国へ魔電を送信しろ!! 内容は『我、所属不明艦ニ攻撃ヲ受ケル。所属不明艦ノ全長ハ三百メートル以上、巨大ナ砲ヲ装備シテイル。敵国ハ少ナクトモ我ガ国以上ノ力ヲ持ツモヨウ』だ! あゝの艦の情報は何としても本国へ伝える!!!」

通信班はショックから立ち直り、大慌てで送信を始める。

「追加だ！ 『敵艦ハ総鉄製、列強、モシクハソレ以上ノ技術デ建造サレタモヨウ。古ノ魔法帝国ガ復活シタ可能性アリ。十分ニ警戒サレタシ！』 急げ、敵の砲撃が来るぞ！！」

なんとか通信班が報告を終えた直後、

東になった青白い光線が、皇国監査軍を一隻も残すことなく消し飛ばした。

## 第九話 盲目なる外交官 Stunted Sense

## of Pride

1

パーパルディア皇国第三外務局

局長カイオスは、その報告を聞き、脳の血管が切れるのではないかと思われるほど激怒していた。

初めは、ワイバーンロード部隊、並びに派遣艦隊の砲撃でフェン王国首都アマノキを焼き払い、パーパルディア皇国に逆らったらどうなるのかを他国に見せつけるという計画だった。

フェン王国が領土献上案を蹴ったことが発端であるがしかし、結果は惨憺たるものだった。

空襲に向かったワイバーンロード部隊は、魔信を入れる間も無く全滅。

ガバラ神国の風竜騎士団が参戦したのではないかと疑われたが、そもそも風竜は数が少なく、通信する間も無く全滅するのは考えにくい。

ならば一体何があつたのか。

誰がそう考えていたが、その直後に入ってきた情報。これが問題だった。

『我、所属不明艦二攻撃ヲ受ケル。所属不明艦ノ全長ハ三百メートル以上、巨大ナ砲ヲ装備シテイル。敵国ハ少ナクトモ我が国以上ノ力ヲ持ツモヨウ』

『敵艦ハ総鉄製、列強、モシクハソレ以上ノ技術ヲ建造サレタモヨウ。古ノ魔法帝国ガ復活シタ可能性アリ。十分ニ警戒サレタシ』

理解が出来なかつた。報告の内容ではなく、指揮官の頭の中が、だ。

どうやら提督は海戦の恐怖で頭がおかしくなつたらしい。

まず、『全長三百メートルの総鉄製の船』、これがおかしい。それほど大きさの鉄船を作ることは神聖ミリスアル帝国でも出来はしないだろう。古の魔法帝国が復活したなどと喚いているが、そんな兆候はなかつた。あれが復活するときは世界が暗黒に染まる、と言われているからだ。

よくもまあそんな御伽噺を思いついたものだ。大方、蛮族共に撃退されたのである。普通では有り得ないが、余程慢心していたに違いない。そして、その責任から逃れるために乗組員ごと姿を消した、という訳だ。

そんな物語のような超高性能船が仮に存在したとしても、すぐさま全滅するはずがない。

百発百中の砲など有り得はしないのだから、本当に緊急事態に陥つたのならば、もつ

と詳細な情報を送信しているはずである。それなのに送ってきたのはこの二通だけ。舐めているとしか思えない。ご丁寧に通信機まで破壊したのか、その後通信も途絶えた。

一人で責任から逃れるのではなく、二十二隻もの船と共に皇国を去るなど、決して許されることではない。

既に一族郎党は全て捕らえた。しかし、殺してはいない。

奴らを見つけ出し、処刑する前に一斉に殺害し、自分の行動を後悔しながら死んでもらうことにしたからだ。

(しかも……いや、もう止めよう。これらの報告は完全に負けた言い訳だ。文明圏外の蛮国がそんな超高度な兵器を持っている訳が無い)

ただ、実際に懲罰艦隊に泥を塗った敵がいるのも事実。

今回の敗戦は皇帝の耳にも入るだろう。

次は、監査軍ではなく、最新鋭の本国艦隊が動くこととなる。が、どこかの列強がバックについている可能性も高い。

第三外務局は正体不明の『敵』を知るため、情報収集を開始した。

## 外務局食堂

現在は休憩中であり、職員は食事をしながら雑談していた。

「最近蛮国が、やけに反抗的と思わぬか？」

「確かに、ここ一ヶ月くらいは顕著にそれを感じる」

「ああ、前なら怖がつて、全ての要件をのんでいたのに、昨日は『我々は、あの学園都市と国交を結んでいる！』と、強気に言われたぞ。たかがシオス王国ごときに」

「つ！俺もトーパ王国大使から、似たような事を言われた。トーパなんて、技術がいらな  
いとまで言っていた。理由が今話しに出ていた『学園都市』と国交があるからと。学園  
都市つて知っているか？」

「知らん」

「だよな、というか『都市』つてなんだよ、幾ら小国だからつて、自分で言つてて恥ずか  
しくないのか？」

そんな、特に気に留めるようなこともない話であつたが、

「んなつ！」

数か月前に学園都市の使者と接触していた、窓口勤務員のライタが驚いたような声を  
出す。

彼は、食堂の全員の視線を浴び、これから色々報告書が必要になってくる事を覚悟した。

## 3

神聖ミリシアル帝国、港町カルトアルパスのとある酒場

中央世界にある誰もが認める世界最強の国、神聖ミリシアル帝国。

その交易の流通拠点となっている町、港町カルトアルパス。ここは、各国の商人たちが集う町であり、商人たちの生の声は、各国の事情を現す生の声として、情報源としても、非常に価値があるため、商人の姿に紛れ、各国のスパイたちの集まる町でもある。神聖ミリシアル帝国は、文明圏の中で、魔導技術が特に優れており、光魔法を使った街灯等、町並みにも高い魔導技術が見受けられる。

とある酒場では、酔っ払った商人たちが、自分たちの情報を交換していた。

「そっういえば、ロウリア王国ってあつただろ？」

「東の蛮国か？ ああ、人口だけは超列強な国だろう？」

「ああ、俺が交易にいった時期に、隣のクワ・トイネ公国に喧嘩を売ったんだよ。亜人の殲滅を訴えてな」

「亜人の殲滅？ 無理に決まつてるだろう。さすが蛮族の国！」

「で、学園都市っていう国が参戦して、負けたよ。圧倒的に強かつたらしい。ロウリア王国は学園都市の兵を一人も倒すことが出来なかつたし、四千隻の大艦隊も全て轟沈させられたらしい。学園都市も今後、世界に名を轟かせる国になるぞ！」

「兵を一人も倒せないとか、四千隻が退けられたとか、どう考えても情報操作だろう。ありえなさすぎる」

「ロウリア王国が負けた？ 列強や文明圏なら理解できるが、文明圏外の蛮族に!! 信じられんな」

「まあ、グラ・バルカス帝国や学園都市がいくら強かろうと、神聖ミリシアル帝国とは格が違うさ。絶対に勝てないよ。結局、中央世界はいつまでたつても安泰つてわけだ。古の魔帝が復活でもしない限りはな」

酔っ払いどもの楽しい夜は更けてつた。

## 4

パーパルディア皇国 皇都エストシラント



「フェン王国への懲罰の監査軍の派遣、予への報告はどうした」

皇帝ルディアスは静かな怒りを表しながら、カイオスへ言葉を投げかけていた。

「つ、監査軍派遣の報告を行わず、真に申し訳ございませ

「この阿呆が!!」

「ツツ!!?!」

「予へ派遣の報告を行わなかった事などどうでも良い。それは予が認めた第三外務局の権限だからだ。問題とは当然……監査軍が敗北した事だ」

カイオスの顔から滝のように汗が吹き出る。

「まさか、フェン王国如きに敗北したと言うのではないだろうな?」

「ははっ!! 現在当局が対象国の割り出しを行っておりますが、未だ詳細がつかめておりません。結果がはつきりしないため、まだご報告する訳には……」

「まだ、解らぬというのか」

ふざけきつた報告を受けて、皇帝の顔が烈火に染まる。

そして怒りを隠すことなく、ルディアス是不機嫌そうに告げた。

「旧式艦とはいえ、我が国へ鹵向かったのは事実。蛮族への教育はしっかりと行わねば、列強の地位が廃る……。分かったな、カイオス」

「ははっ!!」

深く頭を下げて反省の意を示すも、まだ皇帝の懸念は終わらない。

「皇国がフェン王国如きにやられたと判断される訳にはいかない。速やかにその国家を特定し、汚名を返上するのだ」

「了解しましたっ!!」

半ば叫ぶように返事をして、監査軍に関する報告は終了したと判断し、

カイオスは別の案件の報告へ移る。

「皇帝陛下、例のアルタラス王国に関する案件ですが」

「続けたまえ」

「王国は、魔石鉱山シルウトラスの献上を断つた上に、さらに国内の皇国資産の凍結、並びに断交を宣言しました」

「……舐められたものだな」

皇帝はワイングラスを手に取り、軽く回しながらもゆっくりと呷いた。

「すべてが予定通りとは言え、ここまで露骨に反抗するとは……。いささか頭にくるものだ」

「……、」

「カイオス、予定変更だ。彼の王国は監査軍でなく、本国の艦隊——第一艦隊を以って制圧する。……よもや、準備が整っていないなどはぬかさんな?」

ルディアスは視線を動かし、傍らに控えていた側近に問いかけた。

「はい、出陣準備は既に整っております。ご命令とあらばいつでも出撃し、王国を完膚なきまでに叩きのめすことも、当然可能です」

「くくくつ、やはり貴様は仕事が早いな。アルタラス王国人の取り扱いについては、貴様らの好きにいたせ。予に報告する義務は科さん」

「つ、ありがたき幸せ!! 必ずや王国を滅ぼし、溢れかえるほどの魔法鉱石を献上せしめてみせましようぞ!」

その宣告から僅かに一週間後。

皇国の電撃的な侵攻で、王国はあっさりと陥落した。

## 5

戦争の最中、辛うじて脱出できた王女ルミアスは、王国の無事を祈りながら、商船に揺られていた。商船は南海海流にのり、ロデニウス大陸のクワ・トイネ公国の沖合まで流されている。

このまま餓死するのかと覚悟を決めた時に、運良く学園都市の無人巡視船から臨検を受け、王女ルミアスは学園都市に保護されることとなった。

それが自国の運命を左右する大きな転換点となることを知らずに。

6

とある空間。再建された窓のないビルに設置された生命維持装置内部に、水色のセーラー服を着た『人間』が逆さに浮いていた。

「ふむ、計画に大きな修正の必要性はないな。順調に進んでいると言っているいいだろう」  
かつて、男にも女にも、子供にも大人にも、聖人にも罪人にも見えた『人間』改め、魔法少女アレイスターは甲高いで呟く。

フェン王国がパーパルディア皇国に狙われていることなど、学園都市はとつくに掴んでいた。その上でフェン王国に接触したのだ、列強国へ敵対行為を行う前提で。

一体何故か。

アレイスターは吐き捨てるように言う。

「時間の因果を捻じ曲げて、世界の理から外れた魔法帝国。元の世界に帰るとしても、存

在ごと消滅させねば、いずれ、転移によつて発生した『パス』を經由して『飛沫』の影響が発生することになる。折角あのクソ野郎に全ての飛沫を押し付ける方法を確立したというのに、これ以上総量が増えたと許容範囲を超えてしまう」

たつた一人の娘のために世界最強の魔術結社『黄金』を壊滅させた男だ。そんな彼（彼女？）が、存在するだけで『飛沫』を撒き散らす国家を見逃すはずがない。

「結果的にどうなれども、世界に学園都市の『存在』を刻み付けておいて損はない。かつての大日本帝国が神話として語り継がれていたことからな」

魔法帝国が学園都市に迫るほどの実力を持つていた場合、一撃で帝国を滅ぼすことはできない。仮に追い込んでも、未来の世界へと転移を行われる可能性もある。その時まで学園都市がこの世界に存在しているかどうかは定かではないが、地球に還つた後でも、新世界に刻まれた『神話の記述』を利用して再転移を行えば、再復活を遂げた帝国を滅ぼすことも可能であろう。

要するに、これから行われることは念の為の『作業』でしかない。魔法帝国の解体に失敗したときの『第二候補』という訳だ。

よつて。

「ならば手始めに列強の地位でも頂こうか、パーパルディアの諸君」

既に、『計画』は始動している。半世紀に亘つて世界を欺き続けた魔術師の策謀に、抗

う術はない。

第十話 一万年の時を経て  
o r l d In The New W

1

## 第二文明圏、列強国ムー

晴天、雲は遠くに少し浮かんでいるのが見えるのみであり、視界は極めて良好である。気候はあたたかくなつてきており、鳥たちはのんびりと歌い、蝶の舞う季節。

技術士官マイラスは軍を通じて伝えられた外務省からの急な呼び出しに困惑していた。外務省からの呼び出しは、空軍のアイナック空港だった。

列強国ムーには、民間空港が存在する。まだ富裕層でしか飛行機の使用は無く、晴天の昼間しか飛ぶ事は出来ないが、民間航空会社が成り立っている。民間の航空輸送は私の知りうる限り、神聖ミリシアル帝国とムーでのみ成り立つ列強上位国の証である。機械超文明ムーの発明した車と呼ばれる内燃機関に乗り、技術士官マイラスは空軍基地アイナック空港に到着した。

しかし、わざわざ急遽空軍基地に呼び出すとは、いったい何だろうか？

そう考えながら、控え室で待つこと二十分、

軍服を着た者と、外交用礼服を着た者二名が部屋に入ってくる。

「彼が技術士官のマイラス君です」

軍服を着た者が外交用の礼服を着た者に紹介する。

「我が軍一の、技術士官であり、この若さにして第一種総合技将の資格を持っています」  
「技術士官のマイラスです」

マイラスはニツコリと笑い、外交官に答える。

「かけたまえ」

一同は椅子に腰掛け、話が始まる。

「何と説明しようか……」

外交官がゆっくりと口を開く

「今回君を呼び出したのは、正体不明の国の技術レベルを探ってほしいのだよ」

マイラスは第八帝国の事かと思ひ、

「グラ・バルカス帝国の事ですか？」

しかし、思わぬ答えが返ってくる。

「いや、違う。新興国家だ。本日ムーの東側海上に白い船が一隻現れた。海軍が臨検すると、学園都市という国の特使がおり、我が国と新たに国交を開きたいと言ってきたのだ。それ自体は珍しい事では無いが、問題は、彼らの載ってきた乗物だ——帆船では



無いのだよ」

「まさか……」

「そして魔力感知器にも反応が無いので、魔導船でもない。機械による動力船であると思われる」

「やはり、そうですか……」

「そして、さらに問題なのが、我が国の技術的優位を見せるために、会談場所をアイナンク空港に指定したら、飛行許可を願い出て来たのだよ」

「当初は、外交官がワイバーンで来るのか、なんて現場主義な国かと話題になった。飛行許可を出してみたら、飛行機械を使用して飛んで来たのだよ」

「ツツ！！！！」

「先導した空軍機によれば、相手は時速五百キロ程度の飛行速度であり、我が国の航空機以上のスピードだったらしい。先導するはずが、逆に向こう側に速度を落とされたって嘆いていたよ。試しに、空戦したら、勝てそうか聞いてみたが、勝つてみせると空軍パイロットは答えた。つまり、精神論に頼らなければ勝てない相手だという訳だ」

ただ、と彼は続ける。

「飛行原理が我々の知っている航空機とはちよつと違うようなのだよ。見たことが無い飛行機械だった。そこで、マイラス君、君の出番となった訳だ」

「彼らの言い分によれば、学園都市は第三文明圏フィリアス大陸のさらに東に位置する文明圏外国家だ。しかし、持ってきた飛行機械の技術はパーパルディア皇国を超えているようだ。我が国との会談は一週間後に行われるが、その間に彼らを観光案内し、我が国の技術の高さを知らしめると共に、相手の技術レベルを探ってくれ」

「了解しました」

技術士官のマイラスは、久々に技術者魂の震えを感じた。

（未知の飛行機械か……いかなるものだろうか？）

そう考えたマイラスであったが、

あつ、と外交官がマイラスの思考を遮り、今思い出したかのように重要な情報を告げる。

「学園都市の使用した飛行機械は、今空港東側に駐機してあるので、まずは見ておいてくれたまえ」

それだけ言うと、外交官は立ち去った。

——十分後。

マイラスは駐機場にある学園都市という国の乗ってきた飛行機械を眺め、咄然としていた。

（プロペラが上に付いている。これを回転させて飛んで来たらしいが——なるほ

ど、航空機の翼の形状をしているのか。それを回転させて揚力を得ると……。だが逆方向へのモーメントはどうやって——いや、二枚のプロペラをそれぞれ逆方向に回しているのか。それならモーメントは発生しないな。しかし、これを回転させて飛ぶにはかなり強力なエンジンが必要になるが……)

『六枚羽』の技術を利用して作製された超音速ヘリコプター、H S T H—03。

マイラスはその秘密を解き明かそうとしたが、

結局、会談の日まで通い続けることになることを、彼は未だ知らない。

## 2

応接室へ向かうマイラスの足取りは重い。

学園都市のヘリコプターと呼ばれる飛行機械は、おそらく我が国では、エンジン出力不足で作る事が出来ないだろう。

少なくとも、エンジンに関しての技術は先を行かれている可能性が高い。

しかし、我が国には高さ百メートルクラスの超高層ビルや、最新鋭戦艦ラ・カサミがある。

「どうなる事やら……」

マイラスは陰鬱な気持ちになりながら、学園都市の使者が滞在する部屋の扉をノックした。

どうぞ、と返事が返ってきたのを確認して、彼は扉をゆつくりと開けた。

中には、二名の男がソファーに座っていた。

「こんにちは、今回会議までの一週間ムーの事をご紹介させていただきます、マイラスと申します」

「外交部の御園です。今回ムー国をご紹介いただけることで、感謝いたします。こちらにいるのが、補佐の佐伯です」

「では、具体的にご案内するのは、明日からとします。長旅でお疲れでしょうから、今日はこの空港のご案内の後に、都内のホテルにお連れします」

マイラスは、空港出口へ行く前に、空港格納庫内に使者を連れて行く。

格納庫に入ると、白く塗られた機体に青のストライプが入り、前部にプロペラが付き、その横に機銃が二機配置され、車輪は固定式であるが、空気抵抗を減らすためにカバールが付いている複葉機が一機、駐機してあった。

ピカピカに磨かれており、整備が行き届いた機体だと推測される。

「この鉄龍は、我が国では航空機と呼んでいる飛行機械です。これは我が国最新鋭戦闘機『マリリン』です。最大速度は、ワイバーンロードよりも速い時速三百八十キロ、前部

に機銃——火薬の爆発力で金属を飛ばす武器ですね。を、付け一人で操縦出来ます。メリツトとしては、ワイバーンロードみたいに、ストレスで飛べなくなる事も無く、大量の糞の処理や未稼働時に食料をとらせ続ける必要もありません。空戦能力もワイバーンロードよりも上です。」

「……、」

学園都市の使者は唐突に押し黙った。

マイラスはそれを見て勝ちを確信しかけたが、使者の一人が思わずといった調子で呟いた。

「は——、複葉機なのですね——」

「レシプロエンジンのようですね。このレトロな感じがまた——」

彼らは航空機マリンを見て、レトロという言葉を発した。世界二位の列強の最新鋭機を見てだ。

(いったいどういう意味で言ってるんだ?)

浮かんだ疑問に何ら答えることなく、彼らの話は続く。

そこにマイラスは仕掛けた。

「内燃式レシプロエンジン以外にどういった選択肢がありますか？蒸気機関もレシプロといえますよね。まあ、蒸気機関は重くて出力が弱く飛行には適さないのですが」

「学園都市には、ジェットエンジンと呼ばれる航空機に適した小型高出力エンジンがありますので……。レシプロエンジンも——ないことはないですね」

学園都市は、やはり、高性能エンジンを所有しているようだ。探りを入れた甲斐があった。

「ほう、学園都市にも航空機に適したエンジンがあるのですね。是非構造を教えてくださいたいものです」

「簡単な設計図や原理であれば、学園都市と国交を結んでいただけたら、書店でいくらでも購入できます。しかし、高出力化や、エンジンの燃焼温度に耐えうる素材の具体的造り方については、技術流出防止法がありますので、公開は出来ませんが」

「簡単な設計図が手に入るのでですね。それは面白い。個人的には是非学園都市と国交を結べる事を願いますよ」

やはり、学園都市の航空機技術は我が国を凌駕しているかもしれない。

マイラスは、確認のため、探りを入れる。

「学園都市の航空機はどのくらい速度が出るのですか？」

航空機は速度が重要だ。速度が上がれば、一撃離脱戦法により、速い方が圧倒的に有利である。

御園と佐伯は目を合わせる。

ヒソヒソと話をしている。

(学園都市の市販本には軍用機の性能も記載してあるから、国交が結ばれたら判明することだし、隠すこともないな。ならば、ここで一発かましておこうか)

「爆撃機であれば、我が軍の主力であるH s B—24が最高速度マツハ十八——音速の十八倍ですね。旅客機であれば、対気速度でマツハ六程度は出ますね」

「ツツツ!!??」

(音速超えだど!! マツハ十八など、我が国の六十倍の速度だぞ!!?? それに最新鋭機であるマリリンが旅客機如きに負けるなど、冗談ではない!!)

「ははは……御冗談を……。では、こちらへ——」

マイラスは、学園都市の使者を、空港外へ案内する。ムーの誇る自動車に乗せてホテルへ向かおうとしたが、もう嫌な予感しかない。

空港外には、使者を乗せる車が待機していた。馬を使わず、油を使用した内燃機関を車に積むまでに小型化した列強ムーの技術の結晶。しかし彼らは驚く事無く、乗車する。が、特に驚いた様子はない。

「学園都市にも車は存在するのですか?」

マイラスは尋ねる。

「ええ、現在、四十六万台ほどの自動車が、学園都市内を走行していますね。人口の八割

が学生のため、普及率はそれ程高くはないですが」

マイラスは精神的に疲れてきた。人口の八割が学生の国など、どうやって成り立たせているのだろうか。それに、四十六万台というのも学生を除いた普及率なら、ほぼ百パーセントではないか。

などと考えているうちに、高級ホテルが見えてきた。車はホテルに横付けされ、皆はホテルへ入った。

「明日は、我が国の歴史と、我が国の海軍をご案内いたします。今日のごゆっくりとお休み下さい」

マイラスは、学園都市の使者にこう伝え、ホテルを後にした。

## 3

翌日、使者たちはムー歴史資料館に向かった。簡単にマイラスは説明を始める。

「では、我々の歴史について簡単に説明いたします。まず、各国にはなかなか信じてもらえませんが、我々のご先祖様は、この星の住人ではありません」

「……、」

学園都市の使者は黙ったままだ。反応が無いことを不思議に思いながらも、マイラス



は話を続ける。

「時は一万二千年前、大陸大転移と呼ばれる現象が起りました。これにより、ムー大陸のほとんどはこの世界へ転移してしまいました。これは、当時王政だったムーの正式な記録によつて残されています。これが前世世界の惑星になります」

マイラスは、地球儀を取り出そうとして――

「すみません、少しいいですか？」

外交部の御園に待ったを掛けられた。

「なんででしょう、何か質問でもございしましたか？」

(チツ、ここからが良い所だつてのに……)

マイラスは、説明を遮られたことの不満を一切出さずに聞く。

「いえ、そうではないのですが……。やはり、と思ひましてね」

「つ？何がでしょうか？」

すると、御園は少し得意げな表情になりながら、決定的な情報を告げる。

「もしかすると、あなた方が元居た世界は、このような形だったので？」

「はい？」

御園は補佐にとある地図を取り出させた。

「……………ツツツ！！！！」

それは、一つの世界地図だった。日本を中心として、メルカトル図法で描かれた何の変哲もない地図だった。

しかし、マイラスはそれに見覚えがあった。

いや、見覚えどころの話ではない。平面か立体かの差はあれ、ちょうど今それを取り出して学園都市の使者に見せつけようとしていたのだ。

「こ、れは!! どういう事ですか!! 何故あなた方が旧世界の地図を!!?」  
「分からないのですか?」

それに対して御園は肩を竦めた。

まるで。

常識を知らない子供にモノを教えるかの調子で。

「可能性は二つしかないでしょう? 一つは、我々があなた方から地図を盗んだという可能性。しかし、我々がこの国に来たのは二日前。その上、あなた方の監視下でそれを実行することは不可能であり、何より理由がない。つまり、可能性は一つに絞られるわけですね」

「何が……言いたいのですか?!」

「落ち着いてください、何も喧嘩を売っているわけではないのですから。寧ろコレが事実なら、ムー国とはかなり親密な関係を築いていきたいとも考えていますね」

話を戻しましょう、と彼は仕切りなおす。

「とは言うものの、私には何故これが理解されないのかが不思議ですね。それも、転移国家を名乗っているあなた方に。それとも、一万年以上同じことが起こっていないから有り得ない、とでも考えていたのですか？」

「まさ、か——」

かつての地球で、一万二千年前に突如として消滅したとされる空想上の大陸。海底の地質調査から大陸の存在が否定され、現在では完全な都市伝説として扱われている。

しかし、だ。

魔術的な手段によって異世界に転移させられていたら？ 果たしてそれは現代科学で解析できるような代物なのか？

——否だ。解析などできるはずがない。  
ならば。

「お久しぶり。ということになるのかね、ムー国の諸君」

マイラスの動揺を無視して、御園は宣告する。

「それとも、大和と名乗った方が分かりやすいかな？ 一万年前の友好国さん？」

## 4

転移後の混乱、周辺国との軋轢、魔法文明に比べての劣勢、機械文明としての出発、そして世界第二位の国家へ。

ムーの歴史は、転移してからは苦難の歴史だったようだ。しかし、単一国家独力で車や飛行機を開発しているのは驚きの限りである。

一通り説明が終わり、学園都市の使者を海軍基地へ案内する。彼らに対してムーの、列強で屈指の海軍力を誇るムーの姿を見せ付けてやらなければならない。学園都市の海軍力は不明だが、人口二百三十万人の小国に戦艦を維持するほどの金はないと思われる。

港には、ムー国海軍の最新鋭戦艦ハ・カサミが停泊していた。

「御園さん、見てください。戦艦ですよ、戦艦!!やはり戦艦は男のロマンですね」

「佐伯さん、ちよつとはしやぎすぎですよ。しかし、記念艦の三笠にそっくりですね」

今、御園という人物が、何かにそっくりと言った。

「学園都市も戦艦を保有しているのですか?」

「二応、ですけどね。転移前は内陸都市でそもそも艦船は保有していなかったのですよ。」

転移後に戦艦を含めた船も建造しましたが、戦艦はまだ一隻しか保有していません」

「この世界は弱肉強食ですが、何故戦艦を造らないのですか？」

「うーん、具体的な事はお答えしかねます。申し訳ありませんが」

（やはり、金食い虫の戦艦を維持できるだけの金はないのだろうか……）

腹のうちを隠しながら、マイラスは告げる。

「そうですか……。——とここで、先ほどおっしゃっていましたが、学園都市にも似た艦があるのですか？」

「いえ、学園都市というより、日本にですね。その日本にはかつて、三笠と呼ばれる戦艦がありました。約百年前に日本が大日本帝国と呼ばれていた時代に存在した連合艦隊の旗艦です。この艦があそこに停泊している戦艦にそっくりに見えましたので……」

「ほう、百年以上も前の艦ですか……」

日本とやらは認めたくないが、どうやらムーよりも機械文明が遥かに進んでいるらしい。

しかし、学園都市には戦艦が一隻しか無いらしい。いくら最新式の戦艦であっても、一隻では多勢に無勢だろう。脅威なのか脅威でないのか、よく解らない国だ。

ムーの技術士官マイラスの案内が一通り終わり、ムー首脳陣に報告が上がる。

受け入れられないような内容の報告書であったが、敵対してくる訳でもなく、高技術が入るかもしれない国、グラ・バルカス帝国の脅威が存在するこの状況下にあつて、友好的な態度をとる学園都市を、拒否する理由は無く、ムーは学園都市との国交を結ぶ事になる。

## 5

パーパルディア王国皇都エストシラント

第一外務局は混乱の極みにあつた。

原因は皇国よりも西の中央世界、そしてそれより更に西の第二文明圏に二つ存在する列強国、その一つ、レイフォルが、正体不明の国家、グラ・バルカス帝国に敗れた事にある。

列強レイフォルとパーパルディア王国は、規模で言えば皇国の方が遥かに上だが、海軍の武器の性能は良く似ていた。

しかも信じられない事に、列強レイフォルは、グラ・バルカス帝国のグレードアトラスターと呼ばれる超巨大戦艦たった一隻に艦隊を全滅させられ、ワイバーンロードの波状攻撃を防がれ、さらに首都レイフォリアを攻撃され、首都は灰燼に帰したという。

超列強国が西の果てに突如として現れた。

第一外務局長エルトの脳裏に嫌な予感が駆け巡る。

第三外務局所属の皇国監査軍が東のフェン王国に対し、懲罰的行為を行った際、敗戦している。

もしも、グラ・バルカス帝国の息がかかっていればとんでもない事に……………。

「とにかく情報を集めよー」

第一外務局長エルトは部下に強く指示するのだった。

そんな中、一つの情報が彼の元に入る。

「これは……………」

手元に置かれた簡易報告書、その内容にエルトは目を見開いた。

『監査軍敗北の直接的原因は学園都市という国家にある』

フェン王国に派遣していたスパイからの情報だった。

そこには、学園都市がワイバーンロード二十騎を一瞬で撃墜したと本国に報告したが、その戦果が全く国家戦略局に信じてもらえない事が必死に記されていた。

「学園都市という国をもっと調べろ!!」

パーパルディア皇国はついに、学園都市について本格的に調べ始めた。

## 第十一話 西へ向かう太陽 Beginning of

## the End

1

パーパルディア皇国皇都エストシラント第一外務局

局長エルトの指示により、学園都市の情報がかかり集まってきた。

皇国監査軍を退けたのは学園都市であることに間違いはない。しかし、監査軍のワイバーンロード部隊を全滅させた方法は一切不明。

また、敵の戦艦は一隻しかないらしく、多少命中率が高いくらいでは、百門級戦列艦の数の暴力を覆せるとは思えない。おそらく単艦での質は高いのだろうが、そこまで差があるのだろうか。どうしてもそれほどまでに差があるとは思えない。

グラ・バルカス帝国のグレードアトラスターと呼ばれる魔艦は、たった一隻でレイフォルを滅ぼすに至ったというが、この情報はやはり何かの間違いだったのではないかと思えてくる。どう考えても盛りすぎである。ただし、グラ・バルカス帝国がレイフォルを滅ぼす力があるのは事実であるため、今後帝国には気をつけなければならぬ。

皇国監査軍の提督ポクトアールの報告書では、百発百中の砲が配備されていたとの記



載がある。青い光線が撃ち出されたとも言うが、どちらも噂が婉曲されたものだろう。青い軌跡を描く砲弾は、第一文明圏でようやく開発された最新型であるし、なにより百発百中の砲など有り得ない。

この件について、皇国の頭脳集団「兵研」に問い合わせてみたが、「百年後の未来の皇国の技術でも不可能」との回答を得ている。

やはり、文明圏外国家が皇国よりも百年以上進んでいると考えるのは現実的ではない。

——なめてはいけないが、恐れるほどの国ではない。

第一外務局はこのように結論付けた。

パーパルディア皇国皇都エストシラント皇城

国の重臣たちが平伏し、空気が張り詰める。

皇帝ルディアスが登場する最高会議が始まるうとしていた。

「それでは、これより帝前会議を始めます」

議長があいさつし、その後皇帝が話し始める。

「アルタラス王国は完全に掌握したな？」

「はい、アルタラス王国内は完全制圧できました。現在本軍は撤収の準備にかかっています」

「次の軍の使用法だが……第二外務局長リウス、どう考えるか？」

「はっ!! 北方の蛮族を滅し、新たな資源獲得を——」

「却下だ」

話を遮り、皇帝は第二外務局長リウスの案を一蹴する。

「はっ——はいっ!」

ゆつくりと、皇帝は呟いた。

「余は……怒っているのだ」

誰も何も言えない。

「監査軍を一度退け、調子に乗っている蛮国が東にいるな……。学園都市……とかいったか? 一度灸をすえる必要がある」

皇帝は溜まった鬱憤を吐き出すかのように大きく息を吐く。

「ならばまず、学園都市と友好関係にあるフェン王国を滅せよ。昔から生意気な国だしな。学園都市と友好的な国はどうなるのかを各国に知らしめるのだ」

地理的にも、フェン王国の方がパールディア皇国に近く、学園都市を先に攻めるのは得策ではない。その場の人間に異論などなかった。

皇帝ルディアスは軍の最高指揮官アルデに顔を向ける。

「出来るか？アルデ」

「はい、もちろんであります」

「監査軍を退けた学園都市も出てくるかもしれんぞ？」

「当然撃破いたします。栄えある皇国に、旧式装備の弱軍とはいえ、文明圏外国家に敗北するとは……第三外務局と監査軍は皇国の恥であります」

第三外務局長の顔が苦痛に歪むが、アルデは話を続ける。

「陛下、フェン王国の東に隣接するガハラ神国についてはいかがされますか？」

「ガハラ民には構うな。あの国はまだ謎が多すぎるし、巻き込まれたなら仕方ないが、一戦で二国を相手にするのは、あっさりと勝てるだろうが、原則として避けたい。私の代で例外は作りたくないな……。それに、ガハラ神国には皇国初代皇帝が世話になったからな……」

「戦略や細かい所はお任せしていただいてよろしいでしょうか？」

「うむ、好きにしてよい。そうだな、フェン王国については、戦後の国土や民の扱いまでも好きにして良いぞ」

「なっ！！」

一同に衝撃が走る。

一国の領土と民をたかが一機関が好きにして良いとの皇帝陛下からの暖かいお言葉、アルデは考える。軍人にある程度振り分けたとしたら、軍の士気はとてつもなく上がる事だろう。

「あ、あ……ありがたき幸せ！」

フェン王国五百万人の民と広大な土地が手に入る。

軍人、部下にある程度振り分けたとしても地方の貴族を一気に抜き去り、一国を得るのと同じであるこの措置。アルデは皇帝への忠誠をいつそう強くしたのであった。

## 2

フェン王国

パーパルディア王国のあるファイルアレス大陸から東へ二百キロメートルの位置にフェン王国はある。

国全体が、どこか昔の日本を思わせる街並みに治安が極めて良い事もあって、国交が結ばれた後は水中翼船等の高速船の定期便が出ており、首都アマノキヤ、フェン王国の西の端にあるニシノミヤコにおいて、学園都市からの観光客が多く見られるようになった。

転移以降、溜まりに溜まった不満のガス抜きをするため、強能力者以下の学生の国外旅行が解禁された。DNA検査を行える国が存在しない新世界では、解析されることを恐れる必要は無いからだ。

流石に、大能力者以降は軍事的な影響力を持つたために見送られたが、学生のストレス低減に大きく貢献したことだろう。

また、パーパルディア皇国の皇国監査軍東洋艦隊を学園都市の軍が追い払った事を知ったフェンの人々との関係は極めて良好であり、学園都市観光客が現地で『籠』を使用し、料金を支払おうとしたところ、

『恩人から金は取れない』

と、料金の受領を拒否することも珍しくなく、両国の関係は極めて良好であった。

フェン王国の十士長アインはフェン王国の西の端にある町、ニシノミヤコにおいて警備をしていた。

フェン王国の治安は極めて良く、今のアインの仕事はもっぱら現状把握や、道に迷った外国人への地理教示であった。

「平和だな．．．ずっと続けば良いが．．．」

皇国はプライドが高い。

監査軍を追い出しただけで黙っているとは思えない。

もしも、皇国が本格的に侵攻してきたら、このニシノミヤコは最前線となる。

彼は、住民の避難誘導をどうするか、具体的措置を検討するのだった。

ふと疑問が浮かぶ。

学園都市の観光客は、今のフェン王国の現状を正確に理解したうえで観光に来ているのだろうか？

どうも彼らを見てみると、平和が絶対的に保障されているので遊びに来たようにしか見えない。

現に、ニシノミヤコに滞在する観光客はすでに百人近くになっており、首都アマノキにおいては、二百人近くの観光客がいる。

フェン王国に来る観光客は、特に金を持つている訳ではないらしい。そんな一般的国民が簡単に海外旅行を出来るのだから、私の想像以上に学園都市は裕福なのだろう。

(皇国が来なければよいが……)

アインは皇国の影に身震いをするのだった。

3

——二週間後

フエン王国西側約二百キロメートル先洋上

見る者に圧倒的な恐怖をもたらす艦隊が東へ向かっていた。

パーパルディア皇国、皇軍である。

百門級戦列艦を含む砲艦二百隻、竜母十二隻、揚陸艦百隻、合計三百十二隻。

向かう先はフエン王国。

皇国からの領土献上案を蹴り、監査軍を学園都市の支援の元、退けた国だ。

今回は、フエン王国に対しての懲罰的攻撃では無く、滅ぼすために進軍している。

既に一度、監査軍が敗北しているため、將軍シウスの肩に力が入る。

「警戒を厳とせよ」

第三文明圏最強の軍隊が、王国を滅亡させるために東へ向かった。

#### 4

とある空間。

サングラスをかけた金髪の男がひとりの『人間』に詰め寄っていた。

「おい、フエン王国の学園都市観光客はどうするつもりだ。このままだと、パーパルディアの攻撃に巻き込まれるぞ」

人工衛星からの情報により、パーパルディア皇国軍が大艦隊で東へ向かっていることが判明した。

他国を通じて得た情報を総合的に判断すると、艦隊はフェン王国へ向かったと思われる。

「だが、軍隊を派遣する訳にもいかない。フェン王国と安全保障条約を結んだわけでも、我々と皇国との間に直接的な問題が発生した訳でもないのだから」

「そんな理由で、フェン王国にいる数百人の学生を見捨てると言うのか？——まさか、開戦の大義名分にするつもりか！！？」

「そうだ、と言えば君は納得するのかね？」

フェン王国が攻撃されただけでは、学園都市から戦端を開くに値する理由は存在しない。しかし、自国の国民が犠牲になれば話は異なってくる。大義名分さえ得れば、例えば皇国が滅亡しても、他国に非難される謂れはない。

「見損なつたぞ、アレイスター。よりにもよつて表の人間を駒にするなど、許されるとでも思っているのか！！」

「まあ、待ちたまえ。別に、ただ彼らを見殺しにするわけではない。今の私は、昔ほどの鬼畜ではないのぞな」

娘のリリスを救つて以降アレイスターは、自身の性格がかなり甘くなつたことを自覚



していた。

これが子を持つことだろうか、とアレキスターは考えながら、土御門に向けてとあるデータを表示させた。

「君にはかなり馴染みの深いモノだと思うがね」

「っ!!」

そこには、かつて学園都市で起こった事件から得られた、一つの解が表示されていた。

——『人的資源』プロジェクト。

七五〇〇人の『ヒーロー』同士を衝突させ、潰し合わせるために発案された計画。

魔術師は嘯く。

まるで、ここには居ない誰かを信用しているかのように、明確に。

「彼らに任せれば、軍隊を投入するよりも確実に『庇護対象』を救い上げてくれるだろう

」  
「や」

5

「現在、フェン王国が何者かに襲撃されているようです、とミサカは折角のデートを邪魔

されたことに激しく憤ります」

「お願い、フェン王国に取り残された妹達を助けてあげて、ってミサカはミサカはソファアで寝たふりをしているあなたに聞こえるように呟いてみたり」

——学園都市の中で、様々な会話があつた。

それに対して彼らはとてもシンプルな返答をした。

「「「任せる!!」」」

総勢七五〇〇人。

どこにでもいる平凡な学生達が、立ち上がった。

## 第十二話 劍の代わりに持つものは Girls, T

a l k

1

フエン王国西部ニシノミヤコ。

皇国との戦争の際には、最前線となるであろうこの都市には二千人にも上る武人が常駐していた。

学園都市からの観光客も多く、誰もが日ごろ体験できない国外旅行を楽しんでいたのだが、しかし。

「っ?」

そのおおよそ三キロ西側の小島に、何かが見えた。

いいや、正確にはその上空。

天にまで昇ろうとする赤い煙幕の正体は、

「緊急事態の狼煙!! つ、お前ら笛を鳴らせ! 急げ、この情報を一刻でも早く伝えるんだ!!」

その甲高い音色を聞いた武人から武人へ情報が伝播していき、ついには街全体を覆い

尽くす。

一般人には分からなかったであろうが、笛の音に込められた意味はただ一つ。

ついに。

パーパルディア王国との戦争が始まった。

官民の境なくそれを全員が知ることが出来たのは、僅かに数十分後。

爆音が鼓膜を揺さぶり、砲弾が街を打ち砕いた、その瞬間の出来事であった。

## 2

パーパルディア王国皇都エストシラント第一外務局

実質的に学園都市担当かつ全権大使となり、外務局監察室から第一外務局所属となった皇族のレミールは、学園都市と国交を持つ国を通じ、『すぐに来るように』との内容で命令書を出した。

もうすぐ、あの生意気な学園都市の伸び切った鼻を叩き折れる。そう考えただけで気が昂ったレミールであったが、使いの者に使者の到着を告げられると一気に冷静に

なった。

「どうぞ、お入りください」

合図とともに、学園都市からの使者が部屋に入って来る。

その音で振り返ったレミールであったが、目に入った予想外の光景に少し困惑した。

そこには、肩まで掛かる黒髪を赤いカチューシャで留めた女性がいた。

彼女が着用している白いリボンが付いた黒服を見たことがなかったが、原因はそこではない。

(若い。まだ十代後半に見えるが……。外交官として派遣するには流石に若すぎないか?)

通常、外交官は経験の浅い人間には任命されない。ましてや、十代の女性に任せられるものではなかった。外交というのは一種の戦争で、実力のない者を派遣してしまうと、一気に国が傾いてしまう場合もある。

(こんな奴に実力があるようには思えない……。学園都市とやらは余程人材不足と見える。まあ、こちらにとっては好都合か)

一瞬困惑した表情を見せてしまったが、目の前の少女に気付かれることはない気が取り直し、眼前の少女を睨みつける。

が、黒髪の少女は動揺する気配を一切見せない。

(……思ったより肝が据わっているようだ。私に睨まれた相手など、大抵は怖気づくというのに)

少女が着席したのを確認すると、レミールは話し始める。

「パーパルディア王国、第一外務局のレミールだ。おまえたち学園都市に対しての外交担当だと思って良い」

「学園都市外交部の雲川芹亜だ。一体何の要件だ？ 本当に、国交すら結んでいない相手呼び出すに値する程の事なのだろうか？」

雲川と名乗った女は皇女に対して堂々と言い返す。

(ふん、礼儀を知らん野蛮人め。その態度がいつまで持つか楽しみだな)

レミールは不遜な態度を取る外交官を見下しながら囁く。

「いや、今日はお前たちに面白いものを見せようと思ってな。——皇帝のご意思でもあるがな」

それだけ告げると、使いの者に目を走らせた。

しばらくして扉が開き、一メートル四方の水晶が運ばれてきた。

「これは、魔導通信を進化させたものだ。この映像付き魔導通信を実用化しているのは彼の神聖ミリシアル帝国と我が国くらいなものだ」

「何かと思えばお国自慢か？ 本題に入るなら早くしてもらいたいんだけど」

「はつ、今の無礼な言葉遣いは見逃してやろう。私は寛大だから」

レミールは肩を竦めながらも続ける。

「では、本題に入ろうか。今からこれを起動させるが、お前たちに一度チャンスをやろう」

その言葉と共に、一枚の粗悪な紙が配られた。

ファイルアデス大陸共通言語で書かれたソレを要約すると、

——学園都市の王は、皇国人とし、皇国から派遣された者を置くこと。

——学園都市内の法を皇国が監査し、皇国が必要に応じ、改正できるものとする。

——学園都市の軍隊は皇国の求めに応じ、必要数を指定箇所に投入できることとする  
こと。

——学園都市は皇国の求めに応じ、毎年指定数の奴隷を差し出すこと。

——学園都市は今後外交において、皇国の許可無くして新しく国交を結ぶことを禁ず。

——学園都市は現在把握している資源の全てを皇国に開示し、皇国の求めに応じてその資源を差し出すこと。

——学園都市は現在知りえている魔法技術のすべてを皇国に開示すること。

——パーパルディア皇国の民は皇帝陛下の名において、学園都市市民の生殺与奪権利を有する事とする。

単純に、植民地となれという要求を突きつけられた雲川は、フツと一笑に付し、「これを書いた人間は外交というものを良く理解していないようだけど。まさかこれが、例の面白いものでも言うつもりか？」

「理解していないのはお前だろうが間抜け。おまえたちの国は比較的皇国の近くにあるにも関わらず、皇国の事を知らなさ過ぎる。当初いきがっていた蛮族も、普通なら皇都に來れば意見も変わるし、態度も条件も軟化する。しかし、おまえたち学園都市はこともあるうか、当初から治外法権を認めないだの、通常の文明圏国家ですら行わないような——そう、まるで列強のような要求だ。お前たちは皇国の国力を認識できていない。もしくは外交部の意見が実質的に本国に通っていない。通っていても、それを認識する能力が無い。そんな愚かな国だという訳だ」

「……………」

「お前たちは皇国監査軍を押し返したということになっているが、当時の監査軍の長は精神が病んでいたに違いない。現に、皇国軍への被害は一切確認されていないのだ。これはつまり、監査軍におまえたちが勝つたのではない。我が国の部内的な問題だ」



「大した自信だな、不確定な情報をそこまで信じられるとは。先ほどの言葉を訂正しようか。その要求を書いた人物だけでなく、貴方を含めた上層部までもが無能である、とね？」

「貴様、言わせておけば抜け抜けとっ!! 我が国は列強ぞ! 貴様らのような小国など幾らでも踏みつぶせるのだ、口の利き方に気を付けろ!!!!」

「はっ、監査軍が一人残らず消えたことに違和感すら感じなかったのか? 少数ならば兎も角、全員が家族を置いて姿を眩ませただと? 普通は起こるはずないと思うけど。それとも、貴国はそこまで兵に信用されていないのか?」

レミールは激しく手を叩きつけながら立ち上がった。

顔を真っ赤に染めながらレミールは叫ぶ。

「殺せっ!! 衛兵を、——いや、剣を持って来い! 私自らの手で殺してやるっ!!」

「化けの皮が? がれたみたいだけど。最初の余裕はどうした?」

皇女からの殺意を正面から受けても動じずに、雲川芹亜は告げる。

並みの人間であれば怯えるはずの状況だが、身じろぎの一つもしない雲川を見たレミールは少し冷静になった。

（いや待て、このまま殺してもいいのか? これは明らかに理解した上での挑発だ。まさか、殺されることを前提に派遣したのであれば——何かの罠か? 例えば、命の危機

に陥った際に活性化する魔力の性質を利用し、自爆を行うとか……。自爆魔法など馬鹿げているが、文明圏外の蛮族ならばそんな野蛮な魔法すら開発するかもしれない。何も起こらなかつたとしても、別の大使を派遣させるのも面倒だ。ならば――)

「剣はもう良い、元に戻しておけ。妙なことをされても面倒だ」

「おや、拍子抜けだな。てつきりそのまま殺されるのかと思つていたけど」

「抜かせ。あんなあからさまな挑発に私が引つ掛かるとでも思うたか。何を企んでいたかは知らんが、残念だったな」

「特に狙つた意図は無いが……。何を勘違いしている？」

「大した食わせ者だな。小娘だと思つていたが、中々やるようではないか」

「そう思っている事が、すでに誘導された思考だと気づいているか？」

あれだけ脅したにも関わらず、雲川は挑発を続ける。

それを見たレミールは自身の考えが正しかったと確信した。

「何とでも言うがよい。もはや、貴様の思い通りにはならんよ。話が逸れたな。では改めて問おうか、学園都市の使者よ。その命令書に従うのか、それとも国滅びるのか」

「ああ、その答えならば当然、否だ。わざわざ植民地などに成り下がるつもりはないけど」

レミールは悪魔のような笑顔を浮かべながら言う。

「ほっほっほ、言うではないか。貴様の目は想像以上の節穴であるようだ。やはり蛮族には教育が必要なようだ、皇帝陛下のおっしゃるとおりだ」

「へえ、教育といつたか。パーパルディア如きに教わることなど、我が国には無いと思うのだけど」

「ちつ、いい気になるなよ属国が！……だが、それもいつまで持つかな？お前たちは皇帝陛下に目を付けられたのだぞ。しかし、陛下は寛大なお方だ。お前たちが更生の余地があるか……教育の余地を与えてくださった」

レミールは水晶の方へ歩いて行つた。

「これを見るがいい！！！！」

レミールが、パチンツと指を鳴らすと眼前の水晶体に質の悪い映像が映し出された。

「ニシノミヤコの学園都市観光客か。外交で人質を取るなど、やはり貴国は野蛮であるようだな」

首に縄をつけられ、各人が縄で繋がり、一列に並べられている人々、その数は百名近くにのぼる。全員が学生であり、皆、脅えきつた顔をしている。

「おや、あまり驚かないのだな。薄情な女だ。兎に角、こやつらは我が国に対する破壊活動をする可能性があるのでな。スパイ容疑で拘束している」

「……、」

「お前たちがこの命令に従うのであれば、貴様の無礼な発言を含めて見逃してやったものを……」

レミールは懐から通信用魔法具を取り出して、

「処刑しろ」

簡潔な言葉で以って命令を下した。

「貴様らが悪いのだ。我らの命令に従わなかったからこうなるのだ。次のアマノキまでに命令に従わなければ、さらに血を見ることに——」

「構わんよ」

あつさりど。

雲川芹亜は百人の命を切り捨てた。

「な、に……?」

「別に構わないと言っている。聞こえなかったのか?」

少なくともレミールにはそう聞こえた。

しかし。

「世迷い事を!! 自国民を殺されて何の反応もしないなど、貴様それでも——」

ふと、気が付く。

「何故……、なぜ誰も動いていない？ 命令だ!! 奴らを処刑しろ！ おい、聞こえてくるのか!!」

水晶に映っている光景に、何ら変化はない。

初めと変わらず、一滴の血液すら映ってはいなかった。

「ちっ、故障か？ こんなときにつ!! 誰か、代わりに物を持って来い!!!」

「いいや、違うね。単純に、彼らに余裕が無かったからと言い換えても良いけど」

「……?」

雲川はまるで予言したかのようなタイミングで告げる。

「例えば、突如として発生した襲撃で、余計な事をする暇がなくなった、とかね」  
「っ?」

レミールが小首をかしげたその直後の事であった。

ぎゅっつっバツツツ!!!! と。

水晶に映る景色の奥で、何発も爆発が生じた。

「わざわざ、時間稼ぎに付き合ってもらって感謝するよ、皇女様。既にアンタは『掌握』されていたってわけだ」

「な、なっ、な……、」

「さて、大量殺人未遂犯として逮捕したい所だけど、生憎、私にはそんな力も権限も無いのでな。手短に言わせてもらおうけど」

「こ、殺せ！ 今すぐこの女の首を撥ねろ！！！！」

命令を受けた衛兵が切りかかるも、首を落とす寸前に雲川の姿が掻き消える。

「ツツツ！！！！」

「学園都市としては、パーパルディア皇国と友好的な関係を築きたかった」

レミールの後方から、声が聞こえた。

「しかし、そちらがそのような対応をするのであれば致し方ない。何の罪も無い観光客を殺害しようとする貴国とは良好な関係は期待できないからな」

近代魔法でも成しえない瞬間移動<sup>テレポート</sup>。

そんな皇国外務局員の動揺を無視して、雲川芹亜は続ける。

「武力には頼りたくなかったが、現状を放置すれば、学園都市の人間も含めた多くの人々

が犠牲になることだろう。その際に振えるにも関わらず、武力を用いず静観するのは正しいのだろうか」

大義名分は得た。

ならば、後は宣言するだけだ。

「よって、我々学園都市は、貴国パーパルディア皇国に対して宣戦布告を行う」

直後。

雲川芹亜は会談室から、完全に姿を消した。

呆然とするレミールを、会議室へ置き去りにしたままに。

## 第十三話 何処にでも居る平凡な Hero\_Who\_Are\_Everywhere

1

フェン王国、ニシノミヤコ郊外、野戦陣地

パーパルディア皇国軍の陸将ドルボは、突然鳴り響いた爆音に驚いていた。

「何事だ!!まだ何処かにフェン王国軍の残党が隠れていたというのか!!」

かなり野戦陣地に近い場所で発生した爆発は、ここからでも確認できるほど大きいものであった。

「襲撃のようです!!クソツ、見張りは何をしていた!!?!」

一息付いていた陸戦隊員に、急ぎ装備を整えさせ、戦場へ送り出した、が。

「……………」

ドルボの表情は晴れない。

(今の爆発……皇軍のものでは無いな。なら、あの色とりどりの煙は一体何だというのだ……)

「何も起こらなければいいが……」



陸将の呟きは、風に吹き流された。

2

幻想殺しの力を持つ少年、上条当麻は、学園都市観光客が囚われたという場所へ急行していた。

「クツソ、まだ殺されていなければいいが……」

周囲を見渡してみると、他にも大勢の人間が観光客を助けようと動いているようだった。

初め、上条は『人的資源』のように乱戦状態に陥ることを警戒していたが、どうやら今回は様子が違うようだった。

（全員、無事でいてくれよ）

幻想殺しは何の変哲もない銃器にはめっぽう弱い。

だが、だからといって上条当麻が行動を起こさないとという訳ではない。

上条当麻が上条当麻である所以は恐らくそこにある。

「だったら派手に動いてこっちに注意を向けるべきか。奴らも戦闘が起こっている最中に処刑なんてできないだろうしな！」

「おう、やっぱりアンタ、いい根性してるぜ」

近くに誰も居ないかつたはずだが、突然声が響いた。

それもその筈、彼は上条との間にあつた数十メートルの距離を、一蹴りで詰めて現れたのだから。

「これは俺も根性入れなおさないとな！」

——直後、派手な爆発が起こつた。

第七位の超能力者が気合を入れた瞬間、後方からカラフルな煙が噴出したのだ。

「よっしゃ、行くぞカミジヨー!!」

「ちよ、おま、ヤメ——」

ドガツツツ!!!!と。

上条を片腕に抱えた削板が勢いよく地面を蹴り、野戦陣地へ突撃する。

僅か数歩で陣地へ突入した削板は、上条を着地させて叫ぶ。

「すごいパーンチ!!」

その言葉と同時に前方のパーパルディア兵がまとめて吹き飛んだ。

マスケット銃を構える暇もなく、一方的に蹂躪された。

「な、なんだ貴様は!!!!」

突然、理不尽に晒された兵士の一人が叫んだ。

「オレは削板軍覇だ。ここに根性が無い奴らがいると聞いてな。一発ぶん殴りに来てやった！」

「はあ？ テメエふざけてん——」

「すごいパーンチ!!」

再びパーパルディアの兵士が吹き飛ぶ。

周囲にまだ根性無しが残っている事を確認した削板は、振り返りながら告げる。

「ここはオレに任せて、先に行つてなカミジヨ——!!」

「っ！ 頼んだぞ!!」

上条は再び走り出したが、その後ろからパーパルディア兵が追いかけてようとする。

「待てっ、ここから先には行かさんぞ！」

数名の兵士がマスケット銃の標準を上条に合わせ、発砲しようとするも、

「後ろから狙い撃ちするとは、根性入ってねえな！」

やはり、ナンバーセブンに吹き飛ばされる。

よって。

「ちっ、コイツから先に始末しろ！ 魔法使いか何かは知らんが、銃弾を受けて死なない

人間はいねえ!!!」

「何処からでもかかってきやがれ！ その腐った性根叩き直してやるからよ!!!」

パーパルディア皇国軍と削板軍覇。  
二つの勢力の戦闘が開始された。

3

フエン王国上空を黒い物体が飛行していた。

御坂美琴と食蜂操祈。

『対魔術式駆動鎧』を身にまとった二人はニシノミヤコへと向かっていた。

「つたく、世界が丸ごと変わったつてのに、あの馬鹿は何も変わらない訳ね！」

「御坂さん、怒りすぎてまた鼻血力が溢れちゃつてるケドお」

「うっさいな汁能力、そもそもアンタどっから湧いてきた！」

「前は御坂さんの方から付いてきたのに、自分がやられて文句をいうのは筋違いだと思  
うけどお。あと、私はまだ数えているからな」

いつか必ず御坂さんに変態ダンスを！と意気込む第五位を無視して、御坂美琴はA.  
A. A. の操縦に戻る、が。

「え？」

突然、目の前に非常にファンタジーしている異世界的な生物が現れた。

具体的に言えばワイバーン。パーパルデア皇国軍の飛龍部隊が、我が物顔で上空を陣取っていたのだ。

「またこのパターンか!!」

だが、何度も同じ失敗をする御坂美琴ではない。イギリスでの経験は無駄にするわけにはいかなかったのだ。

ギリギリのところで旋回、辛うじて直撃は免れた。

しかし。

「みさっか、すわあんまた墜落してるって!!??」

「ならアンタがやってみなさいよ!!これでも直撃しなかった分だけマシなんだから!!」

二人のヒロインは偶然にも、騒ぎの中心地へと落下していく。

あるいは。

そういった人間のことを『ヒーロー』と呼ぶのかもしれない。

4

上条当麻は魔法使いの集団と戦闘を行っていた。

途中、何度も銃をもった敵兵と遭遇したが、周囲に見える人数だけでも百二十人。それだけの数のヒーローが存在しているのだ。即興でも、互いの弱点を補いながら戦うことは造作もない。

不意に放たれた銃弾を、黒髪ロングの美少女が光剣で叩き落とし、突然現れた敵の集団を、拡声器を持った女性が音圧で吹き飛ばす。

もちろん、上条当麻も黙って見ていた訳ではない。

リロードの瞬間を狙われた、ピンクづくめの幼女に迫る炎弾を弾き飛ばし、魔力切れで倒れ伏していた、頭のおかしい魔法少女への攻撃を打ち消した。

ヒーローにも弱点というものはある。

だが、互いにそれを補い合った彼らに、果たして勝てる存在がいるのだろうか。相性によっては、優勢に戦える場合もあるだろう。

実際に、絶対防御を身に纏い戦場を駆けまわっていた『白』に対して集中砲火を行った魔法師部隊は、偶然にも撃墜に成功した。魔法攻撃には極めて弱かったのか、一方的な攻撃を行え、撃破に至る寸前だった。

しかし。

そこに上条当麻が介入した直後、状況が一変した。

無数に迫る風の刃の一部を消滅させ、安全地帯を作り上げる。

突進防御用に生み出された土壁を真正面から叩き壊し、魔法使いに肉薄する。

魔法使いにとつて、幻想殺しとの相性は最悪と言つていい。

わずか二分で十数名程の魔法使いが脱落した。既に戦力は半減している。しかし、逃げ帰る訳にもいかない。たった一人の人間に誇り高き宮廷魔導士が壊滅させられるなど、彼らのプライドが許さなかつた。

「クソ野郎が、これでもくらいやがれ!!!」

十人の魔法使いによつて生み出された大規模魔法が上条当麻に迫る。

すると、上条は身をひねり、火焰弾の下から突き上げるように右手を動かした。

消去と干渉。二つの能力を使い分け、上条当麻は危険を回避していく。

上方に大きく逸れた火焰をくぐり抜け、一人ひとり着実に敵を沈める。

戦闘時間はおよそ五分。

せめてもの足掻きと、最期に残つた魔法使いが叫ぶ。

「化物め!!! 何故こうも一方的な戦いになるのだ! 我々は世界四位の列強、誇り高きパーパー」

「そんなつまんねえ幻想は、俺達が跡形もなくぶち壊してやる!!!」

見事なまでのクリーンヒットだった。

顔面を強固に打ち付けられた魔法使いの意識は、完全に途絶えた。

5

パーパルディア皇国軍兵士は困惑していた。

——目の前に居る人間は、果たして本当に人間なのだろうか？

そんな疑問が噴出するほどに、その人物の理解ができなかった。

なぜなら。

「お前今絶対当たっただろ！今、絶対弾丸当たったって！！何ピンピンしてんだよぶつ倒れるよこの野郎何で死なねえんだ！！？」

「はっはー、根性だよ、根性！！」

「それ以外にもなんかあんだろ！！」

「強いて挙げれば学園都市の超能力者の一人、七人の内の七番目、ナンバーセブンの削板軍霸という事もある訳だが、そんなのは些細な事だ。——今ここで論じるべきは、こ

のオレの中には怒涛の如く煮えたぎる根性が満ち溢れているという事だーっ！！」

両手を大きく広げ、背中を弓のようにそらし、天に向かって吠えるように宣言する削板もしくは根性さん。どういう理論か知らないが、彼の背後がドバーン！！と爆発して赤青黄色のカラフルな煙が出てきて、非常に目立っている。それが、人質救出に一役買っ





「すごいパーンチ」

「人の話を聞けよこの野ブギユルワ!!」

駒の様に高速回転しながら飛んでいく指揮官氏。はれて高速回転ニキでびゅーと  
なった。

ナンバーセブンと二代目右方のなんとかさんとの間には十メートル以上の距離が  
あったはずなのだが、お構いなしのクリーンヒットであった。

「…………ちよ、げふつ。なに…………今のナニ…………?」

「んっふっふーん。これぞ学園都市第七位の真骨頂。体の前にあえて不安定な念動力の  
壁を作り、それを自らの拳で刺激を与えて壊す事によって、爆発の余波を遠距離まで飛  
ばす必殺技。念動砲弾とはこの事だアアああああああああああ!!」

ドバーン!!と一般公開される新事実。

しかし。

「まあ、原谷っていう賢そうなインテリちゃんに全否定されたがな。どういう理屈で何  
が出たのかは知らんが、恐らくは、このオレの溢れんばかりの根性パワーを砲弾として  
撃ち出す必殺技だとみたアアああああああああ!!」

「うおおおおおおおおう!!アバウト!!必殺技の取り扱いがすごく大  
雑把!!そんなんで倒されるほうの身にもなってみるテメエちくしょう!!」

「すごいパンチ」

「一発目と何も変わらブルウヘ!」

ぐるぐるぐるぐるーつ、と回転しながら吹っ飛ぶ指揮官改めモツ鍋さん（仮）。

モツ鍋さんはこんなお祭り野郎に負かされるのだけは死んでも嫌なようだが、物理的なダメージはどうしようもない。立ち上がるとうとするのだが、両足がガクガクと震えるだけで、それも敵わないようだ。

「くつ、ナンバーセブンとか言ったか……貴様もやるようだな」

戦う事はおろか、逃げるだけの体力も残されていない二代目さん。

彼も己の末路を理解したのか、やがて削板の顔を見上げてこう言った。

「……一つだけ良いか」

ふつ、と。悪党とは思えない程純粋な笑みを浮かべた男は、

「せめて、最期はとびつきりの一発で決めてくれ。すごいパンチとか超おぎなりなヤツじゃなくて、ぶっ飛ばされるなりに意義があつたと感じられるような、正真正銘の一撃をな」

それを聞いて、ナンバーセブンは静かに頷いた。

彼はゆつくりと拳を握り、すう、と息を吐きながら、

——否。

「すごいパンチ」

「だからそれやめろつつただらうがビブルチ!!」

——こうして、とある一部隊は壊滅した。

パーパルディア皇国軍にとって非常に不本意な形で。

## 第十四話 白より白き純白の C o n t r a s t i n g

## | T w o | P e o p l e

1

竜騎士長ジェアールは百三十のワイバーンロードと共に陸戦隊の陣地へと向かっていた。

『もうすぐ、野戦陣地へ到達します。いかがなさいますか？』

副官からジェアールに通信が入る。

「ふむ、敵軍のワイバーン部隊は壊滅したはずだ。多少は残っているかもしれないが無視していい。ならば、分隊ごとに散開して攻撃を行え。一騎も墜とされることはないだろうが、警戒を怠るなよ」

『了解！』

ワイバーンロードは、通常のワイバーンの五倍ほどの戦力を持つ。そう簡単に墜とされる心配はない。

（フェン王国軍め……一体何処に隠れていた？ 陸戦隊が援軍要請する程の戦力ならば、今まで温存していた理由が分からんぞ……）

ジエアールは思考を続けようとするも、部下からの報告が入る。

『報告します！ 前方に未確認騎を確認。数は一騎で、偵察用かと思われまます……が……』  
『どうした？』

『それが、とても飛龍のようには見えなくて……。どちらかと言うと虫——白い昆虫の  
ような生物が……』

「虫だと？ ワイバーン程のか？」

『ええ、非常に大きな昆虫——あつ、竜騎士の姿が見えません。どうやら野生生物のよう  
です』

「そうか、向こうから仕掛けて来なければ無視していい。邪魔するようなら排除しろ、い  
いな？」

『了解しました』

部下との通信が切れる。

（巨大な昆虫か、案外世界も広いものだ。まだ、そんな生物が存在していたとはな。航空  
戦力としての転用も可能かもしれんが……あまり虫には乗りたくないものだな）

竜騎士長ジエアールは知る由もなかった。

——部隊の正面に陣取った、一匹のカブトムシの正体を。

竜母艦隊は混乱に陥っていた。

——飛龍部隊、壊滅。

その言葉と同時に、部隊との交信が途絶えた。

「まもなく出撃可能で——」

「今すぐに飛ばせ!! 皇軍に泥を付けた野郎を叩き潰してやれ!!!」

激怒したメドロの命令によって、先ほどの倍以上、約三百騎のワイバーンロードが飛び立つ。

「ちっ、何をしたのかは知らんが、舐めやがって!!」

ある程度叫んで冷静になったのか、メドロは状況を分析し始める。

（フェン王国にワイバーンロードに勝てる兵器など存在しなかったはずだ。学園都市の可能性もあるが……流石に百三十騎ものワイバーンロードを瞬殺できるとは考えづらい。なら、伝説級の飛龍でも出たのか？ まさか、有り得ない。しかし——）

メドロが思考の海に潜っていると、第二次攻撃隊から通信が入った。

『目標空域に未確認騎を発見しました。いえ、訂正します、目標空域に巨大な昆虫を一匹発見しました』

「飛龍でも飛行機械でもないのか？」

『はい、あの虫が部隊を壊滅させたとは考えにくいですが……撃墜しますか？』

「ああ、念のために墜としておけ。あらゆる可能性を考えておきたい」

『そうですか、了解しま——なっ?! 増えただと!!?!』

「おい、何があった!!」

『分裂しました! 例の昆虫が!! 数が五匹に——』

第二次攻撃隊への悲劇は続く

『ツ?!、砲撃!!?! くそ、十騎も墜とされた!!』

「何だと!!?!」

『まずい、速すぎる! 総員一斉射撃だ!! 何としても奴をビギユグ』

——爆音と共に、通信が途絶した。

3

「隊長!!!!」

竜騎士ハーレイは墜落してゆく隊長を見て叫んだ。

直撃こそしなかったものの、この高さから落ちて助かる人間はいない。

「畜生つ、虫野郎が!!!!」

ワイバーンロードが一斉に顎を開き、

「隊長の仇だ! 撃てエエええええ!!」

号令と共に五匹のカブトムシに炎弾が撃ち出され、



ゴツツツばつつつ!!!! と。

三百の火炎弾が連鎖的に爆発した。

——回避など、許さなかった。

「へっ、ざまあ見ろ。わざわざ齒向かわなければ見逃して——

『あまり、舐めてもらつては困りますね』

聞こえるはずのない声が、黒煙の中から響いた。

煙が晴れるとそこには、多数の昆虫を従える一匹のカブトムシがいた。

——攻撃を受ける前と変わらず、傷一つない姿で。

「きつ、効いてないのかっ!!!!」

竜騎士の叫びを無視して、カブトムシは宣告する。

『殺しはしません。ですが、少々痛い目には遭つてもらいます』

目の前の、主人格とも呼べるカブトムシの表面がひび割れていく。

だがそれは、ダメージが蓄積したことによるものではない。

パキンッ! と。

カブトムシの外殻を割るようにして、中から一人の人間が現れる。

『さて、私の未元物質はこの新世界で、どこまで通用するのでしょうか?』

第二位の超能力者、垣根帝督。

世界中の軍隊を一人で相手取る程の実力者が、皇国軍へ牙を剥いた。

4

パーパルディア皇国、皇軍の戦列艦百八十隻を含む二百八十隻の大艦隊は野戦陣地への援護を行うため、全速度で移動していた。

「襲撃か……。陸戦隊は一体何をやっていったのか」

「全くですね。蛮族相手に後れを取るとは、皇国軍の面汚しですよ」

「まあ良い。多少味方に被害が出て構わん。敵艦隊を撃沈した後は、艦砲射撃で敵軍を一掃しろ」

「はっ、了解しました！」

陸戦隊と同行していた砲艦二十隻は、既に沈められたと聞く。

敵は陸上戦力だったと通信が入っているが、それなら船が沈められるはずがない。

敵艦隊が近くに存在していると考えるべきだろう。

（まあ、我々の敵ではないだろうがな。百八十もの戦列艦に対抗できる軍隊など、列強以外に存在するはず——）

突如。

ゴバツツ！！！！と。

將軍シウスの思考を遮るように、船が大きな衝撃波を受けて傾いた。

「っ!! 何が起きた!!」

「分かりません! ただ、他の船も同様に傾いているようですが……」

「索敵班! 状況を報告しろ!!!!」

慌ただしくなった艦橋に、熟練の見張員からの報告が入る。

「三時の方向! っ!! 何かが見えます!!」

「なっ!!!!」

そこには、一人の人間がいた。

正確に言えば。

全身を白系統の服装で固めた少年が、同じく純白の翼を携えて宙に浮かんでいた。

「馬鹿な……有り得ん!!!!」

シウスは狼狽した。基本的はこの世界には自力で飛行可能な人間や亜人はいない。

だが、過去にはそれが可能な種族が一つだけ存在していたはずだ。

「光翼人!! まさか、古の魔法帝国が復活したとでも言うのか!!!!」

実体を持たない光翼を持つとされるヒトの上位種。

膨大な魔力を持ち、世界を征服していたとされる神話の時代の種族。

それが存在しているとすれば、ラヴァーナル帝国が復活したということになる。

「今すぐ本国へ報告しろ!! 皇国の——いや、世界の危機だ!!!! 各艦、全力で砲撃を行

え!!!! 絶対に奴を逃がすな!!」

「それだと、射線上の味方艦を巻き込んでし——

「いいから撃てえええええ!!!!!!」

「っ!! 了解!!」

しかし、その悪魔のような命令が実行されることはなかった。

ザザザザツ!!!! と。

無秩序に揺らめく海流のベクトルが収束してゆく。

ちようど、艦隊の中央を終点とした巨大な渦を描くかのように。

「なんだコレは!! どうなっている!!?! ラヴァーナルの魔法か!!?!」

「將軍、今すぐ退艦しましょう! このままじゃ飲み込まれます!!!!」

「馬鹿者!! それこそ巻き込まれるぞ、泳いで脱出できるものか?!」

「しかし、このままでは!!!!」

直径一キロメートル超えの超大型渦潮。

現代の艦船でもバラバラに碎かれる程の威力を誇る災害に、十八世紀の木造艦が抗えるはずがない。

「こんな……こんな現実があつてたまるかああああ!!!!」

將軍シウスの魂の叫びは渦へと飲み込まれ、跡形もなく粉碎された。

また一人、竜騎士が墜落してゆく。

邂逅から十分。

既に竜騎士の半分は墜とされた。

しかも。

「あああああああああああ!!!! わ、なっ!!!! あえ……?」

敵はわざわざこちらの竜騎士を拾っているのだ。

現在の死者は双方ともにゼロ。

敵方に一切の被害はなく、

味方は一方的に墜とされ、救出される。

通常、こんなことは有り得ない。

列強と文明圏外との空戦でも僅かながら被害が出るというのに、それが無い。

相手は一人。

先ほどまで引き連れていた虫は、低空を飛行して脱落者の救出を行っている。

明らかな手加減。その上での蹂躪。

「ツ——!!!!」

言葉すら出なかった。

はらわたが煮えくり返っているというのに報復すらできない。

それは列強のプライドを酷く傷つけた。

(ツ、殺してやる!!!!)

一個小隊が連なつて突撃する。

旋回、竜騎士の上空に移動した垣根が六枚の白翼を振り回す。

「クソツツ!!」

十人の竜騎士が同時に叩き落され、カブトムシに回収される。

直後、鮮血が撒き散った。

騎乗者を失い混乱したワイバーンロードが垣根の攻撃を受けて肉片と化したのだ。

圧倒的な実力差ではない。

言うならば絶対的。

比べるのもおこがましい程の実力差。

皇国軍の優秀な竜騎士が次々と撃墜されてゆく。

数匹の飛龍が火炎弾を撃ち出す。

それに対して垣根は防御すらせず強引に突破し竜騎士へと肉薄する。

「いい加減に墜ちろオオおおお!!!!!!」

「遅いですよ」

……自滅覚悟で突進攻撃を敢行した竜騎士も、超音速で背後へ回り込まれて攻撃を受ける。

ザザ。

……逃走を試み……龍が殺人光……焼き払わ……消し……化す。

ジジジ。

……性質……み替えら……風が竜騎士へと襲……かる。

ザザザガリガリ。

……白翼……高速で撃……し、飛……肉体を削り……。

じじざざじ!!

……移動……発生する衝撃波……壊を撒き……す。

ガリガリガリガリガリガリ!!

……一瞬……倍に伸びた翼が……騎……き墜と……。

ざざざガガガリガリガリガリガリジジジジジジジざざざガリガリザザザザザザザじじじじじじじりじりざりざりガリガリガリガリじじじじざざざざざざががががががががつつ!!

戦いにすらなっていなかった。

あたかも雑草を刈り取っていくかのように一方的な破壊。

当初三百人もいた飛龍部隊も残り数人しか残っていない。

「ちくしょうつ、舐めやがって!! 絶対にぶっ飛ばす!!!!」

「威勢がいいのは結構ですが、精神論だけでは私には勝てませんよ」

逆転の余地など無かった。

ズバツツツ!!!! と。

烈風に煽られて墜落してゆく竜騎士を最後に、飛龍部隊は全滅した。



## 第十五話 きつと正義はどこにでも Black to

## Light

1

「……、」

パーパルディアの皇族レミールは通信魔導具の前で呆然と佇んでいた。

突然発生した襲撃、叩きつけられた宣戦布告、跡形もなく消えた外交相手。

レミールの脳内はとっくにショートしていた。

画面の中では皇国軍が蹂躪され、吹き飛ばされてゆく。

第三文明圏最強の軍隊が文明圏外の蛮族に押されている。その事実はレミールにとつて我慢ならないものであった。

「これは……何だ。何が起きているというのだ……」

辛うじて絞り出した声は震えていた。

それは恐怖によるものか、それとも怒りによるものか。それを判断できる程の余裕を持った人間は、この場にはいない。

レミールの眩きに答える声は無く、ただ通信機のノイズに紛れて消え去るだけであつ

た。

2

上条当麻は、いくつかの魔法部隊と交戦しながら野戦陣地内を駆けまわっていた。

「畜生、何処にいるんだ！ 早く見つけ出さねえと不味いぞ!!」

かれこれ十五分は経ったが人質は未だ見つかったくない。

とは言え陣地の半分は制圧したので、見つかるのも時間の問題であろうが……。

しかし、そんな上条の考えは遮られることになった。

爆炎。

摂氏三千度にも及ぶ焔が上条当麻の後方から襲い掛かった。

それに対して上条の取った行動は簡潔だった。

ただ、無造作に右腕を振るう。

それだけで必殺の一撃は効力を失い、消滅した。

「今の攻撃に対応するとは、貴方も中々のやり手ですね」

すると、立ち込める黒煙の中から若い男の声が聞こえてきた。

すぐさま術者を仕留めようと足に力を込め、

「——ッ!!」

突如踵を返し何も無い空間に右腕を叩きつける。

僅かな抵抗感。

直後、不可視の一撃は消滅し、砕け散った。

二段仕掛けの奇襲。術者の技量も高い。

警戒を強める上条であったが、不意に不可視の攻撃が飛んできた方向から声が響いた。

「へえ、流石に私の部下を倒しただけのことはありませんね」

声と共に何も無い空間が揺らぎ、徐々に輪郭を形作る。今度こそ術者が姿を現した。

全身をローブや装飾品で彩った、見た目二十代程の男性。

いかにも『異世界』といった装いの男に上条当麻は叫ぶ。

「誰だテメエ！」

「皇国第三魔法師団団長、オスカー・オルコット」

あつさりど、魔法使いは自分の正体を告げた。

それは騎士道精神に基づくものか、死にゆく人間への餞別なのか。

「ですが、覚える必要はありませんよ。もうすぐ貴方は死ぬのですから」

その言葉と同時に詠唱を開始する。

「《舞えよ踊れよ大氣の精霊・荒れよ狂えよ紅蓮の王よ・——」

オスカーの右掌の上に二色の魔法陣が展開され、場に魔力が溜まっていく。

先ほどの奇襲と異なり、上条の肌にもピリピリとした異物感が感じられるほどの濃度だ。

「——我が手に集いて力を示せ」

直後、火炎放射器と比較にならない威力の炎が烈風に後押しされ、上条へと襲い掛かる。

幻想殺しでさえも飽和させる一撃は上条を飲み込み、死に至らせるはずだった。

しかし、すぐさま打ち消せないと判断した上条は正面から殴りつけるのをやめ、火焰のふちをなぞるように右手を動かす。

攻撃への干渉。

長年、幻想殺しと共に歩んできた上条当麻にのみ許された運用方法である。

ただ特別な右腕を持っているだけでは再現できない、唯一無二の技術。

上条はその類い稀な戦闘センスをもって、致命の攻撃を回避する。

「ちっ、《舞えよ踊れよ——》」

「遅せえ！」

オスカアの詠唱が終わる前に上条が踏み込む。

しかし、残り五メートルを切ったところで上条の体が不自然に沈み込んだ。

「なっ、詠唱は——」

足元には魔法による泥沼が出現していた。水深は十センチと浅かったが、上条の足は止まってしまふ。

直後の出来事だった。

ズバシユツ!! と。

無防備となった上条の左右から不可視の刃が襲いかかる。

「ちくつしよ、無詠唱か!」

幻想殺しは多方面からの同時攻撃に弱い。

超高密度の範囲攻撃ならば破片同士の干渉で安全地帯を作り上げられるが、この状況には当てはまらない。

悪態を吐きながらも上条は上半身を大きく反らし、魔法の回避を行う。同時に二つの魔法に対処することはできないと、咄嗟に判断した結果である。

が。

「——我が手に無慈悲な安らぎを」

当然、オスカーの詠唱は続いている。

今度は右掌に巨大な魔法陣が出現し、台風をも超える暴風を生み出した。

「ツッ!!」

右腕を伸ばし魔法を逸らそうとした上条だが、不安定な姿勢からでは完全に逸らしき

ることは出来なかった。

風に煽られ、転倒してしまう上条。力の大半は打ち消せたため、吹き飛ばされることは――

否。

打ち消してしまった。

上条は倒れる際に、衝撃を軽減しようと反射的に手を出してしまった。通常ならその対処に問題はなかったはずだ。

しかし、現在上条が立っているのは泥沼の中である。

魔法によつて変質させられた泥に、神の奇跡さえ打ち消す右腕が触れたらどうなるのか。

結果は明白だった。

上条当麻の足先と左腕が、ただの土塊へ戻った地面へ完全に埋まる。

ハワイ諸島でも使用された、幻想殺しへの対策。

足潰し。

機動力を失えば、上条の戦闘力は大幅にダウンする。

先の風魔法で吹き飛ばされていれば、こうした致命的な事態に陥る必要はなかったはずだ。

だからといって後悔している時間はない。戦闘はまだ続いているのだ。

「《揺れよ震えよ大地の化身・その悠然転じた破壊の力よ・——》」

オスカーが詠唱を始めるのを見て、上条は慌てて足を引き抜こうとするが、

「——我が手を介して打ち砕け」

隙を晒す上条当麻に、数多の石礫が襲い掛かる。

対する上条は右腕を掲げ、数万と迫りくる石礫の一つをその指先で打ち消した。

それだけで、四方八方へと飛び散った破片が迫る破壊へと激突し、その軌道を変化させる。

しかし、空白の安全地帯を生み出しても、まともに動けない状態では、体をねじ込むことは出来ない。

直後。

自ら生み出した破片により、上条の身体は大きく吹き飛ばされた。

「あ、があッ！」

全身に鈍い痛みが奔る。

直撃を受けて死ぬよりはマシであるが、受けたダメージは大きい。

上条は痛む体に鞭打って立ち上がろうとするが、空間が揺れ動くのを無意識下に見ると、勢いそのままに転がった。

前兆の感知。上条が回避すると同時に、不可視の刃が地面に突き刺さる。

「まったく、恐ろしい人ですね！」

必殺の攻撃を凌がれたオスカーは、無詠唱魔法を発動させた。

立ち上がった上条の右側から迫るのは、数百の炎の槍。

上条はそのどれかを殴りつけ、破片を撒き散らし、作り上げた安全地帯へと跳び込んだ。

そのまま着地しようとしたが、地面が一瞬発光するのを見た上条は、空中で体を捻り、右手から転がるようにして着地する。

体勢を崩した上条、再びオスカーに好機が訪れた。

しかし、予想に反して上条へ向かったのは、たった三本の炎の槍。

その上、二本は直撃コースを外れていたため、危なげなく切り抜けた。

（牽制攻撃？ 何でこのタイミングで——）

既にオスカーからの攻撃は止んでいる。無詠唱魔法単体の効果は薄いと判断からだろうか。

両者は十メートルの距離を置いて睨み合った。

「素晴らしい！ なかなかどうして、楽しませてくれるではないですか貴方は」

「デメエ、ふざけてんのか！」



突然、軽快な口調で話し出したオスカーに、上条が噛みつく。

「いえいえ、馬鹿にしている訳ではないのですよ。ですが、ここ暫く私と互角に戦える人間は見えていなかったのですから」

オスカーは興奮しているのか、大仰な身振りを交えて歩き回る。

「第三魔法師団などに左遷された際には、殺してやろうかと思いましたが、これはあのクソ野郎にも感謝するべきでしょうかね。これほどの実力者を相手にできるのですから！」

（っ？ この感じ、何処かで——）

上条はオスカーの言動に既視感を覚えていた。

しかし、上条がその答えを得るよりも、ふと立ち止まったオスカーが行動を起こす方が早かった。

「どうしました？ 来ないのならば此方から行きますよ!!」

「ちっ、考えるのは後か！」

オスカーが過剰な装飾が施された杖を一回転させ、言葉を紡ぐと、杖の軌道をなぞるように円形の炎が生み出された。

それは瞬時に巨大化し、壁となって上条に迫る。

（狙いが甘いつ、好都合だ！）

上条は右腕をかざしつつ、炎の右側へと迂回する形で避ける。が、それを予期していたかのように不可視の刃が襲う。

「こんなもの、何度やっても同じ結果じゃねえか!!」

上条は空間の揺らぎに右手を叩きつける。

(対抗策が練られていることは、向こうも分かっているはずだ)

上条は地面に出現した泥沼を避け、オスカーに突撃する。

(なら、敢えて同じ無詠唱魔法を使う理由があるに違いない。他の魔法なんか、アイツには腐るほどあるだろうからな)

オスカーが放った高威力の爆裂魔法を逸らし、背後から迫る風の短剣を吹き飛ばす。

(他の魔法を使わなかったのではなく、使えなかった？ それなら辻褃は合うが、何がアイツを縛ってるんだ?)

突撃する上条に、焼けた空気を切り裂きながら不可視の刃が襲い掛かる。

(ステイルの魔女狩りの王は、強さがルーン枚数に依存するという縛りがあった。シエリーのゴーレムにも、二体以上の召喚は不可能という縛りがあった)

すぐさま右手をかざし魔法を砕くが、上条の左右を掠めるように破壊の光線が迸る。

(バードウェイの魔術にも、新たな術式は強化出来ないという縛りがあった。アレイスターは、自身の魔術による飛沫を受け止めるとい縛りを設けていた)

同時にオスカーの詠唱も終了し、左右への回避を妨げられた上条の正面から、炎と風の複合魔法が襲い掛かる。

上条は掬い上げるかのように右腕を動かし、魔法を上逸すが、炎によつて遮られた視界の奥から飛び出した魔法まで回避することは叶わず、再び吹き飛ばされた。

「ぐ、がはっ!!」

「おやおや、もう終わりですか？ 貴方ならもう少し楽しませてくれると思ったのですがねえ」

「ち、くしよ、舐めるなよテメエ、こつちは何があつても引き下がる訳にはいかねえんだ！」

「その心意気、実に結構。死ぬにしても、もつと私を楽しませてから死んでほしいものですね!!」

オスカーは詠唱を始める。

呼び出すのは炎の精霊魔法、個人で使える魔法の中では最高の威力を誇るものだ。  
 (クソ、必ず何かがあるはずなんだ！ それさえ分かればっ!!)

上条は悲鳴を上げる関節を無視して、オスカーに向かつて走り出す。魔法が発動する前に距離を縮めようという魂胆だ。

この僅かな時間でも上条は考察を続ける。

〔土御門には、魔術を使った際に代償がある。オリアナには——〕

そこまで考えて上条は、

ダンツツ!!!! と。

大地を力強く踏みしめて、迫る火焰を正面から迎え撃った。

先と同じように、炎を上方に逸らす上条。

しかし、がら空きとなつている下半身への攻撃は無かつた。

「読めたぞ」

「素人如きに看破される術式は、扱っていないと思うのですが」

「知り合いに、似たような誤魔化し方をする奴がいるんだよ」

上条は、とある魔術結社の小さな（死にたくないなので何がとは言わない）ボスを思い

浮かべながら告げる。

「そうやって演技する事で、本命を隠そうって話だろう？」

「へえ、私が何を隠しているというので——」

「トラップ型の魔法。それがテメエの強きの源だ」

「つ……」

「今思えば、初めからヒントは隠されていた訳だ。一人一人を透明化できるアンタなら、敷設された魔法陣を視界から消すことだって簡単だろうしな」

カツ!! という爆炎が迸った。

上条は、オスカーの詠唱魔法を真正面から受け止め、弾き飛ばす。

やはり、無詠唱魔法は発動しない。

「後は、アンタの攻撃に突っ込んで、左右に回避しても、吹き飛ばされても、必ず何らかの罨魔法が発動する位置に誘導するだけだ。それだけで、あたかも無詠唱で魔法を操れるかのように錯覚させられる」

例えば、強力な魔法による攻撃。

他には、地形を変化させる魔法。

単純に、自ら移動するだけでも可能だ。上条の武器は、右腕一本しか無いのだから。

「それを示す根拠は？」

「なら撃てばいい。ここから動かないでやるからよ」

タネは割れた。

あとは殴り倒すだけだ。

「残りはいくつだ、オスカー」

「聞いてどうするのですか」

「これで全てとは思っちゃいねえが、何処に掛かっても『一連の流れ』を作れるように罨を仕掛けたのは失敗だったな!!」

「チツ、本当に恐ろしい人ですね貴方はっ!! 私の十年の研鑽を、ほんの十分で見破るとは!!!」

上条は既に罾が発動したルートを辿って、オスカーへと突撃する。

厄介な泥沼も、不可視の刃も、炎の投槍も、発動する事はない。

稀に罾が発動する場合があるが、魔法を完全に見切った上条には届かない。

残りは十二メートル。それがゼロになった瞬間、オスカーは敗北する。

が、オスカーもただ見ているだけではなかった。

「——その光を祓いて朽ち果てよ」

上空から、装甲車すら溶かし去る、強烈な酸が降り注ぐ。

ただし、それは上条を狙ったものではない。

標的は地面。

上条とオスカーとの間にある地面であった。

「ちっ、馬鹿野郎!」

上条は目の前に出現した酸の海に飛び込むように、右腕を振るう。

幻想殺しの効果によって、酸の海は消え去った。が、後に残った地面は酸の影響でポ

ロポロになっている。

「《光れ輝け原初の神よ・その聖なる力を以って・——》」

オスカーは再び詠唱を始める。

彼私の距離はおよそ五メートル。

オスカーの詠唱速度から考えても、次の一撃で勝負が決まる。

両者ともそれを理解したのか、相手を確実に仕留めるために最適な行動をとる。

「――我が敵を打ち倒せ!!!!」

詠唱を終えると同時にオスカーは、懐へと伸ばしていた腕を引き抜く。

それを見た上条は、一瞬、自分の身体が硬直するのを感じた。

それはマスケット銃だった。

皇国陸戦隊が標準装備している、タネも不思議もない銃器である。

いくら旧式の銃であつても、聖人ではない上条には銃弾を避けることも、弾き飛ばすこともできない。

これまでの上条の戦闘を覗き見たオスカーが用意した、最大の切り札である。

「これで、チェックメイトです」

正面からはマスケット銃。左右に避けても、破壊光線と敷設された魔法陣が牙を剥く。

たとえば魔法が見破られていようと、足場が不安定な状態なら、十分に通用する。オスカーはそう判断した。

オリバーはマスケット銃の引き金を引く。

しかし、弾丸は発射されない。

当然だ。皇国のマスケット銃は、ただ取り出しただけでは撃てない。

銃口から火薬と弾丸を装填する必要がある上に、火縄の管理も必要だからだ。

必然的に訪れる、先込め式の銃ゆえの宿命だった。

（ですが構いません。この短時間でそれを見破れるはずがないのですから!!）

普通、銃を突き付けられた状態で、咄嗟に安全だと判断できる人間は少ない。

身を硬直させるか、回避しようとするか。

人それぞれではあるが、『火縄が無いから発砲できない』とすぐさま判断できる人は恐

らくいないだろう。

（貴方の戦闘能力は非常に高い。恐らく銃を見ても、身を固めることは無いでしょう。

ですから私はそこを利用します。貴方が回避をした瞬間、私はただ魔法を撃つだけで良

い。それだけで、貴方を殺せるのですから!!?）

オリバーは勝ち誇った顔で、宣言する。

相手の健闘を称えるように、敗者へ慈悲を与えるように。

「楽しませて貰いました、次は冥界でお相手致しま



「生憎と、経験済みだ」

直後のことだった。

迷うことなく真つ直ぐに踏み込んできた上条の拳が炸裂し、オリバーの意識はプツンと途絶えた。

# 第十六話 妄想、想定、拡張と Science Adventure

1

「うわあ、思ったより大変な事になってるわねコレ」

パーパルディア皇国の野戦陣地付近の森の外縁部に着弾した御坂美琴は、周囲の惨状を見て眩いた。

周辺には、捲れ上がる地盤に、薙ぎ倒された木々があつた。A. A. A. の墜落に巻き込まれたためであるが、御坂の視線はそれらを一瞥することなく、一点に固定されていた。

そこには。

ディラックの海に干渉し、現実を思うように書き換える『誇大妄想』<sup>ギガロマニックス</sup>の高校生がいた。未来ガジェットを両手で繰り、時間の因果をも捻じ曲げた『運命探知』<sup>リミテイングシユタイナー</sup>の狂科学者がいた。

モノポールが利用されている巨大兵器に、『思考加速』<sup>スローモーション</sup>の強能力者が搭乗していた。眼球をモチーフとした螺旋くれた長剣を用いる、『念導使い』<sup>テレキネシス</sup>の情報強者がいた。

BCLラジオであるスカイセンサーを持つ、『帯電体質』<sup>オーファンレセプター</sup>の管理人がいた。時間軸のセーブとロードを繰り返すことができる、『観測不能』<sup>アノニマス</sup>の原石がいた。数はたったの六人。

しかし、それだけでパーパルディア皇国の陸戦隊を一方的に壊滅させてゆく。妄想により、魔法が存在しない世界へと、一時的に書き換えられる。

空を舞う直掩の飛龍部隊が、ビット粒子砲によって次々と撃ち落される。竜騎士を失い、混乱する地竜を目掛けて、パイルバンカーが射出される。牽引式魔導砲から放たれた砲弾の軌道が反転し、砲撃主へ返還される。

輝くオーラを身に纏う少年に、皇国軍兵士がまとめて吹き飛ばされる。皇国軍にとって都合の良い事が起これば、『なかったことに』される。

とても戦闘と呼べるものではなかった。

蹂躪。

この状況を示すのに、最も適した言葉がそれであろう。

戦力は十二分。これ以上増援が来れば、泣きつ面に対戦車ライフルが確定である。

よつて。

「乗れ汗能力!! ここは放置してサツサと先に行くわよ!!」

「おーけー御坂さあん!! ……だから、私はまだカウントしているからな?」

ガシャガシャガチャチャ!! と。複雑に金属同士が噛み合う不気味な音が連続したかと思つたら、あつという間に翼を持った悪魔のようなシルエットの飛行機械が複数のロケットブースターを後方に流す、凶悪極まる大型バイクへと形を変えていったのだ。地上を亜音速で駆け回る超大型二輪。天下の学園都市でも滅多に見かけない代物だが、どこぞの敏感体質、非常に見覚えがあつた。

「み、御坂さん、ちよつとコレに乗るのは遠慮したいと言いますかあ……」  
「え、何だつて?」

「絶対わざとでしょ御坂さあん!!! 道が舗装されてない分、前回よりも振動力が強いと思うのだけど!!!」

「ま、いつか。私一人でも何とかなるだろうし」

「抜け駆け! ここまで来て置いてけぼりにします御坂さあん!!」  
せめてもう少しサスペンションを増設していただければ

「さてく出発出発」

「わかりましたあ!! 乗ります、我慢しますから折角のチャンスを奪わないでえ!!!」

数分間の微弱な刺激と引き換えに、上条へのアピールタイムを獲得した食蜂操析。しかし、ここを逃せば次はいつになるか分からない。競争率は異常に高いのである。

「な、なら、出来るだけ安全運転でお願い」

「ここ碌な道が無いから、あまり変わらないだろうし。ぶっ飛ばすわよ!!!」  
ガオン!!! と凶暴な振動が撒き散らされる。

ロケットブースターから爆炎が迸り、急激に加速される。

生い茂る雑草を巻き上げ、障害物を打ち砕き、上条の携帯の識別電波を目指して駆け抜ける。

が、やはり。

「御坂さんギブギブ!! 振動以前に酔う、三半規管が限界寸前なんダゾ!!」

「そうは言うけど、アンタのその汁能力で三半規管のリンパ液操れないの?」

「だから汁って言うな!!」そもそも御坂さんは何故酔わないの?!!」

彼女たちが走行しているのは、舗装されていない剥き出しの地面である。ここはイギリスでも学園都市でもない、真正正銘のト田舎だ。チョットした段差どころではない。むしろ平面を探す方が難しいような、そんな場所である。

それなのに――

「……………いいえ、思考を止めてはダメよ食蜂操祈前回と同じくトリックがあるはずなんだゾ。そうよそうだわ御坂さん電磁波で周囲の様子が見えるとか何とか嘯いていなかったかしらあ?!!」

「(チツ、バレたか。だが何もできまい)」

「そうよ三半規管の情報とのズレが問題なら、視覚力以外から情報入手すればいいだけの話。軍事レーダー少女御坂さんちよつとその観測データお裾分けしてえ？ 具体的にはその電磁バリア取っ払って心を覗かせて欲しいのだけどお？」

「何させられるか分かったもんじゃやないから却下。アンタが酔っても私は困らないし」「御坂さんの薄情者おーっ!! こ、こうなったら私も最終兵器を使うしかないのかしらあ……?」

何か不穏な眩きを漏らす食蜂だったが、当然、目の前で運転をしている御坂には丸聞こえである。

「ほう、言ってみなさい食蜂。もし私の友達に手を出すとか言うなら、容赦しないけど」車酔いで女王としての皮が？ がれてきた食蜂の答えは果たして。

まもなく答え合わせの時間が来る。

食蜂は咳ばらいをしながら、堂々とした表情で口を開いた。

「能力で右腕の動きを封じた上で、上条さんの口から貧ny

言葉など必要なかった。

ズバシツイイイ!!!! と、御坂の体から雷撃が迸り、下手人の口を封じ込める。

気絶などさせない。一撃で仕留めては罰にはならないのだから。

余計な事を口走った黒焦げお嬢様は呼吸困難になりながらも眩く。

「が、は、ちよ、ちよつと御坂さん、今のは流石に強すぎると思うのダ、ゾ……」

「ふうん、全然反省の色が見えないのだけれど。もういつペン喰らつてみる？」

「ま、待つて御坂さん、そもそも御坂さんが話せて言つたからあ！」

「へえ、そんな口を利けるとは、まだまだ余裕そうねアンタは!!」

そんなこんなで第二段である。

ズバツチュン!!!! と、再び電撃姫が女王蜂へと自慢の能力を叩き込んだ。

「あーっ、あー痛い痛いけど御坂さん待つて、これ以上されたら何かに目覚めちゃうかも

!! そうなつたらあの人に顔向けできない!!」

「それは私にとつては好都合だああ!!!!」

ビリバリバチビシイ!!!! と。

直後に、近代的な英知の音が連続した。

2

バン!! と旧式のマスケツト銃が炸裂する。

上条当麻は至近距離で放たれた銃弾に肝を冷やした。

幸いにも上条を狙つたものではなかったが、いつまでもその幸運が続くとは限らない。

幻想殺しは何の変哲もない弾丸には滅法弱いのだ。

（後はアイツらをぶん殴れば、人質を解放できそうだが——）

とは言え、敵は通常兵器を扱う軍人である。いくら上条であろうとも、右腕が通用しない銃には足が震えてしまう。

すう、と深呼吸をしてから、

ダン!! と。

上条は保管庫の陰から、収容区画への道を監視している兵士へと一直線に踏み込んだ。

「う、動くな、何者だ!!」

「馬鹿!! 構うな、そのまま撃てえ!!!!」

皇国軍兵士が手持ちの銃の引き金に指をかけ、上条へとその照準を向ける。

「ツ!!」

本来、異能以外には何の効果もない右腕だけで、銃弾の雨に対処することは不可能であつただろう。

そんなことは長年右腕と連れ添ってきた、上条自身が一番理解している。

しかし、上条は銃口が迫っても寧猛な笑みを浮かべたままだった。

皇国兵士がその表情に疑問を覚えると同時に、上条は学ランの左ポケットから、とある鹵獲品を取り出した。



「っ!! 魔石だと!! 馬鹿な、儀式魔法か!!?!」

一瞬、緑色の魔石に気を取られた隊長であったが、  
(いや、あれは高火力だが瞬時に使える代物ではない。なら——クソ、ハツタリか!!)  
隊長は舌打ちをしながらも無慈悲に宣告する。

「迷うな!! 総員、一斉射撃!!!!」

ダダダンツ!! と。

数十にも及ぶ死の弾丸が、上条へと襲い掛かる。

対して、上条が取った行動は簡単だった。

魔石を右手に持ち替えて、握りつぶす。

幻想殺しは弾丸を消し去ることはできないが、異能に対しては絶大な威力を誇る。

そう、魔法的エネルギーを溜め込む性質を持つ、天然の魔石であつてもだ。

直後のことだった。

蓋の役割を果たしていた外殻が破損し、莫大なエネルギーが魔法現象となり解き放たれた。

烈風。

そんな言葉では済まない威力の風が、皇国兵士へ牙を剥く。

「ち、くしょう!! どうなっただやがる!!!!」

風圧をモロに受けた兵士の体が浮き、そのまま数十メートル以上吹き飛ばされる。派遣部隊の中で最強の称号をほしいままにする、オスカーの魔法よりなお速い。

そんな暴風に耐えられる人間がいる筈はなく、一小隊は呆気なく全滅した。

しかし、敵陣でそんな大魔法を発動させてしまえば、目立たないはずがない。バタバタバタ、と別の部隊が応援に駆け付ける。

「ルイエル隊長!! チツ、貴様、魔法使いか!!」

「クソ、次から次へと!!」

改めて、別の魔石を左手に取る上条であつたが、  
「下がっている。ここは私が片付ける」

声が聞こえた。

今まで姿が見えなかったのに、その人物は突然目の前に現れた。

「我が名はノア・レイフォード。オスカーが世話になつたようだな、少年よ」  
明らかに強者の匂いがする壮年だった。

蒼く輝く長剣を持つ、聖騎士という装いの団長は凄みの効いた声で告げる。

「黒髪黒目で、ツンツン頭の少年。その妙な服装も目撃証言がある。貴様がオスカーを打ち破つたのだろうか？」

「そうだと言えば、どうするんだ」

「別にどうもせんよ。ただ、興味が沸いたただけだ、奴を倒す程の実力者にな」  
「……、」

「貴様を殺したところで敗戦への流れは変わらんだろうが、逆説的に言えば人生最後の戦争だ。私の好きにさせてもらおう」

「アンタ、ここで死ぬつもりなのか!!」

「昨今の戦争はつまらないものばかりだった。ならば、ここで死ぬのも本望というものよ!!!!」

疾ツツツ!! と。

初手から騎士団長は亜音速で大地を駆った。

「ツツツ!!!!!!」

上条はノアが地面に力をかけたのを見て、反射的に行動を取っていた。

ゴバツツと、上条が握りしめたオレンジ色の魔石から、岩石が津波のようにあふれ出す。

反動に耐える上条だったが、騎士団長の長剣の光が、青から赤に変色するのを見て、流されるように後ろに跳んだ。

直後、騎士団長の剣が直撃し、大量に撒き散らされた岩石が砕け散った。

「な!!」

「この程度で私の歩みを止められるとも思ってたか」

騎士団長は上条が立っている土煙漂う空間へと突撃する。

「っ」

しかし、第六感に従って後方へ跳び下がった。

長年の感というのも、案外当てになるものだ。

なぜならば。

ゴウツツ!!! と。

別の魔石から生じた烈風が、小さくなった岩石を纏めて吹き飛ばしたのだから。

大半の破片は剣で砕いたが、ノアは右頬に鋭い痛みを感じた。砕けなかった石礫の一部が、騎士団長の頬を擦過したのだ。

上条自身、魔法を使うことは右腕の性質上初めてだったが、神話クラスの魔術師を散々相手してきたのだ。即興でも——と言ってもメイザースの受け売りだが——これくらいは出来る。

「ちっ、貴様には魔石から直接エネルギーを絞り出す力があるようだな。なるほど、オスカーが敗北したのも領ける」

「……、」

何とも言えなかった。

情報が正しく伝わっていないのは幸いだが、単純な物理攻撃を軸に据える相手との相性は解決していない。

「いや、本当にただの物理攻撃なのか？ そう言えば、岩を切ったときに妙な発光を――」

しかし、思考する時間など与えてくれる相手ではなかった。

騎士団長は既に突撃体勢を整えている。

第二波が来る、瞬時にそう判断した上条は懐へ手を伸ばし、魔石を構え直す。

「ハアツ！！！！」

ゴウン！！ と大地が揺れ、ノアの体が大きく加速する。

対する上条は青い魔石の外殻を破壊し、高波を発生させた。

高波はノアを飲み込み、そのまま押し流そうとしたが、

「《属性切替：滅》」

その言葉と共に刀身が紅色に染まり、迫る奔流を切り払った。

いや、切るといふ言葉は正しくないのかもしれない。明らかに質量が減少しているのだから。

正確に言うなら。

「魔法が消滅した!! その剣の力か!!?!」

「如何にも。ただ、見破った所で即座に対策を用意できるとは思わんがな、魔法使いよ」  
続きさまに上条は、赤の魔石を砕いた。

出現するのは炎の壁。魔女狩りの王をも超える熱量が、騎士団長へ襲い掛かる。

今まで炎の魔石を使うことを躊躇っていた上条だったが、幻想殺しと同じ性質を持つ相手なら、生半可な攻撃では対処できないのだ。

しかし、だ。

「無駄だと言っている!!」

ノアが放った斬撃が炎の壁を吹き散らす。

やはり魔法現象である以上、魔を滅ぼす剣を持つノアには届かない。

だが、上条当麻も既に別の行動へ移している。

右手に持つのはオレンジの魔石。

そして。

轟ツツ!! と再び発生した岩石が、ノアへ津波のように押し寄せる。

「チイツ、厄介な!!」

先の複合魔法を警戒した騎士団長は、全ての岩石を消し去ろうと大振りに長剣を振り回したが、ここで違和感が。

(風魔法が来ない!! クソ、小癩な真似を!!)

剣を大きく振るつたために、隙が生まれてしまった騎士団長。

そこに、赤の魔石を握りしめた上条が強く踏み込む。

彼我の距離は二メートル。わざわざ範囲攻撃を放つ必要性は何処にもない。

破裂音が二つ響いた。

直後、かつてない規模の紅炎が上条の右掌から噴出する。

(畜生、捌き切れない!! ならば!!)

ノアは愛剣に魔力を注ぎながら言う。

「《属性切替：疾》」

青い輝きを取り戻した長剣からエネルギーが逆流し、ノアの身体能力を大幅に強化する。

亜音速。

炎よりも素早く大地を駆け抜け、その猛威から逃れる。

しかし、強引に体を強化するのだ。当然、使用には代償が伴うため、そう何度も連発できる技ではない。

「い、い、《属性切替：斬》」

喉奥から迫る不快な感覚を飲み干しながら、ノアは即座に刀身の輝きを変化させる。

緑色の発光と共に、物理的な切断威力が上昇する。

今度は上条の方が肝を冷やす番だ。

ノアが虚空に向かって斬撃を放ったかと思えば、上条が立っている場所を目掛けて半月型の残像が飛んだのだ。

「っ」

咄嗟に残留物質の陰に飛び込む上条。

恐る恐る振り向くと、直前まで上条がいた地面が真つ二つに割れていた。

しかし、上条が隠れている岩に傷が付いた様子はない。

どうやら何でも切り裂くという訳ではないらしく、魔法で生み出されたイレギュラーな物質には効果がないようだった。

ただ、安心するには早すぎる。

騎士団長の攻撃はまだ続いているのだから。

刀身が三度青く染まり、騎士団長が岩陰に隠れる上条へと突撃する。

対する上条はまだ体勢を崩したままである。一応迎撃を試みているが、無理な姿勢からでは大した魔法は放てないだろう。少なくともノアはそう判断した。

(勝負あったな)

ノアは余裕の表情で魔法を切り伏せて、勢いそのままに上条に肉薄する。

二段構えの魔法も、敷設された魔法陣も無い。



（奴は右腕を構えているが……、反射的な行動だろう、魔石も見当たらない。ならばそのまま叩き切るのみ!!）

そして、上条の右腕ごと首筋を切断するために長剣を振りかざし——  
ピツ!! と上条の体から血が飛び散った。

「は？」

困惑したような声が響く。

ただし、それは呆気なく切り殺されたはずの上条からではない。

むしろ、剣を振り切った状態で停止している騎士団長が漏らした声であった。

いや、その表現も間違っているのだろう。

騎士団長は現在、一本も剣を握っていないのだから。

「なん、だと……。何が、起きたというのだ」

完全に固まっているノアに向かって、右掌に若干の切り傷を負った上条は嘯く。

「アンタ、そもそもどうという理屈で俺が魔石から直接エネルギーを引き出せていると思っただけだ？」

「な、に？」

「魔石の力を引き出すだけなら魔法陣を描くだけでいい。だが、それが実現していないんだろ？ 長期的な効果を期待した魔法陣ならともかく、瞬間火力を実現するための魔

法陣つてのは」

「まさか、か」

「その理由は恐らく一つ。莫大なエネルギーを正確かつ安全に扱う方法が見つからないからだ。ならここで問題だ、俺はどうやってソイツを利用していると思う？」

「まさか!! 有り得ない!!」

「答えは、幻想殺し。アンタの剣と同じ、異能を消し去る能力を持つ特別な右腕だよ」

「ツツ!!?!」

「助かったよ。アンタが速度に物を言わせて攻撃してきたら、負けていたのは俺の方だったからな!!」

慌てて二本目の鉄剣を取り出し、上条から距離を取ったノアだったが、

一言。

たった一言で全てが決壊した。

「合わせろ御坂っ!!」

直後、騎士団長の全身が硬直した。

剣も両腕を振り上げたまま宙に固定されている。

磁力。

大型バイクで陣地を疾走していた第三位が、その超能力を解き放ったからだ。

「なっ！！！！」

「歯を——食いしばりやがれ！！！！」

ドガアツツツ！！！！ と。

後方に炎を撒き散らしながら飛び上がった上条が、史上最高速度の裏拳を騎士団長に叩きつけた。

行間 1

戦闘は呆気なく終了した。

派遣軍の実力者二名が敗北したことで、精神的な支柱を失った者が多かったのも関係しているだろう。

ここまでは前哨戦。

ようやく、パーパルディア王国と学園都市との全面戦争が勃発する。

3

『——テメエらが、誰なのかは知らねえ』

通信魔導具から声が響いていた。

『ただ、何の罪もない人を犠牲にしてまで戦争を続けようってんなら』

許せるはずもなかった。皇国をここまで愚弄できる人間がこの世に存在していることなど。

『まずはそのふざけた幻想を跡形もなくぶち壊す!!!!』  
それと同時に魔道具にひびが入り、通信が途絶した。

静寂。

私は今そこまで恐ろしい表情をしているのだろうか。  
分からない。今は怒りを抑えるのに精一杯なのだから。

「……滅……だ」

自然と声が出てしまった。

全員が全員、肩をビクリと振るわせている。

しかし、一度動いてしまった口はもう止まらない。

「学園都市に殲滅戦をしかける。一人の生存者も許すな、どれだけ金を使ってもいい。  
塵一つ残さず奴らを焼き尽くしてやれ」

静かな怒りだった。

自分でも驚くほど落ち着いた声であった。

人というものは怒りが一周するところになってしまうのか、と冷静に考えてしまう自分がいる。

ああ、考えが纏まらない。



——陸、下……（以下判別不能文字）

学園都市第二収監施設、一〇七号室にて発見された書状より引用

## 第十七話 命刈り取る無慈悲な歯車 Mechanic

a l | S l a u g h t e r

1

「さて、この場合コストが最小限に抑えられる編成は、つと……」

アルタラス王国を撮影した衛星写真を見ながら、担当者は分析する。

現在アルタラス王国内のパーパルディア皇国軍は、首都ル・ブリエスから少し離れた場所にワイバーンロード用の滑走路を置き、基地を建設している。

学園都市が攻撃目標としているのは四点だ。

まず、先に述べた航空基地。

次に、首都ル・ブリエスの港に停泊している二十隻の戦列艦。

そして、首都から北方約四十キロメートルの位置にある陸軍基地。

最後に、アルタラス周辺海域で確認された最新型の竜母。

アルタラス王国内でのパーパルディア皇国軍はこの四箇所集中しており、幸運な事に人口密集地に基地は無い。

市街地にも若干数兵員が確認されたが、駆動鎧部隊を投入すれば直ぐに無力化できる

であろう。

「駆動鎧は確定として、『地殻破断』と——いや、『緻密爆破』で十分かな」  
戦争の準備は着々と進んでいた。

2

二日後、超音速爆撃機、H s F B—118機内にて

「……レーザー命中、敵哨戒騎、撃墜しました」

「ご苦労、引き続き頼んだぞ」

「了解しました」

射撃管制を担当しているクルーがのぞき込んでいる画面を見ると、確かに焼け焦げた肉片が落下しているのが見て取れる。

敵は死が迫る恐怖を味わうことなく、命を落とすのだらう。

超々遠距離からの狙撃を警戒している人間など、この世界に存在している筈がないのだから。まあ、ある意味では幸せなのだろうが。

「次の目標は十時の方向、戦列艦五隻です。接敵までおよそ三分。各員、準備をお願いします」

戦場の支配者は、ただ冷酷に獲物を刈り取るだけである。

3



パーパルディア王国 アルタラス王国派遣部隊

アルタラス王国を攻めていた皇軍の大半は、王国を占領後、東を攻めるために転進した。

現在は、反乱を鎮圧、統治するために小規模な軍が残されているだけだ。

首都ル・ブリアスの軍港には戦列艦二十隻。そして少し離れた所に陸軍の基地に、人員二千名とワイバーンロード二十騎。そして首都から北へ約四十キロの位置に人員二千名の陸軍基地がある。

陸軍大将リージャックは首都ル・ブリアスを基地から眺めつつ、傍らに立つ幹部と話を  
をする。

「東の国、フェン王国に派遣していた我が軍は、全滅に近い被害を出したらしいな。いつ  
たい何があったのだ？」

「解りませぬ。皇軍が敗れたなど、今でも信じられません。敵は何千隻もの『数』で攻撃  
してきたのではないでしょうか」

「いや、たとえ文明圏の国が何千隻で今回全滅した派遣軍に挑んだとしても、多少の被害  
と作戦の遅延は予想されるが全滅はしない。今回の戦いは何かがおかしい」

「……、」

大将リージャックの顔が悲壮感に包まれる。

「まさか、ムーか？」

「な、そんな!!」

最悪の状況が脳裏に浮かび、大将と幹部は戦慄する。

「いや、まさかな。いずれにせよアルタラスとフェン王国にはかなりの距離がある。敵がここに来る可能性は低かろう」

二人は基地に設置された建物の上から港を見る。

見る者に威圧感を与える皇国の百門級戦列艦が誇らしげに停泊している。

それが実に二十隻、周辺国と比べ比類なき強さを誇る艦。

「それにしても、美しいな」

「ええ、全くです」

陸軍大将リージャックは、艦に対して素直な感想を述べる。

しかし。

美しく穏やかな風景。その景色が突如一変した。

ゴウンツツツ!! と。

爆音を伴って超音速爆撃機が大気を切り裂き、上空を通り過ぎる。

次の瞬間、百門級戦列艦スパールが大きな火柱に飲み込まれ、爆発した。

いや、スパールだけではない。アスーラ、ピニック、レウスーラ、港に停泊していた

二十隻の戦列艦が全て、一撃で焼き切られたのだ。

「なっ!? 何が起きて!!!? つつ、て、敵襲!!!!」

慌てて陸軍に指示を出したが、もはや手遅れだ。港には一隻の船も残っていない。

「何という事だ!!」

上官から末端まで含め、全員が啞然とする。何が起こっているのか分からない。

しかし、悲劇は彼らだけを見逃してはくれなかった。

ふと、空を見上げた隊員が叫ぶ。

「おい、あれは何だ!?」

視線の先にある飛行機械の本質を彼が理解できたのかは分からないが、発生した事象は一つだけだ。

爆撃機に並走している超音速輸送機のハッチが開いた。

ただし、そこから舞うのは桜の花弁などではない。

H s A F H — 1 1

六枚羽とも呼ばれる無人攻撃ヘリが、アルタラスの戦場へと解き放たれる。

一機であつても並大抵の戦力では——それこそ列強国が本腰を入れない限りは——  
撃墜出来ない戦闘ヘリが、一度に五機。

まともな対空兵器を持っていない派遣部隊には荷が重過ぎる。もつとも、対空砲が

あったとしても、撃墜出来るとは思えないが。

五機のヘリコプターは、音の三倍のものの速さで陸軍基地に向かってくる。

「通信兵!! クソ、恐らく学園都市だ、急ぎ本国に連絡しろ!」

「はっ!」

通信兵が魔信器に向かうのを見て、リージャックは嫌な予感の中したことを嘆く。

(ちっ、飛行機械だと!! やはりムーが関与していたか、クソつたれ!! 見たところ新型機のようなだが、何故我らの邪魔をする!!!!)

飛行機械を完成させているのは、この世界ではムーと神聖ミリシアル帝国だけだと認識されている。

もちろん、学園都市も第八帝国も航空機を完成させているが、転移国家であるため、あまり知られていない。少なくとも、パーパルディア王国には。

ただ、彼が学園都市の力を正しく把握していようがいまいが、後の歴史には何の変化も与えなかったのだろう。

なぜなら。

「っ、大将!! 奴が戻ってき——

ゴツツツばつつつ!!!!!! と。

飛び去った超音速爆撃機が機首を翻して舞い戻り、破壊の雨を振り撒いた。

兵舎が、砲台が、司令室が、すべて焼き払われて灰燼と成り果てる。

幸いにもリージャックは直撃を受けなかったが、余波による建物の倒壊に巻き込まれてしまった。

「が、ごほ、何が、何が起き、て」

血みどろになりながらも、瓦礫から這い出すリージャック。

そこに。

そこに、舞い降りたのは。

三対六門の銃口を持つ漆黒の――

プツン。

## Facts

◆アルタラス王国の首都ル・ブリアスの港に停泊していたパールディア皇国の戦列艦隊は、『緻密爆破』による爆撃によって全て撃沈された。

◆首都ル・ブリアスの近郊の基地及び、首都から北に四十キロメートル地点にあったパールディア皇国の基地も、『緻密爆破』及び『六枚羽』により無力化された。

◆近海で試験航行を行っていた新型竜母も、ついでのように爆撃を受けた。

◆アルタラス王国内のパールディア皇国軍は、文字通り全滅した。戦闘開始から十分も経たない内に。

◆陸軍大将のリージャックは、六枚羽の攻撃を受けて死亡した。

◆通信兵も空爆に巻き込まれ、軒並み全滅している。よって、この戦いでの学園都市の脅威が本国に伝わることはない。

◆アルタラス王国は、パールディアの支配から解放された。

## 第十八話 終わりと始まりの大海戦 Step to

## the Next Era

第三文明圏で覇を唱えている、パーパルディア皇国の前身を知っているだろうか。

名をパールネウス共和国。現在のアルタラスと同程度の領土しか持たない小国であつた。

『第三文明圏の列強国、パーパルディア皇国に攻め落とされたアルタラス王国が、本日十二時頃に独立を宣言いたしました。アルタラス王国に進駐していたパーパルディア皇国軍は全滅し、パーパルディア皇国アルタラス統治機構はアルタラス王国の組織に降伏しています。繰り返します——』

『我々はあなた方に一切の強要をしない。ですが、パーパルディア皇国の支配から逃れることを望むのなら、その時に向けて準備をして欲しい』

パールネウス共和国は、北からの侵略に抵抗し周辺諸国を支配した。結果として、五つの文明圏と六十七の文明圏外国を属領を支配する巨大な国家規模に成長を遂げた。

『機長、まもなく投下予定地点です』

『手筈通りにやれ、時代遅れの兵隊など無人ヘリ一機で十分だ』

他国を圧倒した最大の要因は、地竜の使役に成功したこととされる。

面制圧が可能な火炎放射の能力と矢を弾く硬い皮膚を持つリントヴルムは、一種の火炎戦車であるとも言えよう。

『何だあの飛龍は!! 火炎弾はそう連射できる代物ではないはずだ!!?!』

『総員、突撃!! 侵略者から祖国を取り戻すのだ!!!!』

ところが他国を支配した結果、さらなる軍事力が必要となり、軍を維持するために大量の魔石と物資が必要になって、それを手に入れるためさらに侵略をくり返すしか無くなるという、悪循環に陥ることになった。

『さ、先に述べたのは既に陥落している属領のみです。現在、他全ての属領で学園都市の飛行機械による襲撃を受け、そのいずれもが劣勢となっております!!』



『馬鹿な、文明圏外の蛮族にそんな力はない!!あるはずがないだろうが!!!!』

この十年以上にわたって拡張政策をとっており、周辺国に理不尽な要求を繰り返しては、拒否されると問答無用で侵略、征服を行っている。

そんな歪んだ支配がまかり通っているのは、何よりも『恐怖』によるものだ。

出る杭を必要以上に叩きのめし、見せしめにすることで皇国に反抗する気を失わせる。

それがパーパルディア皇国の『外交』だった。

『代理戦争か——舐めた真似をツツ!!忌々しいが他は後回しだ、戦力が分散している内に学園都市本国を叩け!!奴らを支配し、皇国に齒向かえばどうなるか世界に見せ付けてやれ!!』

もつとも、そんな支配がいつまでも続く道理など、何処にもないのだが。

『六百隻の大艦隊——なるほど、戦場伝説を作るには都合がいいな』

……。  
……。

1

皇都防衛の要ともいえるエストシラント南方の海軍基地、同基地には戦列艦がひしめき、皇国海軍主力といっても差し支えない。

基地の中には列強パーパルディア皇国の海軍本部も設置され、多数の戦列艦の並ぶその姿は圧倒的の一言であり、見る者にある種の感動を与える。

しかし現在、海軍基地は慌ただしくなっている。比較的皇国に近い、ミレミアル王国の周辺海域で、戦艦を目撃したとの情報が入ったのだ。

すでに主力の三分の二は警戒のために布陣を整えており、万全の体制で敵を迎え撃つ準備が整っていた。

続々と港を出港する戦列艦、その一隻一隻が、この世界の平均的な戦船に比べ、圧倒的に強く、圧倒的に大きく、そして圧倒的に速い。

第三文明圏最強の海軍、列強パーパルディア皇国主力艦隊は、来たる学園都市海軍の

攻撃に備え、全力出撃の用意をしていた。

2

海にひしめく大艦隊、そこにはパールディア皇国海軍の全てが展開していた。

各艦の距離は五百メートルにも及び、とてつもない範囲の「面」に戦列艦が展開している。

同面内に敵が入ってきた場合は、複数の艦が攻撃に参加する。

同質同数の量であれば、各個撃破される布陣であり、決して行わない。

これは、敵よりも被害を受ける事を前提とし、長射程砲を敵が持つていたとしても確実に敵にダメージを与えるための布陣である。

列強であるパールディア皇国にとってこの布陣は屈辱的でもあったが、学園都市には戦艦が確認されている。ムーから譲り受けた付け焼刃とは言え、間違いなく侮つてはならない。

第三艦隊提督アルカオンは、皇国に三隻しか存在しない百五十門級戦列艦ディオスに乗船し、前方を見る。

（今に見てろよ学園都市。列強の底力を見せてやる!!）  
提督アルカオンは来たる学園都市に対し、敵意を燃やすのであった。

3

学園都市の戦艦、H s B B Y—01は、波を裂きながら北進していた。

すでに敵の大船団は人工衛星、おりひめⅢ号に捉えられ、敵の空母艦隊の位置も把握している。

「各砲座、配置につけ！」

敵空母艦隊は、護衛艦隊から北東方向約百二十キロメートルに展開し、すでに主砲の射程距離に入っている。

空母艦隊からは、多数の敵航空戦力が飛び立つ様子がレーダー画面上に映し出されている。

艦長から戦術長に声がかかる。

「主砲、切り替え！」

「主砲、三式弾に切り替え！」

合図とともに主砲へのエネルギーの流入が停止され、代わりに三式榴散弾が装填される。

エネルギー兵器である陽電子衝撃砲は直線的にしか飛ばないので、水平線の先に存在している皇国艦隊を狙うことができないのだ。

「主砲、三式弾に切り替えた！」

「一番二番、前方の敵空母に照準合わせ！」

報告を受けた戦術長の指令で、H s B B Y—01の第一、第二主砲が旋回し、百二十キロ先の空母艦隊に照準を合わせる。

「目標捕捉した！照準よし！」

樹形図の設計者には劣るが、学園都市内でもトップレベルの演算力を誇る『高度並列演算処理器』が波、風向、相対速度、自転の影響、相対速度から、必中の方程式を導き出した。

「撃てえい！」

「てえー！！」

戦術長の号令で主砲が火を噴き、合計六発の三式弾が撃ち出される。放物線を描きながら、砲弾が空気を切り裂く。

そして。

そして。

ゴツツツばつつつ!!!!と。

突然、パーパルディア皇国の竜母六隻が爆発した。

「つ?!何だ事故か!!」

「いや違う、これは——砲撃!!?!」

飛行甲板が真っ二つに割れ、ずぶずぶと海に沈んでいく竜母の残骸。

見えない敵から攻撃を受けた竜母艦隊司令は、混乱の極みにあった。

「砲撃だと?!敵はどこだ、索敵班は何をしていた!!!!」

「不明です!!どこにも艦影が見当たりません!!」

「馬鹿を言うな、水平線の向こうから撃ってきたとでも言うつもりか!!?!」

「ですが、そうとしか!!」

しかし、問答をしている時間はない。すぐに第二射が襲い掛かるだろう。

「回避運動を取れ!!砲撃にせよ何にせよ、それで回避できるはずだ!!」

「了解!」

空母艦隊がゆつくりとしたスピードで航路を変更する。仮に水平線の先から砲撃さ

れているのであれば、滞空時間も異常に長いはずだ。それならば回避も容易かろう。

しかし、学園都市はそのような常識では測れない。

ぼっ、と空中で小さな炎が噴出した。

見張員には空中で砲弾が誤って爆発したように見えたが、実際には異なる。

誘導砲弾。

長距離射撃の精度を上昇させるために生み出された、特殊な砲弾である。

学園都市は着弾時に爆発する火薬の一部を炸裂させることで、コストを抑えたまま弾道を変更することを可能にしたのだ。

がつつつ!!!!と、再び竜母六隻が爆沈する。

残存空母は残り十隻を切り、全滅の危機に晒されている。

「くっ、馬鹿げている、我々は何と戦っているというのだ!!」

「落ち着け、連射速度も精度も驚異的だが、何もできない訳ではない」

死期を悟った竜母艦隊司令のバーンは、艦隊に命令を下す。

「竜騎士団を全て上げろ!!この船と運命をともにさせてはいかん!!!!」

「つ、了解しました！飛龍、全騎発艦してください!!」

「……最後の命令だ。全竜騎士団は南へと進撃せよ。おそらく敵はそこにいる。必ず仕留めろ、いいな!!」

「はっ!!」

次々と竜母が沈む中、ワイバーンオーバーロードが発艦していく。

「竜母ガルガオン轟沈、竜母セイレーン轟沈!」

「つ、( )までか」

無事に発艦できた竜騎士はおよそ三割。残りは、竜母と共に海に沈んでいる。

「後は頼んだぞ、ダイロス……」

艦隊司令のバーンは、自らの乗る船に飛んでくる敵の砲弾を見つめる。

砲弾は船に突き刺さり、バーンは猛烈な光と共にこの世を去った



## 第十九話 命の価値 I n e q u a l i t y | E x c h

a n g e

1

パールディア王国 第三艦隊所属 竜騎士団

「見えたぞ!!!」

沈みゆく竜母からギリギリで脱出した三百の飛龍隊は、南の水平線に戦艦を確認した。

それには、前代未聞の大きさと速さがあり、彼らの緊張は頂点に達する。

敵艦は友軍から百キロメートル程離れているにも関わらず、砲撃によって友軍を沈めていく。

すでに自分たちの帰るべき竜母は撃沈されてしまった。

自分たちはワイバーンロードが力尽きた後、海上に着水するしかない。

(だからどうした。我々は誇り高き皇国軍兵士だろうが)

竜騎士団長ダイロスは覚悟を決める。

「全軍突撃!! 皇国に唾を吐いた学園都市へ天誅を下してやれ!!!」

「「うおおおおお！！！！」」

最強の竜騎士団という自負を持つ彼らは、自分たちの勝利を疑うことなく、学園都市の戦艦へ突撃する。

直後の出来事だった。

突然、戦艦の煙突が爆発し、炎を吹き出す。

「っ、機関の異常か?! へ、身の丈に合わない兵器を使おうとするか  
否。

ズババババ!!! と。

HSBBY-01の煙突状上部構造物から対空ミサイルが八発撃ち出された。

それは垂直方向に撃ち出されたにも関わらず、進路を変えて、正確に竜騎士団のいる方向へ向かって来る。

「誘導魔光弾!! まさか、あれを実現できるはずが——

言葉は最後まで続かなかった。

当然だ、学園都市の対空ミサイルの速度はマッハ十五。旧世界の対空ミサイルの五倍の速度で標的を付け狙うのだ。学園都市の超音速機をも撃ち落せるだけの性能を持つミサイル相手では、未だ音速の域を出ないワイバーンなど話にならない。

近接信管が作動し、上空に花火が咲きほこる。直撃を受けた竜騎士は骨すら残らずに

蒸発した。

（畜生、馬鹿げていやがる!!　だが、こちらには二百九十騎も残っている。必ず仕留められるはずだ!!!）

いくら天下の学園都市とは言え、戦艦から対空ミサイルを機関砲のように連射することとは出来ない。そもそも三百騎もの大軍相手では、ミサイルの数が足りないだろう。

もつとも、それは学園都市のミサイルと皇国のワイバーンが等価交換であればの話だが。

「っ!!　どうした、何が起きている!!!」

竜騎士団長のダイロスは、不意に高度を落とし始めた竜騎士に叫んだ。

彼一人だけではない。あちらこちらで飛龍が高度を落として——いや、正確には違う。

ワイバーンオーバーロードの翼は動いていない。そもそも、羽搏いていないのだ。

よくよく見てみると、背中の竜騎士も意識を失っているように見える。

「おい、どうした?!　死にたいのか、目を覚ませ!!!」

その現象は、対空ミサイルが通過した辺りで発生していた。

マツハ十五。

それがもたらす衝撃波の威力の凄まじさは、わざわざ語るまでもない。

ミサイルの煽りを受けた数十騎の竜騎士が次々と落下していく。下は海であるが、この高度から墜落すれば命はない。

(く、学園都市め!!)

団長は唇を噛みながら、全隊へ指示を出す。

「総員散開!! 固まっけても魔光誘導弾の餌食になるだけだ、散開して各個攻撃に移れ!!!!」

「「はっつ!!!!」」

竜騎士が各々散り、無秩序に広がっていく。

咄嗟の判断で最適の行動を導き出せるあたりが、彼が騎士団長に抜擢された理由であろう。

結果として、対空ミサイルによる被害は抑えられた。

ミサイル一発につきおよそ三騎が犠牲になっているが、被害は先の半分ほどになっている。

「速すぎる、あんなものが避けられるか!!」

「クソっ、クソがつ!!」

竜騎士の様々な悲鳴が魔信から流れる。被害が減ったとは言え、大勢の竜騎士が犠牲になっていることには変わらない。

(だが、もう少しで!!!!)

残存部隊はおよそ百五十。距離は三分の一にまで詰めた。

敵の撃墜速度よりも、こちらの進撃速度の方が上回っている。

「行ける、行けるぞ!!!! 仲間の恨みを晴らせ、奴らを血祭りにあげるのだ!!!!」

「!!!!おおおおおおおおお!!!!」

先程よりも強く、大きく叫び声がこだました。

これなら勝てる、奴らを海の藻屑にしてやれる。

仲間の力強い叫びを聞いてダイロスはそう確信した。

(それにしてもムーの戦艦か。沈めるには惜しい、鹵獲出来るか……?)

勝利の予感からか、ダイロスは海戦の後のことを考えてしまった。

人は極度の緊張から緩和された時に、油断をしてしまう。それは並大抵の努力では避

けられないため、彼が余計なことを考えてしまったのも仕方がないと言えよう。

例えばそれが、致命的な一打を招いてしまったとしても。

一斉に。

一斉に、戦艦の側面にある小さな大砲が動き出した。

ダイロスは今まで、戦列艦の『それ』と同じものだと考えて警戒していなかった『そ

れ』が。

即ち。

四連装高角速射光線砲塔。

通称、パルスレーザー砲。学園都市の戦艦の最終防衛システムである。

ズバチユツツ!!!!!! と。

ダイロスの目の前を飛んでいた竜騎士の体に大穴が空き、墜落していく。

そしてそれは一人だけではない。

十、二十、三十、四十。

対空砲から大量の光線が撃ち出されるとともに、仲間が次々と落ちていく。

そしてそれらは一発たりとも外れる事無く、そして一発たりとも的が重複する事無く

正確に竜騎士を次々と墜としていく。

「おのれ化け物めええええ!!!!!!」

なんとという事だろうか。

我々は列強パーパルディア王国の栄えある主力軍の中でも花形と言われる竜騎士団。

一度飛び立てば、七つの軍を滅ぼすと言われ、恐れられた第三文明圏最強の部隊。

そんな飛龍が今、学園都市の攻撃によってハエのように落ちていく。

数多の戦場を共にした戦友が、厳しい訓練で苦楽を共にした仲間が、幼い頃からの親友が。彼らの人生の努力をあざ笑うかのように、命が失われていく。

バラバラになった血と肉が雨のように降っている。そこに、命の輝きはない。「ち、くしよおおおおおおお!!!!」

次の瞬間、赤いレーザー光線が竜騎士団長ダイロスの体を大きく削ぎ落とし、空の彼方へと消え去った。

## 第二十話 終わることのない悲劇 Nightmare

1

「り、竜騎士団は全滅しました。敵艦に被害なし」

沈黙する艦橋、誰もが絶望し、為す術が無いと理解し始めていた。

「戦列艦マルタス、レジール、カミオ轟沈、ターラスに敵砲着弾……」

絶望的な通信士の声だけが、艦橋に響き続ける。

あの歴戦の獅子、第三艦隊提督アルカオンでさえ、額に汗を浮かべて沈黙している。

皇国の頭脳マータルの考えた作戦も、列強ムー相手ならば効果があつただろう。

しかし、百発百中の超長射程砲や一発で沈むほどの威力のある砲弾など、反則ではな

いか。

工夫次第でどうにかなるレベルを超えている。

敵の砲には——推定ではあるが——射程距離が八十キロ以上あり百発百中、かつ装填

も速い。

皇国の魔導砲の射程距離まで近づこうと思ったら、最大船速でも二時間以上かかって

しまう。



敵との相対速度を利用すれば、もっと早く到達できるだろうが、戦場で甘い期待をするべきではないだろう。

あんな正確な砲撃を二時間以上も避け続けるのは不可能だ。そもそも、後方へ下がりながら砲撃されれば、永遠と一方的に撃たれてしまう。

「……くそつたれが」

アルカオンは覚悟を決める。

そもそも、皇国主力が皇都の目と鼻の先で、戦力を残して降伏や撤退が許されるはずなどない。

選択肢など無いに等しかった。

「全軍、進攻してきた学園都市海軍へ突撃せよ!! 皇国海軍の意地を見せてやれ!!」  
各船に設置されている魔石が煌びやかに輝き出す。

風神の涙により起こされた風を帆いっぱいを受け、第三艦隊は戦艦への突撃を開始した。

2

「敵艦隊、密集陣形を取って本艦に突撃してきます」

レーダーを担当している女性船務長が、観測データの報告を上げる。

「密集陣形か……好都合だ。第一戦速! 敵へ突っ込め!!」

「第一戦速!! ヨーソロー!」

学園都市の凶悪なエンジンが唸りを上げ、船体が急激に加速する。

「主砲、戻せ!!」

「はい、主砲、切り替え!!」

砲身内に残っていた三式弾が取り除かれ、エネルギー伝達回路が開く。

「ショックカノン、エンジンからエネルギー伝導、終わる!」

「照準合わせ!! 誤差修正マイナス1.3!!」

高く仰角を取っていた主砲が動き、敵艦隊を真正面に捉える。

ショックカノンはエネルギー兵器であるため、重力の影響を無視して発射することができる。

「測的良し! 照準良し!」

「撃ち方、始めえ!!」

艦橋の後方に座している艦長が戦術長に砲撃の指示を出した。

そして。

ギューイイイーン!!!! と。

戦術長の号令と共に、H s B B Y—01の主砲から陽電子の塊が撃ち出され、皇国の

戦列艦に突き刺さる。

先の三式弾と異なり一直線に飛ぶエネルギー兵器であるため、戦列艦ネパイラルを貫通した光線が、後続の戦列艦を貫いて吹き飛ばしていく。

突撃のために密集陣形を取っていたことも、パーパルディア皇国の不幸に繋がっていた。

「両舷増速、黒二十！」

「増速！ 黒二十！！」

既に敵艦隊との距離は十キロを切っている。

敵戦列艦の最大射程は二キロ。まもなく砲撃が始まるだろう。

だが、いくら砲撃したところで無意味だ。H s B B Y—01には三段階の防衛システムが働いているのだから。

第一に、パルスレーザーでの迎撃システム。

第二に、魔導防壁。

大気中に存在している魔素を利用した斥力場を発生させることで、火炎弾を吹き散らし、砲弾内部の魔法火薬に影響を与えて自壊させる力を持つエネルギーバリアだ。

そして最後に、『演算型・衝撃拡散性複合素材』で作られた複合装甲が待ち構えている。窓のないビルの外壁にも利用されているこの装甲は、一方通行が放った自転砲の衝撃すら相殺するほどの防御力を誇っている。

これらの防壁は並大抵の兵器では突破できない。

万が一の確率で攻撃が通っても、外壁内部に張り巡らされた管からバードライムが流れ出し、一瞬で穴を塞いでしまう。

完全無欠の防衛システム。例えば旧世界の大国でも、この戦艦を沈めることはできないだろう。

「全砲門、発射準備整った！」

「撃ち方始めえ!!」

Hard Science。

その言葉を冠するだけで戦場に舞い戻った死神が、パーパルディア皇国軍に牙を剥く。

3

「っ、っ……」

もはや声を出すことも出来なかった。

敵戦艦が突撃してきたときは、馬鹿なことをするものだと嘲った。

長距離砲の利点を殺してまで接近するなど、文明圏外の蛮族相手に、戦列艦で衝角戦を仕掛けるようなものだ。

そう考えていた。

なのに。

なのに!!

こちらの攻撃は殆ど当たらない。速度が桁違いなのだ。

最低でも六十ノットは出ている。

そんなものにどうやって命中弾を出せというのだ。

ようやく直撃コースに砲弾が乗ったかと思えば、戦艦に命中する前に不自然な爆発をする。

馬鹿げている、正気の沙汰ではない。

攻撃性能にしてもそうだ。

青い光線は強烈な貫通能力を持ち、十数隻の戦列艦を一度に屠る。

赤い光線は猛烈な連射性能を誇り、数十隻の戦列艦を一秒で穿つ。

他には、誘導魔光弾や、水中誘導魔光弾もある。先の砲撃もそうだ。

明らかに列強の領域を超えている。こんなものは神話クラスの戦いだ。

(相手は文明圏外国だろう!!?? ムーが技術支援しただけでは説明できない!!!!)

提督のアルカオンは荒れる心を鎮めながらも思考する。

その間にも、恐ろしい速度で味方の船が轟沈していく。

〔有り得ない、有り得るはずがない!!?! 我が国は世界四位の列強だぞ!!〕

アルカオンは混乱し、艦隊に指示を出すことすら出来ない。

いや、今更出しても無駄だろう、何処にも逃げ場はないのだから。

〔て、提督、敵の主砲、我が艦に向きます!!!!〕

〔指示を、回避の指示を下さい!!!!〕

〔……だ〕

艦橋に幹部の怒号が響く。

しかし、提督からの反応は薄い。

〔ええい、提督はご乱心だ!! 取り舵一杯!!!!〕

〔っ、了解!!!!!!〕

痺れを切らした艦長が部下に指示を出した。

が、それは余りにも遅すぎた。

敵戦艦の主砲に光が満ち始めているのが、艦橋からでもよく見える。

〔来るぞ!! 早く舵を回せ!!!!〕

〔馬鹿言うな、これ以上は無理だ!!!!〕

〔無理でもやれ!! 今すぐにだ!!!!!!〕

騒がしくなる艦内。もはや收拾がつかない状態になっている。

「…駄だ、……な……よ」

「つ、提督、どうなされましたか!!??」

小さく響いた声に、一人のクルーが反応した。

起死回生のアイデアを閃いてくれたのかと、藁をも掴む気持ちだったのだろう。

「……、」

しかし、提督は肩を震わせながら俯いている。

「てい、とく……?」

そして、遂に戦艦の主砲が強く輝き、

「無駄なんだよ!!」 何をして、どんなに足掻いても、アイツらには——魔法帝国の

尖兵には敵わないんだよ!!!!!!!!!!」

直後、第三艦隊の旗艦ディオスに、青白い光が——

……。

……。

3

パーパルディア王国 海軍本部

海将のバルスは海を眺めていたが、状況が好転することはなかった。

第三艦隊と学園都市の戦艦が交戦中とのことであるが、無線で飛んでくる報告に心地

よい物は一切なく、ただ悲鳴と号哭が響くだけである。

そして、だ。

「……、」

大型の機械の前に腰かけていた職員が、ようやく重い口を開いた。

「——通信途絶。再接続の兆しありません」

「残存艦への引継ぎは？」

「ありません。恐らく、全滅したものと」

「つ……くそつたれが」

バルスの傍にいた高級軍人は悪態を吐き、意を決した表情で上告する。

「海将!! 第一及び第二艦隊で学園都市海軍を包囲しましょう!!! これほど差があるとは思いませんでした。幸いにも数は一隻です。奴らを倒すには、数で押しつぶすしかありません」

「……許可する」

海将バルスの言により、皇国主力第一艦隊と第二艦隊は、包囲網を描きながら学園都市の戦艦に向かっていった。



## 第二十一話　？がされた鍍金　Give One sel

f | A w a y

1

皇都エストシラント北方陸軍基地

陸軍司令室にけたたましい警報音が鳴り響く。

「緊急入電です!!! エストシラント南方海域にて学園都市戦力と皇国第三艦隊が交戦!! その結果、第三艦隊が壊滅。至急、包囲網を展開中の第一、第二艦隊の援護を行えと  
のことです」

司令室がざわめきだす。皇国軍は第三文明圏の覇者であり、そうそう負けることはないのだから当然だ。

「な、壊滅しただと!! 皇国の艦隊が?!」

「事実なら相当不味いですよ!! 至急第二、第三中隊を直掩に回すべきです!!」

「あ、ああその通りだ。第二、第三中隊は速やかに該当空域へと向かえ!! 残りの部隊は準備を完了した者から離陸せよ!!」

「はっ、了解しました」

陸将メイガは部下に全力出撃の命令を出す。

しかし、この要請には裏があった。

竜母艦隊が壊滅したという情報は、当然海軍本部にも伝わっている。敵戦艦には強力な対空兵器が搭載されており、飛龍部隊で強襲することは不可能だと、海軍本部も同様の決断を下している。

ならば何故援軍を要請したのか。

海軍本部が下した答えはこうだ。

件の兵器は対艦攻撃にも併用可能であり、最も多くの戦列艦を海に沈めたと聞く。ならば、それを飽和させてしまえば、攻撃は届くのではないだろうか。

たとえ何百人の竜騎士が命を落そうと、奴を沈められるのなら安いものだ、と。

非人道的な考えだったが、それでもしなければ接近することすら敵わない。

苦渋の決断だった。しかし、背に腹は代えられない。

皇都を墜とされては元も子もないのだから。

「頼んだぞ……」

メイガが窓の外を見ると、ちょうど第三中隊が離陸をしているところだった。

祖国のために捨て駒とされた竜騎士が一騎、また一騎と舞い上がる。

その行き先が死地であることなど知らずに、鷲を騙った雛鳥は南を目指して羽搏いて

行く。

2

第三艦隊を撃滅したH s B B Y—01は、水平線下に存在している別の敵艦隊に三式弾を撃ち込んでいた。

「三式弾装填、終わる!!」

「一番二番、副砲一番、撃ち方始め!!」

砲身からレールガン特有の発射音が響く。

着弾までおよそ一分。次弾を撃とうとしたところに、レーダー主から報告が上がった。

「敵艦隊、進路変えます。二手に分かれて……包囲網の構築でしょうか?」

「……、」

思考の海に潜った艦長は何らかの結論を得たのか、重い口を開く。

「敵艦隊中央部を突破する! ハヤブサを降ろせ!!」

「了解! コスモファルコン、発艦!!」

戦艦の右舷装甲が開き、展開された滑走路から艦載機が発艦する。

H s C F—99。

学園都市が——極めて珍しいことに——真つ当な方向に航空機を進化させた結果生

まれた化物だ。その為、この戦闘機は一切の尖った性能を持たず、良くも悪くも『普通の機体なのである。

もつとも、あくまでも他の学園都市兵器と比較した場合であるが。

具体的に言えば。

到達高度、加速性能、航続距離、ステルス性能、運用能力。

これら全ての領域で、かの超音速戦闘機を上回っている。

あくまでも、高速回転や鋭角機動などの『尖った性能』を持たないだけなのだ。

言うならばオールラウンダー。

攻撃能力では一歩劣るものの、この機体はどんな任務にも対応ができるという強みを  
持っている。

「しかし艦長、コスモファルコンまで出撃させるのは、些か過剰ではないでしょうか」

「敵は恐らく飛竜を使ってくる。我々の対空兵器を飽和させて接近する算段だろう」

「ですが、この船には多段階の防衛システムがあります」

「いいや、『魔導防壁』もようやく完成にこぎ着けた試作兵器に過ぎん。複合装甲にして  
も、魔法攻撃に対する運用データは不十分だ」

艦長は、遠い海を見つめながら嘯いた。

そして、見計らったかのようなタイミングでレーダーが敵影を感知する。

「つ、レーダーに感あり。ワイバーンロードです。数は、千九百、二千五百……、敵飛竜の総数およそ三千、大編隊です!!」

「慌てるな、その為のハヤブサだろう。全航空隊は正面のワイバーンを叩き、活路を開け!!」

「はっ!!」

艦載機のエンジンが唸りを上げ、後方に青白い光を撒き散らす。

敵騎を撃墜するために、圧倒的な加速力で空を駆けた。

その力強い光景を見て艦長は言い放つ。

「本艦もハヤブサに続いて突撃する。機関全開、第一戦速で敵へ突っ込め!!」

3

飛龍編隊は学園都市の戦艦を沈めるために、南方海域を目指していた。

「まさか、これだけの数のワイバーンロードが一堂に会するとは……」

「ええ、史上でも類を見ない大編隊ですからね。ですが……海軍本部も妙な要請をするものです。折角新型竜が配備されたのに、旧式騎を引っ張り出せ、なんて」

「上が決めたことだ、末端の俺達には従う以外の選択肢はない。そこにどんな思惑が隠されていてもな」

第三中隊長のウイズダは、副官のリオに語り掛けた。

その意味深な顔を見たリオは疑問を浮かべながら呟く。

「思惑……ですか?」

「この要請、何かがおかしい。壊滅した第三艦隊には最新鋭竜母が二十隻も所属していた。だが、それが壊滅したということは、相手は対ワイバーン用の兵器を持っていることになる。そんなところに飛び込めど? そんなものは自殺と——」

唐突に。

第三中隊長の飛竜が跡形もなく爆散した。

「は? たい、ちよう……?」

リオは先程まで会話していた人間が急死したことに、戸惑いを隠せなかった。

当然の反応だが、この場においてそれは『愚鈍』としか評せない。

既に、死の化身は忍び寄っているのだから。

ズガガガツツツ!!!! と。

H S C F—99に備え付けられた機関銃から『摩擦弾頭』が撃ち出された。

直撃を受けて墜落していく竜騎士。

その数はおよそ百二十。それだけの命が一度の攻撃で消滅した。

「ツツ!!!! て、敵襲!! 全騎、応戦せよ、皇国の意地を見せつけてや——ご、ばあ」

「団長?! 畜生、速すぎる!!」

命令を出そうとした竜騎士団長も、背後に廻り込んだ灰色の航空機に撃墜される。

速度差は数十倍。数では上回っているが、根本的な性能で負けている。

そのうえ。

「一斉射撃だ!!! 俺に合わせろ!!!」

「無理だ、当たる訳がないだろ!!! 俺は逃げるぞ!!!」

「クツソ、本部の奴らめ、絶対に許さん!!! 初めからこうなると分かかっていて——クソつたれ!!!」

指揮系統が壊滅した今、数の優位は無いに等しい。集団行動を行えなくなれば、それらはただのカモに成り下がる。

「デメエら怖気づいてんじゃねえ!!! 相手はたったの三十四機だ。全員で掛ければ幾らでも——ぐ、があ」

部隊を落ち着かせようと奮闘する竜騎士もいるが、そういった人間は優先的に排除される。結果として、部隊は更に深く恐慌状態に陥る。第二、第三の拠り所を失えば失うほど、混乱は加速するのだ。

彼我の機数差はおよそ百倍。

しかし、それすら薙ぎ払う航空機が戦場を完全に支配する。

「おい、ワイバーンが戻って来るぞ!!」

「随分お早いご帰還だな。一体何をしに行ったのか」

「余程敵が情けなかったのだろう。まあ、あれだけの飛竜を相手に出来る国は無いか?」

数十分前に飛び去った筈の飛竜部隊が戻ってくるのを見て、住人が騒ぎ出した。

だが、何処か竜騎士の様子がおかしい。

住人がそれに気づくのに大した時間は掛からなかった。

「待て、何かおかしいぞ。あれではまるで何かから逃げているような……」

「はあ? 皇国飛竜隊が逃げる相手なんかいる訳ないだろう? まあ、少し急いでいる

ようには見えるが……気のせいだろ」

現在の時刻は午前七時。

住民が朝の世間話を始める頃、

後の世界でサッドモーニングと呼ばれることになる、一つの『災害』が発生した。

初めに皇都を襲ったのは『音』であった。

キイイイイン!!? と。

戦闘機が空気を切り裂きながら皇都上空を通り過ぎる。

直後、付近の窓ガラスが全て割れ、建物が不気味に振動する。



しかし、異変はそこに留まらない。

ボトボトと、最強の皇都防衛軍のワイバーンが降ってくる。

首、胴体、足、羽。

頭蓋、手首、肋骨、太腿。

飛竜の残骸が、人間の残骸が。真つ赤に染まった雨のように。

「いやあああああ!!??」

皇都エストシラントの様々な場所から、その凄惨な光景に耐え切れなくなった女性の悲鳴が上がる。

住民はざわつき、様々な建物の扉や窓が開く。

彼らが見上げた時には、矢のような形の何かが二十機、見た事も無い高速で上空を再び通過した。

再度の轟音。

先は割れなかった窓ガラスが粉々になる。

もはや我慢の限界だった。訳の分からない攻撃に、飛竜隊の潰走。

恐怖。

住民の心は完全に一致していた。

「な、何だ!! 何が起こっているんだ!!!!」

「どこの国だ?! 戦争中の学園都市か!!?!」

「馬鹿か!! 文明圏外の蛮国がいくら背伸びをしたところで、第三文明圏最強のパーパルディア皇国の皇都に攻撃など出来ないに決まっているだろう!!」

「なら一体何処が?!」

「他の列強か……、まさか、古の魔法帝国か?!」

「そんな馬鹿な事が……」

しかし、そんな住民の騒めきは一時中断されることになる。

皇都に三度目の轟音が鳴り響いたのだ。

同時に、数十匹のワイバーンロードが墜落していく。

決して皇都飛竜隊が弱いのではない。彼らは第三文明圏最強の名前を正しく冠していた。

ただ、それを学園都市が軽く上回ってきただけの話である。

一斉射撃を試みた竜騎士たちの背後に回り込み、機関砲の餌食にする。

戦場から離れようとする竜騎士には、短距離ミサイルを撃ち込む。

高度の優位を取ろうとした竜騎士を上から見下ろし、導力火炎弾の雨の中を真っ直ぐに突っ切り、包囲網を易々と切り抜ける。

「畜生、ち、くしょう!!!!」

また一人、竜騎士が墜ちていく。

残存部隊は五十騎を下回っていて、『全滅』扱いとなっている。

しかし、災厄は終わらない。

人工知能に『遠慮』の二文字が無いことは、歴史が証明しているのだから。

5

「飛竜部隊……………全滅しました」

「……………」

「戦列艦リベール轟沈。同じくベルチュール、ヘカトケイン、サルバーノ轟沈。第二艦隊旗艦ブリオーリヨ大破……………いえ、沈んでいきます」

第一艦隊旗艦の艦橋に、戦況報告が寂しく反響する。

誰も目の前の非現実的な光景に、声を出すことができなかつたからだ。

「ふ、ふ、ふ」

突然、旗艦に乗船していた提督が笑い声をあげた。

「っ!! 提督、お気を確かに!!」

「ふははははは、ククク、あはっ☆」

「提督!!」

壊れたレコーダーのように笑い声を漏らし続ける提督を見て、クルーの一人が駆け寄

る。

「はは、馬鹿げている。こんなのが現実であるはずがない、そうか夢か夢なら仕方がないよねだって夢なんでもんあはははふふふ☆☆」

「っ!! てい、とく……」

余りにも、痛々しかった。

人間が壊れるとこうなるのか。なってしまうのか。

なまじ頭が回る人間だったから壊れてしまったのかも知れない。

敵は明らかに人智を越えた兵器を使用している。神聖ミリシアル帝国ですら到達していない、神域へとたどり着いているのだから。

「っ、陸軍基地、及び海軍本部、敵飛行機械から空爆を受けて被害甚大。滑走路も使用不能です」

「そうか、もう良い。降伏の合図を送れ。我々の行動を考えると、許してくれるかは微妙なところだが……」

艦長は皇都が後方にあるにも関わらず、降伏の指示を出した。

それに反対する人間はいない。誰もがこの地獄から逃げ出したいと考えていたからだ。

しかし、現実是非情だった。

ギイイイインン！！！！と。

陸軍基地の攻撃を終えた戦闘機が、艦隊の後方から順に襲い掛かる。

「馬鹿な、いくら何でも速す——

摂氏二千五百度。

空気摩擦によつて加熱された弾丸が、旗艦レーヴァレンへ突き刺さつた。

# 第二十二話 侵蝕 Creeping Shadow

1

パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇城

緊急御前会議——国の重役の中でもトップのみが参加し、実質的に皇国の意思決定が行われる緊急会議が始まろうとしていた。

会議のメンバーは、皇帝ルディアスを筆頭とし、

皇族 レミール

軍の最高司令 アルデ

第一外務局長 エルト

第二外務局長 リウス

第三外務局長 カイオス

臣民統治機構長 パーラス

経済担当局長 ムーリ

その他各局の幹部が補佐に入る。

普段の会議では自信に満ち溢れた表情をしている者も、今回は一様に顔が暗い。

なぜならば。

「まずは軍の現状からご説明いたします。」

軍の最高指揮官アルデが立ち上がり、説明を開始する。

「現在、海軍の主力は壊滅——いえ、全滅し、残存戦力は廃棄直前の旧式戦列艦が十隻、砲艦が三十隻となっており、規模は非常に縮小しております」

アルデの額には汗が滴る。

残存艦のみであつても、文明圏外国の海軍よりも戦力は上回っている。

しかし、たった一隻で皇国海軍主力を全滅させた学園都市の戦艦相手では風前の灯火だ。今から最新鋭の戦列艦を建造しようにも、竣工には数年の歳月が必要であり、戦力の増加も望めない。

「次に、陸軍の状況です。皇軍三大基地の一つ、皇都防衛隊が全滅いたしました。空から行われる攻撃としては、その爆弾投射量はあまりにも規模が大きく、今まで全く想定しておりませんでした。これにより、今後基地を作る際には戦力を集中しすぎないように配慮する必要がありますが、本作戦には間に合いそうにありません」

各々が冷や汗をかくが、アルデの説明はまだ終わっていない。

「皇都の防衛に大きな穴が開いてしまったため、他二大基地から半分ほど軍隊を撤収し、皇都防衛の任に当たらせてます。他の基地も重要拠点ではありますが、致し方ありません」

「統治軍はどうなっているのだ、アルデ。兵員が足りないのであればそこから引つ張ってくれば良いだろう」

「失礼、前会議では調査中とだけ述べましたが、現在各統治軍との通信は完全に途絶し、行方不明となっております。恐らく、全滅したものかと」

「……、」

沈黙が続く。

属領が離反したことは分かっていた。

しかし、属領は広範囲に存在しているために、撃ち漏らしが——まだ離反していない国があると信じていたのだ。

「工業都市デユロが壊滅した現在、武器弾薬の補給が心配ですが、備蓄はまだかなり残っています。多少節約する必要はありますが、影響はそこまで大きくないでしょう」

アルデが話し終わった後、第三外務局長カイオスが手をあげ、話し始める。

「現在の軍の状況から、学園都市が決し侮ってはいけない存在であり、そして脅威であるという共通認識は皆様持たれたと思います。ここで問題となるのですが……」

カイオスは一呼吸置いて、その一言を告げる。

「今回の戦争の終わらせ方、落としどころです」

「ッ!!」



一同に衝撃が走る。

カイオスは誰も口に出さなかったその議題を、皇帝の前で紡ぎ出した。

「アルデ最高司令にお尋ねする」

「何だ！」

「残存戦力で学園都市に上陸を行い、皇帝陛下の御指示である学園都市の殲滅をなす事は可能か？」

「陛下の御意思達成のため、全身全霊をかけて取り組む所存だ」

「精神論など聞いてはいない。現有兵力で可能かどうかを聞いている」

「……現有戦力では、不可能だ。達成のためには、兵の数をそろえ、もつと船を作る必要がある。時間が必要だ」

「数年も奴らが待つてくれるものか。それでは、今回の戦端を開いた第一外務局長のエルト殿」

「……、」

「この戦争、どのように収束させるおつもりか？」

汗を垂れ流しているエルトは、皇帝ルディアスの顔に視線を走らせる。

「国家として、すでに学園都市殲滅を表明している今、皇国が意志を変更すれば他国や属国に示しが見つからない。国益を考えたとしてもこのまま進むしかあるまい」

「エルト殿は、それが可能と思っておられるのか？」

「軍の最高司令のアルデ殿が時間をかければ可能と言っている。軍事における戦略的な事に私は口を出す立場には無い」

軍部に擦り付けることでカイオスの追及を逃れるエルト。

しかし、カイオスの攻撃はまだ終わっていない。

「では学園都市が我が国に何を求めているか、担当である第一外務局長にお尋ねしたい」  
「学園都市は……フェン王国における、観光客殺人未遂についての公式謝罪と賠償、及び首謀者、参考人の身柄引渡し。また、フェン王国に対する謝罪、賠償、物品の保障、人員に対する賠償を求めている」

件の事件の首謀者であるレミールの顔が曇る。血の気は引き、目元には隈も出来ていく。かつての優雅さは失われ、今は小さくなって震えることしかできないようだ。

「では、レミール様、この学園都市の要望についてはどう思われるか」

「……わ、たしは——」

「もうよい！！！！！！」

レミールの発言に割って入る怒声。カイオスはその声の主を瞬時に理解して黙り込む。

皇帝ルディアスは第三外務局長カイオスに向く。

「カイオス、お前は何が言いたい!! この列強たるパーパルディア皇国、その長である皇帝と、そのレミールを、学園都市に差し出すといった屈辱的な完全敗北がお前の望みか!!」

「い、いえ、決してそのようなことは。ただ私は、皇国臣民のためを思い、学園都市が何を求め、我が国としてどういった対策が出来るのか、目を瞑らずにあらゆる可能性の模索をしているのです」

一言間違えば一族の首が飛ぶこの状況下でも、カイオスが主張を変えることはない。「学園都市は強い、私は本当に危機感を感じています。このままでは、もしかすると、皇国が倒れるかもしれないと、危惧を抱いているのです」

「ほう……確かに奴らは強い。海軍を壊滅させ、大規模陸軍基地の一つを潰した。しかし、未だ皇国には二つの大規模基地が健在であるが故、奴らは陸軍を上陸させる事は出来まい」

「何故そう思われるのですか?」

「陸軍の上陸……地の利を生かした列強国の大陸を制圧するとすると、とてつもない量の投入が必要だ。しかし、学園都市は海軍の数にしてもそうだが軍の数が少ない。陸の広大な面積は、質では補いきれまい」

「で、ですが、属領の同時攻——」

皇帝がカイオスを睨みつけ、その口を閉じさせる。

これ以上の反感を負うのは危険だと判断し、カイオスも渋々それに従った。

(くっ、やはりこの無能共を何とかする方が先決か!!)

カイオスは内心でクーデターを決意し、皇帝を欺くためにも矛を収めた。

不穏な空気を漂わせながら対策会議は続く。

一通りの結論が出たのは午前一時——対策会議は深夜にまで及んだ。

2

「おのれ!! 皇国を建て直した後は皆殺しにしてやる!!!!」

皇帝ルディアスは怒りに沈んでいた。

彼が過去一番に激怒している理由は、対策会議中に飛び込んだ一つの報告にある。

『緊急事態です!! 他三大陸軍基地との通信が途絶しました。ほぼ同時刻に途絶したこ

とから、恐らく学園都市による襲撃と思われます!!』

この攻撃によって陸海空全ての軍隊が全滅し、皇国は丸裸同然の状態に陥った。

残っているのは一線を退いた旧式兵器のみ。学園都市へ抗う術など残されていない  
かった。

「くそ、皇室直属の騎士団を敵の首都に送り込んで良いが……皇都の防衛力を下げる  
訳にもいかぬ。何か妙案はないものか……」

すでに詰んでいるにも関わらず、諦めることをしないルディアス。

既に時刻は二時を過ぎようとしている。寝室へと向かっていたルディアスだったが、そこで見知った顔を見ることになる。

「レオナルドよ、今宵のガーディアンはお主か？」

「はい、現在近衛兵のおよそ半数が警戒に出ているため、城内の警備が若干甘くなっております。そのため本日は近衛騎士団長である、私が直接警備を担当致します」

「ほう、それは心強いな。頼んだぞレオナルド」

「仰せの通りに、陛下」

レオナルドは敬礼の姿勢を取り、寝室の扉横に体を移す。

皇帝がその横を通り過ぎようとしたところで、ふとレオナルドが口を開いた。

「ところで陛下、ヴィナスという星をご存知でしょうか」

「っ？ 近頃、夜明け前の空に現れるあの星か？ それがどうしたと言うのだ」

「いえ、何でもありません。忘れてください」

「……………まあ良い」

それだけ言い残すとルディアスは寝室の中へと立ち去った。

そして。

「やはり、偶像の理論とは便利なものですね」

皇帝の寢室の前で、レオナルドだった誰かがそう呟いていた。

3

「「ツツツツ」

翌日の緊急御前会議は波乱の幕開けとなった。

そのきつかけは、皇帝が放ったこの一言に集約している。

『学園都市に降伏せよ。もはやそれ以外に道はあるまい』

皇帝の主張が昨晩から一転したのだ。

全員が驚愕の表情を見せる中、一人だけ反応が異なる人間がいた。

第三外務局長のカイオスだ。

彼も同じく驚愕の表情を浮かべてはいるが、その瞳に写した意思の色合いは違う。

（っ!?）これは——計画を見直す必要があるな。だが、ある意味好都合とも言え——

「へ、陛下!! 正気で——っ、どういうお考えでしょうか、奴らに降伏するなど」

一つの悲鳴があつた。

それによってカイオスの思考は中断を余儀なくされたが、レミールにとっては些事である。現在進行形で命の危機に晒されているのだから。

「ほう、ならばそなたには良い対案があるのだな、レミールよ」

「そ、それは……」

「……話にならん」

「ですが!! 第三文明圏の覇者であるパーパルディア皇国が蛮族相手に降伏など!!」

「レミール、現実を見よ。奴らは到底文明圏外国という範疇に収まってなどいない。神聖ミリシアル帝国を超え得る化物だ、そう簡単に勝つことは出来ない」

下唇を噛むレミールに、皇国の長は告げる。

「だが、私はただで負けてやるとは一言も言っておらんぞ」

「っ」

「降伏はする。ただし一時的にだ。その間に軍備を拡張し、奴らの目がよそを向きだしたときに横腹へ噛みつく。そして奴らの技術を手に入れ、世界へ進出するのだ!!」

「……、」

「なに、心配するなレミール、すぐに連れ戻してやる。それまでの辛抱だ。なぜならお前は、俺の婚約者なのだから」

「っ、……陛下」

レミールは感極まって目に涙を浮かべる。

それを見た皇帝ルディアスが咳ばらいをして告げる。

「話はまとまったな。では、学園都市へ通告せよ。大使は派遣されていないが、学園都市

と国交を持つ国々を介せば通達できるはずだ」  
「カウントダウンは、刻一刻と進んでいる。  
皇国の崩壊の時は近い。」



第二十三話 ひとつの結末  
End of Telom  
ere

1 (Time line 『Now』)

昏い檻の中にキンと鎖の音が響く。

学園都市に護送されたレミールは、閉ざされた監獄の中で小さく震えていた。

「うあ、や、嘘、違う……陛下……」

日頃の傲慢な態度や、国を傾けるほどの美しさは見る影もなくなっている。

自尊心の塊であるはず彼女がここまで打ちのめされているのは何故か。

その答えを知るには、数日前まで遡る必要がある……。

2 (Time line 『Past』)

「随分といい恰好になったみたいだな、皇女殿下」

とある牢獄の中に若い女の声が反響する。

黒髪にカチューシャを付けたその女子高校生は、目の前の薄汚れた——正確には、そうカモフラージュされた——囚人に向けて言い放った。

「それは嫌味のつもりか？」

「別に好きに受け取ってもらって構わないけど。だが、拍子抜けだな。もう少し抵抗されるかと思っていたのだが」

「はっ、そんな野蛮なことはせんよ。暴れたところでここから逃げ出せるという訳でもないからな」

囚われの皇女は両手を上げて、無抵抗だとアピールする。

彼女にとつて屈辱的な行動だったが、皇国の未来のために反逆を気取られてはならないと固く意思を押しさえつける。

「……まあ、従順な分には問題ないだろう。中途半端に暴れられるよりもよっぽど楽だし」

レミールは演技が通用したことを内心でほくそ笑むと同時に、怒りも覚えていた。

彼女の本来の性格である傲慢さはそう簡単には消えなかつたのである。

（クソ、忌々しい!! だが数年の辛抱だ、数年後には陛下が学園都市を滅ぼしてくれるはずだからな!!）

脳内でひたすら眼前の女狐を凌辱する手段を思い描き、レミールは心の安定を図る。

およそ二十のパターンを想像したところで雲川の部下が声を上げた。

「雲川さん、彼女が——」

「ああ、コイツで間違いない。第十学区の豚箱まで案内してやれ、きつと気に入るだろう

よ」

悪意を隠そうともしない雲川に対して、亜麻色の髪 of 囚人は殺意を抱いた。

(ち、今に見ているよ学園都市。必ず貴様らを地獄に叩き落してやる!!)

焼殺、溺殺、轢殺、刺殺、銃殺、絞殺。

復讐の手段は山ほど浮かんでくる。

とはいえ、今は何もできないというのも事実。

無力さを感じたレミールは薄くカビの生えた床へ目線を移し、表情を悟られまいとする。

「おい、こっちだ。さっさと進め」

黒服を着た男が鎖を引っ張って歩き出す。

監獄を抜け、どうやら飛行場の方向へと向かっているようだ。

しばらく歩いていると、滑走路上にある巨大な構造物がレミールの目に入った。

「つ、これは——」

「お察しの通り学園都市の飛行機械な訳だけど。まさか、この期に及んでムーから輸入したものだと考えていないだろうな？」

「く、まさか本当に、事実だと言うのか……」

「理解したか？ なら早く中に入れ、私も忙しいのでな。こんな辺境でのんびりしてい

る暇はないけど」

（つ、小娘が!! 調子に乗るなよ蛮族め!!）

渋々と超音速輸送機の中に入っていく囚人服の女性は、無意識下で雲川を睨みつける。

理性では分かっているけど、怒りを抑えることは出来なかったようだ。

ガシャンと後部ハッチが閉ざされ、機体のエンジンが胎動を始める。

やがて垂直に離陸して、大空へと解き放たれた。

そして。

「ッ!! なんだこの速さは!!??!!」

積乱雲が超高速で後方に流れる様子を見たレミールは驚き、信じられないものを見るような目を向けていた。

対する黒髪の少女は応じなかった。ただ意味深な笑みを浮かべているだけである。

（技術的優位を知らしめるつもりか……。くそ、認めたくはないが皇国よりも技術力は高いようだな……）

最低でも皇国のワイバーンの数倍の速度が出ている。彼女自身はワイバーンに乗ったことがないため、体感速度も何も分からなかったが、皇国の飛竜より速いことは理解できた。

（勝てるのか？ 陛下は学園都市の注意が他所を向いているときに首都を占拠すると言っていたが、これは一筋縄ではいかないか？）

「そういえば、前回の会合では随分と世話になったけど」

「っ」

俯いて思考をしていた皇女に、統括理事会のブレインを務めていた少女が言葉を投げかけた。

レミールは会合の際に、大使として派遣された雲川を怒りのままに殺害しようとした。相手が弱国であれば問題なかったものの、両者の力関係が逆転してしまった現在ではレミールにとってかなり不味い事態になっている。

「……すまない、あの時の私は冷静じゃなかった。私に出来ることなら何でもする、許してはくれまいか？」

蛮族相手に許しを請うたことでレミールの顔が一瞬屈辱に歪む。それは僅かな時間の出来事だったが、雲川芹亜がそれを見逃すことなどありえなかった。もつとも、付け焼刃のポーカーフェイスなど、初めから彼女の前では一切役立っていなかったが。

しかし、雲川の返答はレミールの想像の外に出ていた。

「……ああ、そのことか。その件については問題ない。初めから対策を施していた訳だからな」

「？」

ならば一体何の話だろうか。学園都市観光客を殺害しようとしたことも候補に含まれるが、それが理由とは考えにくい。その事件も同様に対策をされていて、彼らを殺し損ねたのだから、『対策をしていたから問題ない』という彼女の談と矛盾する。

思考の坩堝に放り込まれたレミールは高速で頭を回転させるが、

ダン!! と雲川の拳が背後の壁に叩きこまれる。

「つ、すまない。観光客の殺害命令のことか？ だがあれは仕方がなかったのだ、学園都市の真の実力をその時はまだ把握していなかったのだ。普段蛮族相手に使用している政策をそのまま取っただけなのだ。この方法なら双方の犠牲者が少数で済み

「くどくど」

一言で切り捨てた。

拳を振り抜いた姿勢で硬直している雲川は、至近距離で皇女を睨みつける。

「私が怒っているのは、そんな理由ではないのだけど」

「ひっ!!」

酷く冷たい声色だった。

先ほどまでの明るい口調とは一転して、言葉の端から怒りが見え隠れしている。

「皇国は魔法大国だが、軍の大半は銃火器の部隊で構成されているな？」

「……………」

「右腕が通用しない戦場にあいつを引きずり込んだ。それだけで、私を怒らせるに至る十分な理由になるのだけど。それも、その原因となった作戦の発案者がよりにもよって貴女だと聞いたからな」

「な、何の話を……。私はただ……」

「理解されなくて結構。だからと言って、わざわざ説明してやるつもりもないが」

雲川はレミールから距離を取り、格納庫内から一つのボックスを運び出した。

要するに、と少女は付け足し、

「お前は私の逆鱗に触れてしまった訳だけど」

雲川が何らかの操作をしたのか、足元に置かれているコンテナが展開される。

反射的にレミールはその冷凍コンテナの中に視線を移し、

「う」

すぐさま。

後悔した。

「あ、うあ、ああ」

コンテナの内部には。

眼球が、頭蓋が、脳髓が、肋骨が。





レミールは凍える手を無視して残骸を抱き寄せる。

「……………何故だ。何故このような真似をしてくれたツツ!!?! 答える畜族があああああああああああああああああああツツツ!!!!!!」

一つの咆哮があつた。

魂の奥底から絞り出したレミールの叫びを聞いても、雲川は超然としていた。

それが気に食わなかつたのか皇女は雲川に詰め寄り、

「自分が何をしたか理解しているのか、我々は列強たるパーパルディアの皇族ぞ!! こんな狼藉が許されるはずがないだろう!!!!」

「私がやった訳ではない」

「貴様アアアアアあああああああああああああツツツ!!!!!!」

レミールが雲川に殴りかかろうとして、周囲の黒服に押さえられる。

婚約者を殺され、歪みに歪むレミールの表情。せめて言葉だけでもと思い、彼女は叫ぶ。

「こんなことをして、本国が黙っていないぞ!! 戦争だ、皇国の全力を以つて学園都市を火の海にして、貴様も死んだ方がマシだと思うような目に合わせてやる!!!!」

「出来るものならな。ただそれ以前に、誰も皇帝が死んだことに気づいていないと思うがな」

「つ、貴様、何を言っている!!」

流石に聞き逃せなかった。

目の前の女の樂觀視にレミールは思わず問いかける。

しかし。

直後のことだった。

「その皇帝とやらが死んだのは三日前だ。その間、誰も気が付いていないようだけど？」

「は？」

雲川の宣告を聞いたレミールは、いつそ間抜けとも取れる声を漏らした。

目の前の女が何を言っているのか理解できない。

陛下なら牢に入る前に、会話を交わしたはずだ。

今も鮮明に記憶に残っている。なぜなら陛下は敵国に囚われることになる私の身を

案じて、心配の声を掛けてくれたのだから。

あれから一日も経っていない。

だからこの女の言い分は間違っている。

レミールは自分の心にそう言い聞かせ、忍び寄る予感から全力で目を背ける。

(いいや、有り得ない。絶対にそんなことは有り得ない!!)

三日前。

心当たりはある。ちょうど陛下が学園都市に対する方針を一転させた日付だ。

(違う違う違うツツ!!!!)

必死に否定を繰り返すレミール。

しかし彼女の意思とは裏腹に、最悪の可能性が脳裏に浮かんでしまう。

もしも。

突然の方針転換の原因が陛下の心変わりでなく、文字通り別人に成り代わられていたからだとすれば？

ザザザザザザじじじ。

ががががザザザザ。

ザリザリザリじじじりじりガガガガガガ。

脊髓の中に蛆虫が入り込んだかのような悍ましさを感じ、レミールは床にへたり込む。

吐き気を催すような邪悪。

世界中の悪意という悪意を煮詰めて焦がして炭化させてもこうはならないはずだ。

「……な、違う、そんなはず……。やだ、嘘、いやあ……」

あまりの衝撃にレミールは失禁し、意味の無い言葉を繰り返す。

彼女の精神は限界に達していた。

しかし、雲川芹亜は一切の容赦をしなかった。

「だから救援を待つのは無駄な訳だけど。上層部の完全掌握まで一週間も掛からないんじゃないか？」

それがとどめの一撃になった。

レミールの精神的支柱は粉々に砕け折れ、彼女の意識は深い闇へと突き落とされた。

## 第二十四話 皇国の終焉 New Government

t

1

「……、」

皇帝ルディアスは目の前に転がっているソレを見ながら佇んでいた。

元々は第一外務局長の形をしていたであろうソレ——全身の皮膚が剥がされ、臓器単位で解体されている惨殺死体——を見ても特に反応を示さない。

彼にとつて驚くほどの出来事ではないのか、それとも絶句しているのか。

様々な可能性が考えられるが、その答えはどちらでも否である。

直後のことだった。

ベリベリと皇帝の皮膚が剥がれ落ち、隠されていた褐色の素肌があらわになる。

名をエツアリ。変身魔術を得意とする、アステカの魔術師である。

「まったく、面倒な仕事ですね……」

ルディアス改めエツアリは変身魔術に使う護符を作成するために、エルトの死体から十センチ大の皮膚を切り取っていく。

しかし、何かに気付いたのかふと顔を上げて、

「おや、荷物の配送はもう済んだのですか？」

「ああ、滞りなく終わったさ。海原、そっちの状況は？」

レポートで皇帝の自室に現れた土御門元春に、エツアリは仕事の報告を上げた。

彼らは薄暗い笑みを浮かべながら続ける。

「こちらも特に異常はありません。革命の兆しがありました、首謀者は秘密裏に処分しました」

「確か——カイオスといったか。今回の『栄養素』リブレイスマントにはソイツも含まれていたはずだ」

「……栄養素、ですか。皮肉が効いていますね」

それにしても、とエツアリは大きく息を吐く。

「敵国の上層部を全てアンドロイドに差し替えようとは、相変わらず学園都市はロクな

ことを考えませんね」

『同化作用』リニューアルプロジェクト。

磁性制御モニターを利用し、外見を自在に変化させる軍用アンドロイド数機と、持ち帰った皮膚のサンプルから生み出される量産アンドロイドを中核に据えた、資源獲得計画である。

エツアリもまた、二人の妹分の治療費を稼ぐために実働部隊としてこの作戦に参加し

ていた。

「パーパルディア王国には鉾山資源が大量に存在しているからな。多少の投資でそれが得られるのなら、ある程度の無茶は押し通すつもりだろうよ」

「貴金属が大量に埋まっているという話も聞きますしね。いくら配列変換で金属を作り出せると言っても、コストパフォーマンスは最悪の極みですから。統括理事会が巨額の報酬を払ってまで自分たちに召集を掛ける訳ですよ」

「……まあ、舞夏の安全と交換できないのならこんな仕事、受けようとも思わないがな」  
契約が再び破られたのなら、学園都市を捨てて外で暮らすことも辞さない、土御門は右手に持った通信機を遊びながら再決意する。

「上層部の掌握はあと二日程で完了しそうです」

「……追加で必要な物資はあるか？」

「いえ、構いません。処理剤はかなりの残量がありますので」

「そうか。ならば後は任せただぞ海原」

結標、と呟いた金髪陰陽師の姿が掻き消え、静寂が訪れた。

そして。

海原と呼ばれた大嘘つきの声が、豪華な装飾を施された室内に寂しく反響する。

「さて、もう一仕事ですね」

既に高官の七割が換装されている。

生ける屍となった皇国の中枢はその二日後、学園都市によって完全に掌握された。

2

北の地方都市アルーニを易々と落とした七十三カ国連合軍は、アルーニの南に位置する聖都。パールネウスに向けて進軍していた。

「次も都合よく皇国軍が出張つてこないとは限らない、ここは慎重に駒を進めるべきだ!!」

七十三カ国連合軍を束ねる元属領カースの將軍ミーゴは、慎重論を主戦派のカルマに投げかける。

「何を言うか、今皇国は弱っている!! これほどのチャンスは二度とないぞ!!」

「前回は応戦が無かったとはいえ、皇国は腐つても大国ですぞ!! 地方都市が落ちたとなれば皇国も警戒し、軍備も増強されているはずですよ。学園都市の攻撃で壊滅しているなら話は違いますが、流石にそれは楽観視しすぎですよ。学園都市は最強であるとはいえ全能の神では無いのですから、過度な期待はしない方がしない方が得策だと私は思います」

カルマは不快な表情で言い放つ。

「……確かに学園都市軍が、わざわざ皇国北方部隊を攻撃する理由は何処にも無い。だ



が、今まで反撃が一切なかったのも事実だ。敵は北部の防衛を捨てて、皇都の防衛に向かったと考えるのが妥当だろう。ならば急ぎ皇都に進撃し、学園都市の援護を行うべきではないか？」

カルマの意見には筋が通っているが、微かに違和感を覚えた将軍が疑問の声を上げる。

「お主は何をそんなに焦っておるのだ？」

ちつ、と小さく舌打ちをしてカルマは告げる。

「お前たちは自分の国を取り戻しさえすればそれで良いと思っただろうが、我々は違う。今回の戦争で、世界は大きく変わるぞ!! 学園都市の影響は、もはや第三文明圏のみに留まらない。学園都市の技術を如何に効率よく取り入れるか、そして技術力の高いパーパルディア皇国を少しでも弱らす事が第三文明圏の未来を大きく左右するのだ!!!!」

「お、おう……そうだな」

先程とは打って変わり、激しい剣幕で怒鳴り散らすカルマの主張に押され、理解半ばに相槌を打つミーゴ。

しかし。

ピピピ、とリム本国からミーゴに対して通信が入る。

カルマは怪訝な顔をして通信機を手に取り、

「つ、そんな！ パールニュースは目前というのに!!」

その内容に思わず異を唱えた。

「しかし、それでは、……はい、わかりました。それにしても、対応があまりにも早すぎると思うのですが……。はい、調査をお願いいたします」

彼は悔しさに満ち溢れた表情で通信機を置き、連合軍の将へ振り返った。

「進軍は中止だ!!」

「っ?! ……一体何があつたのですか?」

「パーパルディア皇国が学園都市に降伏した。現在、学園都市は戦禍の拡大を防ぐために、七十三カ国連合に対しても停戦を呼び掛けている。まあ、学園都市の心象を損ねる訳にはいかないからな。我がリーム王国は進軍を中止し、さらに地方都市アルーニも放棄、撤退する事を決めた」

「……なんと、その様なことが……」

こうして第三文明圏全域を巻き込んだ大戦争は、連合国軍の撤退を以って終結した。

——誰一人その停戦要求に隠された、薄汚れた真の意図を見抜けないままに。

3

街の所々に設置された魔力通信を使用した動画の受信機、本日重要な発表があると聞

きつめた皇国臣民は、そこに集まり画面を注視していた。

皇国軍を打ち破ったとされているが、街中で噂されている学園都市の戦力については荒唐無稽な点が多く、人々は正確な情報を求めてテレビの前に張り付いていた。

「いったい何の発表が行われるのだろうか？」

「政府がわざわざ重要と伝えてきているのだから、相当な事だろう」

「まさか……皇国が戦争に負けて、臣民が奴隷となるとか……」

「バカな、我が国は列強ぞ!! そんな狼藉が許されるはずないだろう!!」

「しかし、現に精鋭部隊はやられているではないか」

「は、俺は見えないね。飛龍の数十倍の速度で飛ぶ飛行機械など、ありえないだろうが」

「……それに関しては、むしろ見える方が異常ではないだろうか？」

「つ、揚げ足を取るな、馬鹿野郎!!」

様々な憶測が飛び交う中、受信機に変化が訪れた。

画面が光の魔力を帯びて光はじめると、話していた皇国臣民は皆そろって画面を覗き込む。

やがて、画面の中の壇上に一人の人物が立ち登り、言い放った。

『皇国臣民の諸君、心して聞け』

皇帝が直々に登場し、画面の前の民衆がざわつく。

『此度の戦争は多くの人々が傷つき、家族を亡くし、途方に暮れた者も多いだろう。皇国兵の大半が命を落とし、かつて属領と呼ばれた七十三カ国の独立も許してしまった。もはや、この戦争を続けて得られる物は何も無く、むしろ失う物の方が多い』

話の雲行きが怪しくなり、徐々に騒めきが大きくなつていく。

画面の中の皇帝は当然それを気に留めることなく話を続け、そして宣告した。

『予は皇国臣民を守るためにも、そして皇国がこれ以上のダメージを受ける前に、学園都市に降伏することを決断した』

民衆の間に衝撃が駆け抜ける。

「なつ、これほど屈辱的な目にあわされて、報復ではなく降伏だと……。陛下は何を考慮しておられるのだ……」

「いいや、徹底抗戦するべきだ!! 学園都市に攻め込んでやれ!!」

「貴様ら陛下の意思に逆らうと言うのか!!」 陛下は我々のためにも、恥を忍んで降伏したのだ。それを無下にするつもりか!!」

「話によれば独立が維持できるようだし、まだマシじゃないか」

皇国各地で様々な議論が行われる。

覇を唱え、決して譲ることのなかったパーパルディア皇国。それが実質的に七十四カ国に分裂し、無条件に降伏した。

完敗。

その二文字が頭に浮かび、画面の前で涙を流す人々。

この日、皇国臣民にとって学園都市は恐怖の対象となった。

## 第三章

## 第二十五話 真の王者は井の中に Absolute

## Power | Balance

「それでしたらリアージュ様、先進十一カ国会議に学園都市を呼ぶという名目で使節を派遣してはいかがでしょうか？」

「ふむ、名案だな。これなら議員の方々も納得するだろう」

……………。

……………。

1

前略ミ帝の外交官が手記に『もうつかれた、ねる。』とだけ書き残したあの日から、早くも一年が経過した。何が起きたって？ ……察してやれ。

いつでも発見どこでも発展な科学の街は、異世界人にとって刺激が強すぎたのだ。

そんなことはどうでもいい、  
閑話休題。

本日開催される世界会議に参加するために、港町カルトアルパスには各国の代表が

続々と集まつていた。

「トルキア王国使節団、到着しました。戦列艦七隻、使節船八隻です」

「了解、第一文明圏エリアへ誘導せよ」

港湾管理者の下に集結する情報の数々。

彼らは港に着いた船を適切に誘導していく。

「第一文明圏のアガルタ法国使節団が到着しました。内訳は魔法船団六隻、民間船二隻です」

「了解。同様に誘導せよ」

港湾管理責任者のブロンズは、この先進十一カ国会議が好きだった。

この会議は各国が使者を護衛するという名目で、最新式の軍艦を艦隊ごと送り込んでくる。軍事好きの彼にとってこのイベントは、仕事であると同時に祭りのようなものであった。

「ここに第零式魔導艦隊があれば、各国の軍も貧相に見えるのだろうか……」

港町カルトアルパスの近くに基地を有している第零式魔導艦隊は毎年この時期に、様々な事情から西にある群島に訓練に行くのが恒例となっていた。

第零艦隊と直接比較することは出来ないが、脳内イメージで完璧に補完できる彼にとってそれは大きな問題ではなかった。

そんな彼が特に注目している国家は二つある。

列強国のレイフォルを落とした軍事大国である、グラ・バルカス帝国と、同じく列強国のパーパルディアを、七十四カ国に分裂させた学園都市だ。

この二国は文明圏外国でありながら列強国を打ち破ったという、イレギュラーな国であるため非常に興味深い。

いったいどんな艦隊が来るのか、彼の胸に込み上げるものがある。そう考えていた時だった。

「っ、来たか!!」

ブロンズの視界に、城のような構造物を持つ船が映った。

その姿は近づくにつれてさらに大きくなり、魔導戦艦を見慣れた彼でさえ絶句する程に巨大な船が、やがてその姿を現した。

誰もがその雄々しさに見とれて言葉を失う。その間にも、老若男女を問わず全員を魅了したその戦艦は徐々に港に近づいてくる。

そして、再起動の時は来た。

「グラ・バルカス帝国到着!! 戦艦が——二隻です!!」



「「おおつつ！！！！！！」」

「何という威容じゃ……」

「……美しい」

「我が国の戦艦にも引けを取らんどこれは……」

それを見た者すべてが感嘆する。

G A型戦艦一番艦グレートアトラスター、並びに二番艦のハイパーシユプリカム。グラ・バルカス帝国が信念をもって作り上げた、帝国最強の戦艦である。

二百メートルを優に超えるその巨体は見るものすべてに力を示す。

事実、港町カルトアルパスの住人は皆その雄々しい姿に圧倒されている。

「なんて巨大な砲を乗せてやがる……」

港にいる野次馬の一人が思わず呟いた。

四十六センチ三連装砲三基が、誇らしげに水平線を向く。

そして。

そして。

「……長、ブロンズ所長!!!!」

第八帝国の戦艦に見とれていたブロンズは、部下からの問いかけで我に返った。

「ああ、何だ?!」

「学園都市の船団が到着しました!! 戦艦が一隻、民間船が二隻です!!」

ブロンズは学園都市の戦艦と聞いて、慌てて振り返り、

そして、信じられない光景が彼の瞳に映った。

「……同型艦か? 形状が非常に似て——ツツ!!?!」

彼の顔が勝手に引きつるほどに、明らかかな異常だった。先の戦艦と酷似していたから? いいや違う。そのような些事では決して無い。ならば何故か。

学園都市の戦艦が、グレートアトラスター以上の巨体を誇っていたからだ。

全長は恐らく三百メートルを超えている。

その巨体の代償なのか、船の歩みは非常に遅い。

が、その脅威は押して凶るべきだろう。

「つ、学園都市……、一体奴らは何者なんだ……」

ブロンズが残した呟きは、ただ海風によって流されるだけであった。

学園都市の大使、雲川芹亜は帝国文化館内の国際会議場に足を運んでいた。

今回の先進十一カ国会議は数日に及び、最初に外交担当の実務者級の会議が行われる。

そこで話を詰めた後に、後半で外務大臣級——学園都市からは統括理事会の一人が出席している——の会議と意思決定を行うことになっている。

国際会議への出席は初めてであるはずだが、雲川は相変わらずその余裕を崩さない。

(既にプロファイリングは済ませてあるけど。他種属相手にはいささか苦戦したが、個人特有の癖は案外すぐに見つかったな)

過去の記録や現在の行動から、心の機敏を読み取り、思考を掌握する。

これが雲川芹亜の『交渉』であった。

彼女が会議の展望の予測と、それに伴う対策を練り上げている所に、三人の人間が向かってくる。

思考を張り巡らせていても、彼女の目が曇る事はない。すぐに顔を上げ、彼らのいる方向へ振り向く。

「学園都市の方……ですわね？」

「ああ、その通りだけど」

「私はアガルタ法国の外交庁に勤める、マジと申します。以後、お見知り置きを」

マギは雲川に右手を差し出す。

世界会議でも変わらず、セーラー服を身に纏う彼女はその手を取り、

「学園都市統括理事会のブレインを務めている、雲川芹亜だ。宜しく頼む」

にこりと微笑んだマギは囁くように言う。

「雲川殿、お会いできて光栄です。学園都市の戦闘法術は、中央世界でも噂になっていません。この魔法文明の世界において科学文明のみで成り上がり、パーパルディア皇国軍を完膚なきまでに叩き潰した勇敢な民族が住まう国だと。私たちの今までの常識では、魔法が使えなければ、ろくな文明を築く事が出来ず——聞こえは悪いが、蛮族というイメージが強い」

しかし、と彼は付け足し、

「学園都市は魔法無しで高度な文明を築いていると聞き、我がアガルタ法国は学園都市に対して、非常に大きな興味を持っています。今度は学園都市へ伺ってみたいものです」

「ありがとう。来たければ自由に来ればいい、学園都市はいつでも君を歓迎するだろう」

雲川も同様に笑顔で答える。

マギは再び口を開こうとしたが、会場にアナウンス音が鳴り、渋々中断した。

『間もなく、先進十一カ国会議が開催されます。関係者の方は席へお戻り下さい』

先進十一カ国会議。

世界規模で巻き起こった大戦争のプロローグが、遂にその幕を上げた。

## 第二十六話 踊り狂う会議 Broken\_Conference

r e n c e

1

『これより、先進十一カ国会議を開催します』

帝国文化会館国際会議場に、開始を知らせるアナウンスが流れる。

先進十一カ国会議。開催期間は一週間に及び、世界の行く末を決める会議として全世界が注目する会議である。

準列強以上しか参加できないこの会議への出席が認められるだけでも大変な荣誉になる。

また、本会議では列強並みの強さを誇る、学園都市とグラ・バルカス帝国が常時参加国として承認される予定であった。

列強格の国家として、

神聖ミリシアル帝国（中央世界）

エモール王国（中央世界）

ムー（第二文明圏）

グラ・バルカス帝国（文明圏外、第二文明圏西側）

学園都市（文明圏外、第三文明圏東側）

準列強枠として、

トルキア王国（中央世界）

アガルタ法国（中央世界）

マジカライヒ共同体（第二文明圏）

ニグラート連合（第二文明圏）

パンドーラ大魔法公国（第三文明圏）

アニユンリール皇国（文明圏外、南方世界）

今回の会議はこの十一カ国で構成されている。

力のある国のみが集められているため、会場の空気も張り詰めていた。

そして。

「エモール王国、発言を許可します」

手を上げる使者の中の一人が議長に指名され、発言権を得る。

身長が二メートルもある竜人属の使者は立ち上がり、

「今回は皆に伝えなければならぬ事がある。極めて重要な事であるため、心して聞くがよい」

何しろ世界三位の列強国の発言だ。何一つ物音が無くなり、場が静まる。

「先日、空間の占いを実施した。同占いの的中率は皆知っているな？」

何しろ、九十七パーセントもの驚異的中率を誇る占いである。知らない筈がない。

何か悪い結果が出たのだろうか。各国の代表は呼吸も忘れて彼の発言に聞き入る。

「その結果だが……古の魔法帝国、ラヴァーナル帝国が近いうちに復活すると出た」

「ツツツ！！！！」

どうしようもなく空気が凍り付く。

世界征服を目論む、神話時代の超大国が復活しようとしているのだ、当然の反応と言えよう。

そして僅かなクール時間を置き、一気に暴発した。



「な、なんてことだ!」

「伝承に間違いが無いのであれば、我らに抵抗する術はない!!」

「……嘘だろ、それが事実なら相当不味いぞ!」

騒めく会場の空気を無視してモーリアウルは続ける。

「空間の位相に歪みが生じており、時期や出現位置は判然としないが、我らの計算だと、今後四年から十七年までの間にこの世界の何処かに出現するだろう。奴らにどれほど抗う事が出来るのか、伝承がどれほど本当なのかは不明だが、奴らの遺跡の高度さがその文明レベルの規格外の高さを物語っている。各国は不要な争いをする事なく、軍事力の強化を行い、ラヴァーナル帝国の復活に向けて準備をしてもらおう」

会場はざわつき、様々な国の大使がうなずく。  
しかし。

「く、くく……ふは、あーっはっはっは!!!!」

その雰囲気には耐えることが出来ず、笑い出す女性が一人。

会場参加者の多くに非難的な目で見られるが、それを気にすることなく彼女は言っ

た。

「いやいや、失礼、私はグラ・バルカス帝国外務省、東部方面異界担当課長のシエリアという。魔帝だか何だか知らんが過去の遺物を恐れるとは、異世界人のレベルに唾然としている所だ」

初手から暴言が飛び出した。

視線が厳しくなるが、やはりそれを無視して告げる。

「そもそも占いなどという不確定なものを、国際会議で発言する神経が私には理解が出来ないよ。しかも、この世界の列強と呼ばれる国がこの発言。我が国にあつさり滅ぼされたレイフオルも、弱かったが列強と言われていたらしい。世界会議……か。レベルの低さが窺い知れる」

「新参者が何をいうか、礼儀を知らぬ愚か者め!!」

「そうだ、蛮族如きが余計な口を開くな!!」

会議に出席していた使者達が口々に叫ぶ。

その混沌とした状況を打開するためにも、発言主のモーリアウルが手を叩き、注目を集める。

「新参のグラ・バルカス帝国か、魔法を知らぬ人族主体の国らしいな。魔力数値の低い人

族ごときがほごくな。貴様らごときに期待はしていない」

「つ、科学を理解出来ぬ亜人風情が……我が帝国に、一人前の口をきくとはな」

「亜人は人間以下という意味だ。我が国は竜人族ぞ、下種が!!」

しかし、その試みも失敗し、場は更に乱れることになった。

議長が場を鎮めようとするのを横目に、雲川は予想以上に低レベルだった会議について考えていた。

（予想はしていたが此処まで酷いものとは……。くそ、これだと計画全体を見直す必要がある訳だけど）

呆れて物も言えない雲川だったが、会議は勝手に進行していく。

「我が国、ムーは、先進十一カ国会議において、グラ・バルカス帝国に関する非難声明を発し、同国に対する懲罰のため二年以上の交易制限を発議いたします。理由としましては、第2文明圏イルネティア王国、王都キルクルスに対する大規模侵攻です。国家間同士の戦争ではあるが、このところ彼らはやりすぎだ。このまま彼らを許すと、世界秩序を破壊する可能性があります」

ムーの発言に、神聖ミリシアル帝国も賛同する。

「確かにグラ・バルカス帝国は、世界秩序を乱しすぎている。このまま第二文明圏国家を侵攻し続けていると、我が神聖ミリシアル帝国も介入せざるを得なくなる。我が国はムーの提案に賛成するとともに、グラ・バルカス帝国へ第二文明圏の大陸から即時撤退を求める」

誰もが認める世界最強の国の介入、それを聞いただけですべての国が震えあがり、剣を治める事がほとんどだった。

全員の視線がグラ・バルカス帝国の美しき外交官シエリアに向けられる。

早く白旗を上げろ、対策会議が進まない。

暗にそのような意図を告げられ、堪忍したのか彼女は立ち上がる。

いいや。

「一つ、最初に伝えておこう。我が国の目的は会議に参加することではない。この地域の有力国が一同に会するこの機会に、通告しに来たのだ」

反省の気配は一切見えない。当然だ。彼女の目的は初めから一貫していたのだから。

「グラ・バルカス帝国 帝王グラルークスの名において貴様らに宣言する。我らに従え。」

我が国に忠誠を誓った者には、永遠の繁栄が約束されるだろう。ただし、従わぬ者には、我らは容赦せぬ」

あまりの物言いに絶句し、沈黙する議会。

「理解したか？ ならば尋ねよう。今、この場で我が国に忠誠を誓う国はあるか？」

傲慢を極めたセリフに、再起動した者から叫び声が溢れ出す。

「バカか、貴様は!!」

「下種が!!」

「蛮族が、何をのたまっているのだ？」

場は騒然とし、怒号が飛び交う。

それでも彼女は超然としていた。

「やはり、今従属を誓う国は現れぬか。まあ、当然だろうな。帝王様は寛大だ。我が国の力を知った後でも構わない。その時はレイフォルの出張所まで来るがよい。まあ、かな

り自国が被害を受けた後になりそうだがな。では現地人ども、確かに伝えたぞ!!」

シエリアは発言の後、荷物を纏めて会議から途中離脱しようとする。

その非常識さに呆れて静まり返る議会の中に、もう一人の女の声が響き渡った。

「一つ聞きたいことがあるのだけど」

「……なんだ、学園都市の者か。何の用だ、貴様らだけ降伏するつもりか?」

雲川から失笑が漏れる。

「いいや、先の発言は我々に対する、宣戦布告として受け取って良いのかと思ってね?」

「……理解していなかったのか? とんだ愚か者がいたようだ。それともこの機に及んで我々と友好的な関係を持てると思っていたのか?」

しかし。

シエリアの予想に反して、目の前の女の口からこんな言葉が飛び出した。

「それは僥倖。……言質は取ったけど、構わないな?」

帝国を格下だと捉えているのか、黒髪の少女は逆に言い返してくる。

「はっ、弱者の戯言と受け取っておこう。次に会うときは貴様の国が火の海になる頃だろうか。楽しみにしているぞ」

そう言い残して使者は港からも去り、その日の先進十一カ国会議は終了した。

開催日数は残り六日。

運命の日は刻々と近づいている。

## 2

神聖ミリシアル帝国の第零式魔導艦隊は、西方群島で訓練を行っていた。

島が所々にあり視界は悪い。

魔導戦艦が三隻、重巡洋装甲艦が二隻、魔砲船が三隻、随伴艦八隻。

この世界に敵なしと言われた、計十六隻の大艦隊は実戦さながらの訓練を繰り返し、練度の維持に努める。

「ん?」

魔信探知機を見ていたレーダー監視員が、海上を高速で近づいてくる光点を見つめる。

「レーダーに感あり!! 北方向より、機械動力艦と思われる反応が接近中です!! 速度二十九ノット、距離六十。反応から想定するに、戦艦二、重巡洋艦三、巡洋艦二、小型艦五、計十二隻が我が艦隊に接近しています!!」

「ムーではそんな速度は出せないはずだ。となると……グラ・バルカス帝国か? 総員、戦闘配備。不明艦隊がこちらに接近中!! これは訓練ではない。繰り返す、これは訓練ではない!!!!」

『世界最強』と『新進気鋭』。

遂に、二つの勢力の争いの幕が切って落とされた。



## 第二十七話 完全なる支配へ Complete Di

## S c u s s i o n

1

帝国第一会議室。

そこには不穏な空気が流れていた。

「それでは、これより緊急会議を開催いたします」

各人にレジユメが配られたのを確認した担当者が、プロジェクターを起動する。視線を移してみると、配布された紙を閲覧した人間が次々と顔をしかめていた。

一体何があったのか。担当者が話を始める。

「概要を説明いたします。本日早朝、本国の西方にあるカルアリス地方の群島付近で訓練中の第零式魔導艦隊が『正体不明の艦隊と航空機による攻撃を受けつつある』との連絡を最後に、音信不通となっております。また、同群島にある地方空軍基地も、同様の

連絡を最後に音信不通となりました。現在通信可能な基地は、陸軍離島防衛隊のみであります。同所からの報告によると、敵艦隊及び航空攻撃により第零式魔導艦隊は全滅。空軍基地も敵航空機により全滅したとの連絡が入りました。敵の国旗を確認したところ、グラ・バルカス帝国と判明致しました」

その報告を聞いた者は全員、胃袋の中にボーリング球を入れられたかのように錯覚した。

その圧力に耐えられず、外務省のリアージュが思わず眩く。

「ちよつと待ってくれ、第零式魔導艦隊が全滅しただと？ 世界最強の艦隊だぞ。いくら、グラ・バルカス帝国が強かろうが、損傷ならともかく全滅は……本当なのかね？」  
「おそらく事実です。今回の敗北は、敵艦隊に対し我が方が小数だった事や、エアカバーが不十分だった事などが可能性として考えられますが、今回の議題はそこではありません」

一拍の間を置いて、軍部担当者は告げる。

「陸軍離島防衛隊の報告によりますと、艦隊を破った敵は、艦砲射撃で空軍基地を破壊した後に、東へ向かったとの報告があります」

緊急会議を召集するレベルの非常事態であることを、誰もが認識した。

空軍基地の東側には、現在世界会議が開催されている、港町カルトアルパスがあるからだ。

「防衛体制はどうなっている？」

大臣の呟きを耳にした担当者は資料のページをめくる。

「離島防衛に向かわせていた第四、第五艦隊を、帝都防衛のため呼び戻しています。港町カルトアルパスに関しては——現在、東方展開中の第一、第二、第三艦隊を周辺に展開させるように手配を行っています……。離島からの距離を考慮すると、敵の方が速くカルトアルパスに到着する可能性があります。各国の使節に被害が及ぶ可能性があるために、即時避難を促したいのですが……。この件について外務省統括官殿、貴方の意見も伺いたい」

軍部の事情など知ったことではなかった。彼には彼の使命がある。勢いよく立ち上がった統括官は堂々と反論する。

「じよ……冗談じゃない!! 守り切れない可能性があるので避難してくださいなどと、言える筈がないだろう!! 世界一位の大国が仮にもそんな事を言えば、他国に軽視されるのは明白だろうが!!」ただでさえ学園都市とかいう超列強級国家が現れたというのに……。本当に、鞍替えでもされたらどうするつもりだ!!!!」

一通り叫んで冷静になったのか、言葉をわずかに詰まらせ、代案を提示する。

「まあ、奇襲を受けて被害が出たと言えば、まだ各国も仕方がないと思ってくれるだろう。どうせ直接見られていないのだから、何とでも誤魔化せる。……そうだ、壊滅したのは地方隊だったという事にするのはどうかね? これなら我が国を非難する連中はなくなるだろうよ」

「……なるほど、それは良いアイデアですね。その線で対策を練りましょうか」

グラ・バルカス帝国対策会議は深夜まで及び、『奇襲攻撃を受ける可能性があるため、

東方都市カン・ブラウンまでの避難を要請する』ことが決定された。

## 2

帝国文化会館国際会議場に、若い女の声が響いていた。

「魔法帝国と言えば、面白いものを発掘したのだけだ」

雲川芹亜はキャリーケースの中から、何かを取り出す。

「これは、第三文明圏南方海域に位置している海底遺跡から引き揚げた物だ」

雲川の手の中にあるそれは、四角い箱状の物体だった。淡く輝く金属外殻の内側には魔法陣でも仕込まれているのだろうか。

「調査の結果、その装置には十九年後——一六五三年の七月十九日に、特定の空間に向けて魔導波を発信する機能が埋め込まれていたことが判明した。座標情報や公転速度のデータを観測する機能も、それと同時に発見された訳だけど。この意味が分かるか？」

彼女は手の中もてあそのキューブを遊びながら告げる。

混乱は、数秒遅れにやって来た。

「それが一体何だと言うのだね。魔法帝国と何の関係性が——つ、まさか!!?!」

「予言で示された時期と同じだ……つまり、奴らが復活するのは十九年後という訳か!!」

「それを壊してしまえば、魔法帝国の復活を阻止できるのではないか!!?!」

「安易に壊すのは危険だ、どんな仕掛けが施されているのか分からんぞ!!」

「それは……」

「いいや、多少のリスクを払っても実行するべきだ！ 奴らを葬れる絶好の機会だ、絶対に逃せん！」

会場が湧き、様々な意見が飛び出す。

続けて浮かんだ迷惑そうな表情は、その騒音によるものだろうか。

雲川は小さくため息を吐き、

「これを破壊するという提案には乗れんよ。ただ無駄なだけだから」

「何故だ!!」 かの魔法帝国の復活を阻める可能性があるのだぞ! 今すぐ破壊するべきだ!!」

アニユンリール皇国の大使が雲川の発言に噛みつく。

しかし、彼女の発言は思わぬ方向へ飛躍した。

「こいつは定期的に微弱な魔導波を発信している。……データの共有、とでも言えばいいだろうか。恐らく他の同型機と交信しているのだろう。同種の機能を持つ物が他にも存在している、と言い換えてもいいけど」

「っ、何故そ——、学園都市は科学文明なのであろう!! 何故そうと言い切れ

「ならば逆に聞こうか。何故、貴方はそこまでコイツの破壊に執着するのかね?」

「…魔法帝国が滅ぶに越したことはないだろう。何故そのようなことを聞く」

言葉がわずかに詰まる。

当然、交渉の怪物がそれを見逃す筈がなかった。

「躓いたな? 焦りすぎだ、先程からボロを出しすぎている訳だけだ」

「何だ？ 何の話をしている？」

「それとも嘘を吐いている人間の特徴を教えようか？ 現在の貴方の言動は、すべてそれに適合しているのだけど」

「だから、何の話をしているのだ!!」

雲川の追及に怒りを抑えられずに叫ぶ、アニユンリール皇国の大使。

相対する彼女は涼しい顔をして、再び口を開いた。

「最初のミスは致命的だったな。慌ててカバーしても無駄だ、心得のある人間ならすぐに見分けがつく」

「ふざけるな、どういうつもりだ!!」

「想定外の質問に答えられない。話をよく聞こうともせず、即座に疑問で返す。有名なものを挙げればこのくらいか。細かな条件なら、他にも二百の特徴と合致する」

「……貴様、大概にしろよ」

「内心では冷や汗が止まらない癖に。表情筋の微弱な動きから幾らでも読み取れるけど」

「……、」



遂に使者の言葉が止まる。

それは数秒だったのか、数分だったのか。奇妙な沈黙が会場を支配した。なににせよ、それを破ったのは議長であった。

「済まない、分かるように説明してくれ。貴方たちは何の話をして――

「コイツが我が国を侮辱するのです!! これ以上続けると言うのなら、公式に訴えさせてもらおうぞ!!!! 分かっているのか!!!」

「おや、我が国と言ったか。貴様の企ては、国家規模で実施されているものだったのか?」

「ツツツ!!!!」

「何を動揺している? 先の発言から読み取られたとでも思ったのか? それなら残念、貴方は何一つの失言をしていない」

「なつ、おま……」

「貴国が鎖国してまで隠しているものは何だ? 尤も、既に検討は付いている訳だけど」

「つ、………何も………何も隠してなどおらん!!!!!!」

此処まで来て、周りの人間の理解が追い付いてきた。

アニユンリール皇国は、魔法帝国に関する重要な何かを隠している。

彼らはそう判断し、事情を知っているであろう雲川に疑問を投げかける。

「つまり、どういうことなのだね？　彼らは一体何を隠していると言うのだ？」

「私はもう帰るぞ！！　これほど不快な気持ちになったのは初めてだ！！！！」

「簡潔に言うとうと」

「うるさい黙れ！！　これ以上の侮辱は許さんぞ、国辱ものの発言だ！！　後で訴えさせて  
もら

「アニユンリール皇国は、魔法帝国マジカの信奉者ということだけど。彼らが有翼人種であることを考慮すれば、その正体も窺うかがい知れる」

ついに本命が来た。

雲川はここで勝負を決めるつもりだろうか。

だとすれば、あまりにも適切なタイミングだとしか言いようがない。

普段なら一蹴される意見。しかし、突き刺さった。

各国の大使の心に、それは突き刺さったのだ。

「……………」

「……………その目はなんだ!! 全てあの女狐の言いがかりだ、よもや信じてはおらぬだろうな!!」

その発言に賛同する人間は、この場にはいなかった。

その事実が大使の焦りを加速させる。

ここでバレてしまつては、今までの隠蔽どりよくが無駄になつてしまう。

しかし、現実是非情だった。

「アニユンリール皇国よ、説明してもらおうか」

「そうだ!! 事実かどうかはつきりさせろ!!」

「……………信じていたのに、皆が一丸となつて魔帝に対抗する未来が来ると…………」

「な、私は違つて、何も隠してなどいない!!!!」

言い訳を試みるが、一切の説得力も伴っていない。

追及はいっそう過激になった。

「ならば、先の挙動不審な態度はなんだ!! 見苦しいぞ、白状しろ!!」

「何も隠していないと言っているだろう!! いや、そうか、そういうことか。騙されるな、あの女狐こそが世界の敵だ!! 魔法帝国に敵対する我々を分断しようとしている、奴らが魔法帝国の尖兵だからだ!!!!」

「何をふざけたことを言っている。どう見ても怪しいのは貴様の方だろうが」  
「……また一つ、条件に合致したけど。言い訳はあるか?」

何かがプツリと切れる音を幻聴した。

全員から責められて顔を真っ赤にする裏切り者が、その音源であった。

「黙れええええええつつつ!!!!!!」

魂からの叫びに気圧けおされ、その場にいる全員が押し黙った。  
咆哮は止まらなかった。

「世界の行く末を決める会議に出席してみれば……何だ!!?! 何故我々が責められていく、敵は魔法帝国だろうが!! 二十にも満たない小娘の言葉に踊らされて、恥ずかしくないのか?! くそ、……話にならない、本当に帰らせてもらうぞ」

資料を叩きつけて、机から離れるアニユンリール皇国の大使。

彼は雲川を睨みつけて、

「絶対に報復してやるぞ学園都市。貴様の国を粉々に粉碎してやる」

「貴国は領土が広いだけで、大した軍事力は持っていないと記憶していたが?」

「ちっ……言葉の綾だ。もういい、お前は黙っている」

それだけ言い残し、大使はこの場から立ち去ろうとする。

みすみす逃すことはしなかった。

「ならば最後に一つだけ言わせてもらおうか」

「……話を聞いていなかったようだな。私は黙れと——」

「先ほどの装置——魔帝復活ビーコンと名付けようか。それが定期的に発信しているデータだが、どうやら貴国の首都周辺に発信されているようだ。寂れた遺跡などではなく、な」

「……黙れ」

「心当たりはあるか？ 未開の国だから、地面に埋まっていることにすら気付きませんでした——などと、つまらないことは言うなよ。貴様らが神聖ミリシアル帝国並みの技術力を持っていることは分かっている。態々それを隠す理由も含めてな」

明確に。

大使の動きが静止した。

「なっ……何の話だ」

「出ているぞ。何度も言わせるな」

「く、そ……」

ようやく敗北を悟ったのか。大使の表情が屈辱に歪む。

「小娘が!! 必ず報復してやるぞ、この恨みは一生忘れん!!!!」

強く雲川を睨みつける使者。

彼は扉を蹴り破るようにして立ち去った。

先進十一カ国会議。

早くも離脱者が発生し、残る国家は九つとなった。

## 第二十八話 捕食者は斯く墜ちる Debauched

## Eagle

1

神聖ミリシアル帝国 港街カルトアルパス

港の一角で開かれている先進十一カ国会議——もつとも九カ国しか残っていないが——は紛糾していた。

「皆さま静粛に。これより重要な伝達事項があります」

黒色のスーツを着用している議長が発言で、場が静まり返る。

「先ほど、我が国の哨戒機がカルトアルパス南方約百五十キロ地点を北上するグラ・バルカス帝国の戦艦群を発見いたしました。グラ・バルカス帝国の船速とここから海峡までの距離を考えると、船による避難は間に合わないでしょう」

そこで、と言葉を区切る議長。

「世界連合軍を組織し、グラ・バルカス帝国海軍を迎え撃つ事を提案いたします」

歴史に名を残すことになる一戦。



フオーク海峡海戦が、ついに幕を開いた。

2

港町カルトアルパス

港湾管理者ブロンスは恐怖と期待が入り混じった感情に襲われていた。

彼が見たことも無いような巨大戦艦を操る国が、世界最強の神聖ミリシアル帝国に攻め込んでくるという。

先ほどから上空を見上げると、我が国の多目的戦闘機ベータ2が何機も編隊を組んで南の空に消えている。

おそらくは事実。

目線を港に移すと、世界の強国と言われる国々の艦隊が続々と出港している。

「マジカライヒ共同体、機甲戦列艦隊出港！」

第二文明圏の雄、マジカライヒ共同体の機甲戦列艦隊七隻が出港を開始している。

マジカライヒ共同体は、規模でこそ第二文明圏列強だったレイフォルに劣っているが、単艦あたりの性能はレイフォルよりも上である。

ムーの機械文明と魔法文明を上手く融合させており、その機甲戦列艦隊の強さは第二文明圏の中では突出して高い。

「アガルタ法国、魔法船団出港!!」

「ニグレート連合、竜母艦隊出港!!」

「ムー、機動部隊出港!!」

以降も続々と艦隊が出撃していく。中でも目を引くのは、第二文明圏最強のムーの艦隊である。戦艦二隻、装甲巡洋艦四隻、巡洋艦八隻、空母二隻が出港する。

そして。

そして。

そして。

「学園都市、戦艦出港!!!!」

黒光りし、先進的なフォルムを誇る学園都市の戦艦。

学園都市の伝説的な強さは、パーパルディア皇国戦すでに噂となって知れ渡っている。

港湾管理者ブロンズは、ワクワクしながら強国たちの出港を見守る。

新旧混合とは言え、総勢六十一隻にも及ぶ大艦隊だ。

敵が何であろうと負けることは無いと、各艦の担当者は考えていた。しかし。

その幻想は碎かれることになった。

外からではなく、内側からの衝撃によって。

神聖ミリシアル帝国 第七制空戦闘団

魔光呪発式空気圧縮放射エンジンの高音が空気を裂く。

団長のシルバーは、高性能機同士の戦いを前に緊張をしていた。

「全機高度五五〇〇メートルまで上昇せよ、下方の警戒を厳となせ」

「了解!!」

魔信機で友軍機に指示を出すシルバー。

そこに通信が入る。

『敵機発見!! 左方30、下45!!』

「っ、何処だ!!」

キヤノピー越しの景色の中から、敵編隊を見つけ出そうとする。

部下の報告にあった場所を覗き込み、

「数が多いな。ムーの飛行機械を鋭くしたような形だが……」

低翼を採用し、機首に大きなプロペラが一つ。

その進行速度や大きさから、明らかにムーの飛行機械よりも強力な敵である事を彼は

感じ取る。

「……先頭集団を叩くぞ!! 全機突撃、敵編隊上方から攻撃を行え!!」

魔光呪発式空気圧縮放射エンジンの高音が機内に響き、速度が上がるにつれて振動が激しくなる。

そして、それに混<sup>ま</sup>じる微かな違和感。

「つ……な、上から!! 敵襲! 後方上空、太陽から来るぞ!!」

4

ツツツドン!! と。

空を駆け抜ける衝撃が一つ。

5

『くそ、回り込まれた!! 振り切れびぎゅ』

『つ、旋回速度が!! ごぼ、馬鹿な……』

通信機から断末魔が流れ、その度<sup>たび</sup>に味方の航空機が墜ちていく。

シルバーは唇を強く噛み、

「な、何故だ……。何故勝てない、奴らは蛮族であろう!! 我が国の航空機より性能が高

いはずが——っ!!」

敵機の狙いがこちらを向いた。

二十ミリの銃身が、寸分違<sup>たが</sup>わず照準を合わせる。

「ち、くしょっ、畜生!!」

振り払おうとするが、敵機の性能の方が高い。

もはや、パイロットの技量次第でどうにかなるレベルではない。死期を悟ったシルバー。

せめて一機だけでも落とすと、相打ち覚悟の特攻を始め――

いや。

いいや!!

轟ッッッ!!!! と。

一機の航空機がシルバーの隣を通り過ぎた。

彼の機体も大きく揺さぶられ、危うく墜落しそうになる。

「ツツツッ!!!!」 なに、が……」

件の航空機は速すぎて見失ってしまった。

搜索のために周囲に視線を走らせると、多数の航空機が墜ちていくのが見える。

そして、その中央に存在しているのが――

否。

顕現。

そう表現する方が適切だろう。

音速を涼しい顔で超越し、戦場を縦横無尽に駆け巡る理不尽。

H s C Z—52。

全領域制空戦闘機とも呼ばれるそれは、他の追隨を許さない速度を誇っている。

高機動ユニットを接続した際の最高速度は、マツハ十一。

今回の戦闘では接続されていないが、この場に存在している戦闘機の中では群を抜いて速い。

そんな怪物がグラ・バルカス帝国軍に襲い掛かったのだ。

『ふ、ふざけんよ、何だよこれ!!』

『待て、追尾式のロケット弾だと?! 話に聞いていなごぶあ』

『ジアン!! くそ、馬鹿げていやがる……ありえんぞ、こんなことつ!!』

グラ・バルカス帝国軍の編隊は数十秒で瓦解した。

前提として速度が段違いなのだ。攻撃を掠らせることすら出来ない。

キルレシオは測定不能。当然だ。帝国軍は学園都市の航空機を、一機たりとも墜とせていないのだから。

『つ、速すぎる!! 音速なんてもんじゃねえぞ、コイツは!!?!』

直面するのは二十倍の速度差。

それは絶対的な壁となって、帝国軍に襲い掛かった。

5

## 戦艦H s B B Y—01 第一艦橋

『こちらアルファ1。敵戦闘機の全滅を確認した。続けて、爆撃機の掃討に移る』  
通信機から男の声が響く。

レーダーを見てみると、ゆっくりと近づいてくる集団の中を、なめるように高速移動する光点が確認できた。

「あと六分で対空砲の射程に入ります」

「……射程に入り次第、帰投命令を出せ。残りはこちらで片付ける」  
「了解しました」

今回の目的は、世界に学園都市の強さを示すことだ。

そのため、戦闘機の性能を見せつけるだけで終わってしまうのは少し不味い。

この世界では未だ、航空機では戦艦を沈めることが出来ない、という考えが主流だからだ。

いくら航空戦力が優れていることをアピールしても、戦艦には敵わないと一蹴されるのがオチだ。国益を得るには、戦艦の力も見せつける必要がある。

「敵編隊の損耗率、七十%を切りました。撤退の気配は見えませんか」

「射程まで残り何分だ？」

「……二分です。帰投命令を出しましょうか？」

「いいや、百機ほど残ってれば構わない。力を誇示するには十分だ」  
レーダーの画面から着々と光点が減っていく。

それが最初の半分ほどになる頃に、レーダー主が叫んだ。

「対空砲、射程に入ります!!」

それを聞いて艦長は、ふうと一息ついた。

既に方針は固まっている。

後は命令を下すだけだ。

「撃ち方始め!」

「てえー!!」

6

直後。

異世界の大空に、赤い火花が飛散した。



## 第二十九話 科学の都市の大戦艦 E s c a p e | f r

o m : : : :

1

ゴウンツツツ!! と。

超音速機が大気を切り裂き、引き返していく。

『敵飛行機械、撤退していきませす!!』

「くそ、小癪な……たった一機で我が国の最新鋭機をこうも簡単にあしらうとは」

『ですが、弾薬切れ……でしうか? 何にせよ、今がチャンスです!』

「ああ、分かっている。全機、最高速度で敵艦へ突っ込め!! 帝国魂を見せてやれ!!」

『了解!!』

残存部隊は百二〇機。

およそ半数近くの仲間が散っていったが、ここで引くわけにはいかない。

彼らの死を無駄には出来ない上に、これは皇帝が望まれた戦争なのだ。

必ず勝利する必要がある。

「総員、私に続けええええ!!」

『おおおおおおお!!!!』

標的は既に通達している。

敵艦隊の中で最も異彩を放っている戦艦だ。

GA級にも酷似している件の戦艦は、船速が非常に遅い。

そのため、航空機の良的になると踏んでいたのだが……。

「っ? 他の船団と並走している? 艦隊運動できる程の速度は持ち得ていない筈じゃ

……」

『どうしますか? 対空兵装も確認できませんが……』

「続行だ。いずれにせよ、GA級より遅い。命中精度は高——っ、おいおいおい!! 待て

待て何が起きて……ッ!!!!」

隊長の叫び声を聞いた隊員は皆、件の戦艦の方を向いて絶句した。

どつつつガッツツ!!!! と。

海水が大きく舞い上がり、学園都市の戦艦が異常な加速をする。

『ば、馬鹿野郎!!』

『隊長!! 何が起きて、あれは一体何ですかっ!!』

『我が国の戦艦の倍は出ているぞ!! くそ、何がどうなって……』  
通信機からは混乱の叫びが聞こえる。

それもそのはずだ。

学園都市の戦艦、H s B B Y—01の巡航速度は60ノット。

最高速度で言うならば、80ノットを超えている。

既存の艦艇の三倍近くの速度が出ているのだ。その衝撃は計り知れない。

「気を取り直せ!! 全機、爆撃用意!! いくら速かろうが、我々の総攻撃を受ければひとたまりもないだろう。奴らは所詮<sup>しよせん</sup>装甲を犠牲にして、速力を得ているだけだ!!」

隊長が声を張り上げる。

それを聞いた隊員は自信を取り戻し、

いや。

いや!!

ズバチユツツ!!?! と。

視界の半分が赤く染まった。機内を見渡すと、穴あきの大空が見える。

そして。

爆ぜた。何が? 絶対無敵と呼ばれた、グラ・バルカス帝国の隊長機がだ。

『たい、ちよう……？ 隊長!!?! くそ、何があ、うごこふ』

『逃げろ、あれは駄目だ!! 命中率が違いすぎる!!?!』

『バーンズ!! ち、く、しようつ!!』

残された隊員から悲鳴が漏れる。

しかし、救いは訪れない。

この戦場にはヒーローが存在しないのだから。

もつとも、彼らが救う存在は『庇護対象』に限られるのだが。

## 2

波紋は海上にも広がっていた。

「これが、学園都市の実力とでも言う、のか……？」

赤い光線が放たれるたびに、敵の航空機が次々と墜落していく。

敵が密集していたこともあり、全滅までに一分も掛からなかった。

圧倒。

まさにその一言だった。

「ちよつと、流石に信じられませんか……」

「……我々は夢でも見ているのか？」

こんなこと、神聖ミリシアル帝国でも不可能だ。

アニユンリール大使の『魔法帝国の尖兵』という言葉もあながち間違いないらしい。

それでもなければ有り得ない。

とは言え学園都市は完全な科学文明なので、その可能性は極めて低いだろが。

「……っ、……海峡に……。……戦艦が……」

「っ？ ……艦長!!」

部下の声掛けで正気に戻る。

危ない。完全に吞まれていた。艦長としての責務を果たさなければ。

「どうした？ 何があつた？」

「フオーク海峡にグラ・バルカス帝国の戦艦が現れました!! 我々を閉じ込めるつもり

です!!」

「何だと!! 砲撃戦の用意をしろ！」

「了解、砲撃戦用意!!」

双方の距離は三十キロメートル。

射程までは遠いが、準備をするに越したことはない。

「砲撃戦用意、終わ

どつつつガッツ!!!! と。

学園都市戦艦の主砲から、青白い光線が放たれる。

それは束を成してグラ・バルカス帝国の戦艦に、二番艦のハイパーシユプリカムの正面装甲にぶち当たり——。

——まっ直ぐに突き抜けた。

「……………、は？」

一条の閃光が戦艦を串刺しにし、通り過ぎたのだ。それも正面から、後方にかけて。呆然とした。しかし、即座に引き戻される。

誘爆。

ただでさえ満身創痍な戦艦に、追加の一撃が与えられたのだ。

当然耐え切れず、船は十数秒で沈んでいく。あれでは中のクルーは全滅だろう。


「うそ、だろ……？　一撃で……？」

艦長の呟きに答える者はいない。

誰もが現実を受け入れられず、ただ立ち尽くしているだけだった。

## 3

グラ・バルカス帝国軍の混乱は、他国の比ではなかった。

「ツツツ！！！！」 何が、何が起きて！！！！」

先程まで、その威容を見せつけながら進撃していた同型艦が、突然爆発し、轟沈したのだ。

船体には巨大な穴が開いている。そこから浸水したのは明白だ。

しかし、塞ぎようがない。一目でそう思えるほどに、巨大な穴であった。

「……馬鹿な、有り得ない！！！！」

「嘘、だろ……、だって……」

一撃必殺。

これまで数々の敵船を沈めてきたが、文字通りのそれには出会ったことが無かった。

第一射はそう当たるものではない。

「なつ、え？ どういう……は？」

「か、艦長!! 指示を下さい!!!」

「待てよおい、貫通？ 有り得ないだろうがよオ!!」

艦橋は騒然とする。

しかし、混乱の渦に巻き込まれているのは艦長も同じだ。

しばらくは場を鎮めることは出来なかった、が。

「て、撤退しろおおお!!!! 取舵一杯!!!」

「りよ、了解!!!」

幸いにも奴らの船速は遅い、逃げられるはずだ。

自分にそう言い聞かせ、精神を落ち着かせる艦長。

（あの戦艦は我が方の半分ほどの速度だった!! だが、あの主砲を撃ち込まれたら……

いや、あれだけの規模だ。再装填には時間が

否。

二条の閃光が。

艦橋の左右を通過し、レーダーだけを正確に破壊した。

「つ、な……ツツツ!!!」

恐らく偶然ではない。遊ばれているのだ。



現に、第三射で艦後方のカタパルトを狙撃されたのだから。

「機関最大!!!! 射程範囲外まで逃げろ!!!!」

「これが限界です!! これ以上は無理ですよ!!」

もはや、なりふり構っていられなかった。

プライドがなんだ。名誉がなんだ。

ここを乗り越えなければ話にすらならない。

だが、気付いていなかった。通信が妨害されていなければ、伝わっていた筈の報告とある航空隊が命と引き換えに掴んだ情報を、彼らは知らなかったのだ。

ツツツドン!!!! と。

学園都市の戦艦が荒波を切り裂き、急激に加速する。

「……はっ」

空気が漏れるような声を出したのは、果たして誰だったのか。

いや、チェックメイトを決められた今では関係がないのだろう。

難易度はルナティック。

さて、盛り上がってまいりましたよ。

4

『理解したか？ 貴艦の主砲では我が艦の装甲を貫くことは出来ない。繰り返すぞ。降伏しろ』

「撃てえええええええええ!!!!!! 撃ち続けろおおおお!!!!」

帝国最大の艦砲である、四六センチ砲。遍あまねく敵を踏みつぶし、海の藻屑にしてきた伝説的な大砲。

それが一切通用しないのだ。

とても現実の光景には見えなかった。

「……なん、だ？ 俺達は今、何を相手に戦っているんだ……う？」

「うそ……、沈めよ!! 沈めつつ!! 頼むから沈めよオ!!!!」

かれこれ十分間も、至近距離から砲撃を行っている。

なのに。

なのに!!

敵艦の喫水部を照準する。

——弾かれる。

敵主砲の砲身を狙い撃つ。

——弾かれる。

敵の艦橋に砲身を向ける。

——弾かれる。

敵艦との距離は狂気の十メートル。

しかし。

弾かれ、防がれ、静止し、誤爆し、吸収し、受け止め、跳ね返り、滑り落ち、撃ち落される。

とても戦闘とは言えなかった。

「くそ、畜生……。傷一つ付かないのかよ……」

「艦長!! 降伏しましょう! これ以上は無理です!! 空母機動艦隊との通信も途絶え

ましたし……」

「……………」

「艦長!!!」

「分かっている!! くそ……………、降伏の旗を掲げろ……」

「は、はい!」

「……………ちくしょう、学園都市め……」

こうしてフオーク海峡海戦は終結した。

意地とプライドを土台ごとへし折られた三千人の捕虜と、自失状態に陥ったシエリアを残して。

# 第三十話 脅威、もしくはは唯一の希望 Flamboy

a n t | G l i t t e r

1

## 第二文明圏 列強国 ムー

首都に存在する重厚な建物、海軍本部において、軍の主要幹部が集まる中、海戦の報告が行われようとしていた。

この会議には、軍の主要幹部の他、外務省幹部、技術士士官のマイラス、そして戦闘を直近で見たムーの誇る戦艦ラ・カサミの副艦長シットラスも参加している。

詳細な戦闘報告書の提出は後日されるとして、まず当事者からの生の意見を聞く事と、今後の大まかな方針決定のために会議は開催される。

「それでは、これより緊急会議を開催します」

司会の宣言で、会議が進行する。

「概要を説明します。先日、神聖ミリシアル帝国の港町カルトアルパスにおいて、先進十カ国会議が開催されました。我が国は、戦艦ラ・カサミを旗艦とする空母機動部隊を

外務大臣の護衛として派遣いたしました。同会議において、グラ・バルカス帝国は全世界に対して従属を求めるといふ、歴史上始まって以来の暴挙に出ます。そればかりではなく、各国大臣がいる港街カルトアルパスに対し、攻撃を行いました」

通常時であれば対処できた筈ですが、と付け加え、

「虚を突かれた神聖ミリシアル帝国は、巡洋艦八隻からなる艦隊と、航空機による攻撃しか戦力を集める事は出来ず、主力としては各国の外務省護衛艦隊計五十三隻と神聖ミリシアル帝国の艦隊を加えた総計六十一隻もの艦隊で対応にあたりました」

あまりの大戦力に、会議室がざわつく。

しかし、彼の役目は終わっていない。

「結果、グラ・バルカス帝国軍の撃滅に成功。三千人もの捕虜を確保できました。対する連合軍の損害は、神聖ミリシアル帝国の天の箱舟が数機ほどで、非常に軽微です。完勝とも呼べる戦果ですが、今回の議題はそこではありません」

彼は、数秒の時間をおいて告げた。

「この海戦に多大な貢献をした——いえ、全ての戦果を挙げた、学園都市についてです」先ほどの騒めきとは比べ物にならなかった。

単艦で多国籍軍と同等の戦果を叩き出すことは、それだけの異常事態ということだ。

「……簡易報告書は読んだが、本当に事実なのかね？ 流星に信じられないのだが」

「恐らく事実です。詳細に関してはシットラスからの報告がございましたので、そちらでお聞きください」

目線で合図され、戦艦ラ・カサミの副艦長、シットラスが壇上に上がる。

「副艦長のシットラスです。これより、戦場の状況についてお話しようと思います。グラ・バルカス帝国の航空機の接近を探知した我々は、すぐに艦上戦闘機マリンを発艦させました。しかし、学園都市の航空機は、我が国の航空隊を軽々と追い抜き、グラ・バルカス帝国軍と交戦しました」

「な、そこまで差があるというのか!!」

「我が国の最新鋭機だぞ! そんなにあっさり追い抜かれるとは……ッ!!」

会議室に大声が響くが、司会がそれを治める。

「彼らの航空機は最低でも、音速の数倍は出ていたと推察されます。また、その旋回能力も恐るべきものがあり、我が国のそれとは比べ物になりません。ですが、何より異常なのは、その戦闘能力です」

「……確かに、それだけの速度があれば、制空戦闘は遥かに優位になるが……」

「ええ、キルレシオが異常なのです。敵航空機は二百機にも及ぶ大編隊でした。しかし、それに立ち向かったのは一機、たった一機だけなのです」

「……一機だと? 何を馬鹿なことを。いくら性能が良くても、なぶり殺しに遭うだけ

だろう！」

「いえ、件の戦闘機は無事に帰艦しました。それも、敵航空機の数を半分に減らした上で、です」

会議に出席していた重鎮が、そろって絶句した。

そして、音の洪水が発生した。

「そんな、まさか!!」

「ありえない!! 一から調べなおせ!」

「流石にそれは、無理のある話ではないでしょうか……?」

当然の反応だ、とシットラスは考える。

直接見ていた自分でも、目の前の光景が信じられなかったのだ。見ていない者にとつては猶更だろう。

「生憎と、これは事実です。敵航空機の性能が不明のため、確実にとは言えませんが……少なくとも、我が国の戦闘機では相手にならないでしょう」

「つ……」

「制空戦闘における報告は以上です。続いて、戦艦に関する情報をお伝えいたします」

小さく咳払いをして、息を整える。

「まず、対空性能についてですが……彼らは単艦で、残存部隊を全て撃墜しました。半減



したとは言え、百二十機ほどの爆撃機が残っていた筈なのに……あの戦艦は、それを一分も経たないうちに全滅させました」

「対空砲の命中率はどうかだったのだね？」

「最低でも、九十パーセントは超えているかと。そのうえ、未確認情報ですが、対空用の誘導ロケット弾も装備しているようで……」

「……ふむ。なるほど、続けたまえ」

平静を装っているようだが、少し声が震えていた。

額に滴る冷や汗を見なかったことにして、シットラス続ける。

「ですが、なにより異常なのはその主砲です」

今でも信じられないのですが、と肩をすくめて、

「……敵の戦艦を一撃で沈めたのです。それも、誤差の修正ができない第一射で」

「なっ、初弾から命中させたのか!？」

「そのうえ、火力も異常でした。敵の戦艦の正面装甲に命中したかと思えば、直後、艦後部から飛び出してきたのですから」

「……それは、貫通したということか」

「ええ、恐らく実弾ではありません。魔力の反応はなかったようですが……」

「そこは後回しだ、兵器開発部の回答を待とう。報告は以上かね？」

「はい。以上で報告を終了いたします」

緊張の緩和からか、小さく息を吐き、元の席に戻るシットラス。

それを見届けてから議論は再開する。

そして、最終的に議会は、『学園都市と敵対しないように、外交的努力をしていくべきだ』という結論に至った。

## 第三十一話 科学の英知が組み上げたモノ Welco

m e | t o | G B | E m p i r e

1

所変わってグラ・バルカス帝国。

帝都ラグナの軍本部の会議室に幹部が集結し、重大な会議が行われようとしていた。会議には、帝国の三将とも言われる、

帝都防衛隊長 イジス

帝国海軍東方艦隊司令長官 カイザル

帝国監査軍司令 ミレケネス

も参加していた。

特にカイザルにあつては帝国の軍神とも言われ、彼の一言一言に軍部が注目するほどの影響力を持っている。

立案した作戦の九割を成功させ、帝国を勝利に導いてきたエリートであるがしかし、この場における彼の表情は暗い。

理由は簡潔であつた。

「これより、東部方面艦隊通信途絶事件に関する意思決定会議を執り行います」  
事の発端は、カルトアスパルへ派遣した艦隊からの定時連絡が途絶えたところにある。

「前回の会議でも説明しましたが、作戦開始予定日以降、戦艦グレートアトラスター、及び空母ペガススからの入電が一切ありません。装置が故障した可能性が高い、との見解でしたが、一週間が経過した現在でも無人島基地への寄港は確認されていません」

若手の幹部が読み上げる報告書の内容に、三将の顔がそれぞれ歪む。

通信装置が故障しただけなら、付近の秘密基地に舵を取り、修理と報告を済ませればいい話だ。しかし、一週間も音沙汰がないとすれば、考えられる可能性は二つに絞られる。

機関に異常が発生し、航行不能に陥ったかもしくは――

「――派遣部隊が全滅した可能性があります」

「むう……」

会議場に緊張が走り、静まり返る。一隻でも過剰戦力ともいえるGA級戦艦を――そ

れも、最新鋭空母の支援を付けたうえで——二隻も派遣したのだ。

それが撃破されたとなると、非常に不味いことになる。

「だが、考えにくい話ではないかね？　そもそも学園都市以外の軍艦の戦闘力は、わが軍の前では無いに等しいというのに。それこそ、学園都市の戦艦の性能が想定より数段階高かった——などということがない限りは、ありえないことであろう？」

「……イジス殿。その最悪の想定が的中している可能性もあるのですよ。ここは慎重に事を進めるべきなのでは？」

「だが、かの兵器研究部が言うには、敵戦艦の性能はG A級戦艦と同等であるらしいじゃないか。そのために態々金食い虫のG A級戦艦を三隻も建造したというのに……」

「その件に関しても、派遣しているスパイからの情報を待ちましょう。時期的には、そろそろ何らかの情報が入ってもおかしくない頃ですが……」

ミレケネスがそう呟いた直後のことであつた。

不意に、会議室の扉から激しいノック音が鳴り響いたのは。

「やかましいぞ!!　何事か?!!」

「緊急事態です!!　至急、幹部の方々のお耳に入れたいことが!」

その並々ならぬ様子から、ただ事ではないと判断した幹部連は、その伝令の入室を許可した。

もしかすると、派遣艦隊が敗北したのかもしれない——とカイザルは考えたが、その予想は大きく外れることになった。

それも、グラ・バルカス帝国にとつてさらに悪い方向へ。

息を切らした衛兵が告げる。

「レイフォルが……レイフォル地区が——ツツツ!!!!」

2

時間はおよそ数時間遡る。

「機長、あと十分ほどで目標地点に到達いたします」

学園都市の、超音速輸送機内での会話であった。

「うむ。……六枚羽の投下準備を始めろ！ 地殻破断で敵軍基地を壊滅させた後に出撃させる。最終チェックを怠るな!!」

「はっ、了解しました！」

「駆動鎧部隊は、六枚羽が逃した残党の殲滅にあたれ！ ただし、降伏の意思が見られる場合は別だ。新世界での国際法に則って、人として正しい判断を下すように」

現在、超音速機の編隊は列を成して並走している。

前方には護衛と対艦・対地攻撃を兼任する戦闘爆撃機、H s F B—17が。中央から後方にかけては、『前線基地』や補給物資、攻撃部隊などを輸送するH s T—09が、それぞれ陣取っていた。

旧世界の中堅国であつても、この編隊が通り過ぎるだけで滅亡してしまうだろう。それほどまでの圧倒的な戦力が集結していた。

「さて、貴様らはどれ程持ちこたえられるかな？ グラ・バルカス帝国よ？」

3

「おい、アニル。グレートアトラスター発見の報はまだ来ていないのか？」

「……残念ながら。とは言え、陸の我々にできることはありません。海軍からの連絡を待つしか……」

ここは旧レイフォル第三駐屯地。現在ではグラ・バルカス帝国の前線基地となつている場所である。

配備されていた兵器・施設もすべて機械式に取り替えられ、全体の印象は大きく変わっている。

「それもそうだな。だが、なぜ連絡がないのだ？ 事故でも発生したのか……？」

「海軍本部によりますと、通信機の故障である可能性が高いとのことですが……」  
「はあ？ 一週間も音沙汰不明なのぞぞ？」

帝国陸軍の将軍を務めるシキが、海軍の楽天主義に呆れたような声を出す。

派遣艦隊が全滅していると言うつもりはないが、それにしても樂觀視がすぎるのではないか？

対して副官のアニルは、ズレた丸眼鏡をかけ直しながら、

「ええ、これは少し古い情報です。現在の方針は不明ですが、恐らく海軍のほうも陸将と同じ結論に至っているかと……」

「そうか。……動きがあり次第、報告してくれ」

「はい、心得ております」

陸軍式の敬礼を取るアニルを尻目に、帝国の将軍はぼそりと呟いた。

「だが、方が一グレートアトラスターが沈められたとなると——」

「レーダーに感ありッ!!」

不意に。

指令室内に叫び声が響いた。

「なんだと!!」



「空襲か！ どこからだ？」

全員が作業を中断して、声が出た方向へ振り向く。

その報告が事実なら、ここまで敵軍が進行しているということになる。それは即ち、派遣艦隊が敗北したことを意味していた。

緊迫した表情で機材に張り付き、そのデータを読み上げる。

「北東方面からです！ 数は二十四機、いずれも小型機で……っ？ 速度が——  
「伏せるオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

幹部の一人が大声を張り上げる。

軍事リーダーとは無縁の彼がそんな叫びを放った理由は簡単だ。

ガラス越しの空から、超大型機が飛来するのを直視した。

たったそれだけのことである、が。

目標との距離は既に、目視が可能なまでに縮まっている。

それは、すなわち——

4

ガカアツツツ！！！！と。

幾筋もの閃光が、すべての軍事施設を薙ぎ払った。

5

「がつ、ぐあ……」

陸将のシキが痛む頭を押さえながら、うめき声をあげた。

辺りには土煙が立ち込めており、まともな視界が確保できない。

「だ、れか、無事な者はいるか……？ 状況を、説明しろ……」

アニル、と呟こうとしたところで、口を閉ざした。

目の前に血だまりが広がっていたからだ。

「なっ……」

恐らく崩落した天井に、押しつぶされたのだろう。

瓦礫の中から右腕だけが生々しく露出しているのみで、他のすべては瓦礫の下に埋も

れている。

そして。

生暖かい風が吹き、土煙が晴れる。

そこに。

あつたのは。

衝撃でフレームが大きく歪み、ひび割れた丸眼鏡。

「つ、アニル……。お前、なのか……。？」

しかし、悲しみに暮れている時間はなかった。

空気を激しくたたきつけるような音が、上空から響いたのだ。

將軍は先ほど爆撃を警戒したが、どうやら様子が異なる。

辛うじて残っていた壁の陰に隠れながら、空を見上げて、

「つ、な、あ……。っ！」

一面に何かが広がっていた。

それも、十や二十といった数ではない。

その正体は。

「空挺部隊?! くそ、不味い!!!」

そのうえ、どこから現れたのかは知らないが、回転翼機らしきモノまである。

遠くには巨大なカマキリ? のような存在も確認できる。あの辺りにはたしか、戦車の

の格納庫があつたはずだ。恐らくそこも同様に襲撃を受けているのだろう。

到底、援軍など期待できなかつた。

「ち、くしょうが!!!」

あるいは、今まで強大な軍事力を持つ魔術サイドに単騎で対抗できていたのは、量産性に富む科学兵器の性質によるものなのかもしれない。

## 第三十二話 無慈悲なる科学の尖兵 Over the

## Checkmate.

1

「総員、戦闘用意!!」 急げ、奴らが降りてくる前に出撃しろ!!」

半壊した戦車格納庫内に怒声が飛び交う。

奇跡的に無事だった戦車を幾つか引つ張り出し、敵の襲撃に備える。

数は十にも満たないが、いずれも最新式の戦車であった。あらゆる敵を葬り、荒野を平らに均した最強の相棒であったはずだ。

なのに。

今は心なしか頼りなく見えた。長年連れ添った相棒のことを信用できなくなっていたのだ。

原因ならわかっている。先ほどの大規模爆撃によるものだ。

一体どれほどの密度で爆弾を投下すれば、破壊痕が線状になるのだろうか。

こんなものは人間技ではない。ならば我々は、何と戦っているというのだ……?」

各々が絶望に浸る中、一つの叫び声が格納庫に反響した。

「敵は恐らく学園都市だ!! 見たところ、爆撃機に関しては帝国以上の性能を誇るようだが……それがどうした!!」 我々は百戦錬磨の帝国陸軍だぞ! 性能差など気合で埋めろ、貴様らにはそれだけの潜在能力がある!!」

どうやら、この場で最高位の軍人が士気を高めるために演説をしていたようだ。

だが、そんなもの根性論で士気を回復させられると本気で思っているのだろうか。だとしたら滑稽だと言いがたない。

敵は人知を超えた化け物だ。いまさら抵抗しても敵うはずが——

「そして何よりも……敵の戦車らしきものは、空から降下してきている!! つまり、落下の衝撃を減らすために、軽量化が施されているはずだ!!」 そのうえ、着陸時の衝撃に耐えるために、底部の装甲を強固にする必要もある!!」

全員が全員、ピクリと表情を動かした。

突然、訳も分かんないような爆撃を受け、士気が壊滅した戦車部隊。

その中には、地面に蹲うずくまつて震えている者もいたのだが……。

「すなわち!!」 敵戦車の正面装甲は、我が軍のそれよりも薄い!! 空爆に関してもそううだ!! あれはただ単に無数の爆弾を撒いているだけで、爆弾そのものの質はそう変わらないはずだ!!」

宿る。

暗く色褪せた彼らの瞳の中に、正気が再び宿る。

「奴らは所詮、足りないものを数で補っているに過ぎない!!!! 爆弾の威力も！ 戦車の火力も！ 単体では有象無象にしかないのだ!!」

ここぞとばかりに指揮官が追い打ちを仕掛けた。

ただ諦めて死を待っただけの人間は、この場にはもういない。

旧世界で栄華を極めたグラ・バルカス帝国軍。その、再始動の時が来た。

「そもそも、なぜ奴らがここまで周到的に爆撃を仕掛けたか分かるか？ ……恐れていたからだ！ 我が軍の戦車の攻撃力を恐れていたからこそ、高価な爆弾を大量に使用し、破壊したのだ!!」

「……そうか、その通りだ」

「そうだ！ 普通に考えれば採算が合わない……。が、奴らはそれを実行した！ そうでもないかと勝てないからだ!! 奴らの貧弱な戦車だけでは、勝つことができないからだ!!!!」

「……勝てるのか？ 俺たちは、学園都市に……ッ!!」

「幸いにも、精鋭の第一戦車隊は近場で演習を行っており、空爆には巻き込まれていない!! ならば、我々がすべきことは簡単だ。第一戦車隊の到着まで敵軍の注意を惹き、足

止めをするだけでいい！ 敵戦車は三十両も降下してきている！ しかし、援軍が到着すれば、数の優位はこちらに移る!!」

場の空気が明白に動き、一転する。

恐れるな、決して勝てない相手ではない。相手は神などという化け物ではないのだから。

そして、死地へと誘う煽動者は告げた。

「選べ!!」ここで何もせぬまま、ただ殺されるか！ それとも敵戦車を足止めし、勝利のための礎になるか!!!!」

地に伏せていた人間が皆、ゆらりと立ち上がる。

「っ、俺は……」

「やるぞ、お前ら。うじうじせず<sup>いせ</sup>に力を貸せ！」

「……はあ。一応言っておくけど、僕は整備課なんだけどね？」

「何でもいい、こいつを動かせるのならな。大半の連中は先の空爆でやられちゃった。少しでも人手が必要だ」

「まったく、仕方がないな。……僕は何をすればいい？」

「助かるぜ、相棒。ならアンタには——」

誰もが思った。



あの悪魔に打ち勝つことができるのだと。

私たちが死ぬ必要はどこにもないのだと。

「全部隊、発進準備を完了しました！ いつでも行けます!!」

「総員！ 出撃イイイイイイイイイイ!!!!!!」

そう、誰もが思っていた。

2

地上までの距離、規定値に達しました。

これより背部移動補助装置を起動し、減速を開始します。

……起動完了。安全降下速度まで残り八秒です。

8、……5、4、3、2、1。

……安全降下速度までの減速を確認。続いて、標的の走査へ移ります。

赤外線レーダー起動……完了。地表の走査を開始します。

スキャン開始……。……中断。

同型機、シリアルナンバー七八〇四より、標的の情報を取得。

脅威度判定に移ります。

エリアW南西部、五十両の中戦車部隊を確認。……脅威度極低。

エリアU3地点、八両の軽戦車を確認。……脅威度ゼロ。

……電子演算の結果、勝率は共に九九%と推測されました。

続いて、装填装置、電磁加速機構部、冷却システムを起動します。

………?

……。

(警告。冷却システムに軽度のエラーを確認しました。稼働データの詳細はこちら)

……主兵装、Gatling | Railgunの起動が完了しました。

作戦続行に支障なし。任務を遂行します。

3

排気ガスの臭いが薄く充満する車内に、上官からの指令の音が響いていた。

『砲撃用意！ 合図と同時に撃て!! 一斉にだ!!』

『「了解!!」』

すでに、大砲の照準は予想降下地点に合わせている。

第一射で致命傷を与えて、撃破するのが最善だろうが……そう簡単には進まないだろ

う。

敵も馬鹿ではないのだ。何らかの対策を施してあってもおかしくない。

搭乗員のネイトは、震える指先を押しさえつながら念じた。

(大丈夫だ……敵の装甲は紙よりも薄い。そう、僕たちはただ当たるだけでいい)

衝撃軽減のための軽量化などで、敵の戦車の装甲はかなり薄くなっている筈だ。

それこそ、軽戦車の砲撃で突破できてしまうほどに。

数の優位は向こうにあるが、性能では決して負けていない。さらに、こちらには援軍も付いているのだ。負ける要素が見当たらない。

勝利の兆しを感じ取ったネイトは自然に表情を緩めてしまったが、再びそれを引き締める羽目になった。

『来るぞ!! あと七秒……』

「っ!!」

味方からの通信が入ったのだ。

(……絶対に、僕だったら勝てる。いや、僕たちなら勝てる……ッ!!)

あと数秒で戦闘が開始される。余計なことを考えていれば確実に死ぬ。

ネイトは思考を中断し、意識を目の前の操縦桿に移した。

『三秒、一秒……』



## 第三十三話 破砕 Break a Right a n

## d Hope

1

鮮血。

直後に視界が真っ赤に染まった。

しかし、それは爆散した隊員の血液によるものではない。

ゴガツツツ！！！！と。

随伴していた七両の軽戦車の弾薬庫が、一斉に爆発した。

一撃でも戦車を縦に三台貫くガトリンググレールガン。

当然、隊長が搭乗していた戦車も例外ではなかった。

「ツツツツ！！！！」

無残に引き裂かれる隊長車。その瞬間を覗視窓から目撃してしまった隊員は、声にならざる悲鳴を上げる。

他の車両は一瞬で消し飛んだ。戦車の形が残っているのは、この一両だけだろう。

とは言うものの、一切の被害を免れた訳ではない。

ギチギチギチツと唸りを上げる天井部を見上げると、一面の青空が広がっていた。

皮肉なまでに青く透き通った空。そして後方に流れ過ぎる、砲身の残骸と結合した血肉の塊。

かつては副隊長として名を馳せていた惨めな残片が、ついには炭化してこの世から消え去った。

理不尽。などではもはや形容できない。

そんな言葉で済む段階はとうに超過している。

「ぼっ、か、げて……」

運良く操縦席への直撃は無かった。

なのに身体は動かない。首から下が別の生き物になったかのように、ピクリとも動かない。

それほどまでに精神に受けたダメージは大きかった、と言い換えても良いだろう。

だから地獄を見た。

弾薬庫を逸れて弾が貫通したことを、後から恨むほどの地獄を。

「……………」

微かに音が聞こえる。

身体に深く染み付いた、行軍の象徴のような音が。

詳細に言えば、

戦車が進軍する際に発生する、無限軌道特有の――

「つ……待て!! ダメだ、今すぐ引き返せ!!!!」

反射的に叫んだ声は当然届かない。

高らかに、そして無慈悲に。行軍は進んでいる。

何か方法はないのか。

これから起こる殺戮を止められる最良の手段は、それとも何処にもないのか。

「……………」

敵部隊に呼び掛けて、戦闘を中止してもらおう?

――その前に殺されるだろう。

――仮に伝わっても、わざわざ敵のために撃たれてやるとは考えられない。

砲撃が外れるように神に祈りを捧げる?

――あの密度では無理だろう。

――ほんの少し掠めただけでもこの威力だ。相当な強運を持っていなければ、確実に

死亡する。

「ちくしよ、何か……何かないのか」

幸いにも敵戦車は動いていない。

砲身を冷却しているのか、それとも気づいていないのか。なんにせよ、これが最後のチャンスだ。

「何か、一つでいい……。彼らを助ける方法があれば……」

可能な限り高速で思考を回転させる。

第一戦車隊には、同期の仲間も所属しているのだ。見捨てるなんて選択肢は、初めから存在しなかった。

何としてでもこの脅威を彼らに伝えなければ、大勢の仲間が殺害される。

生命の価値を否定するかのようになり、意味をなさない肉塊にされてしまう。

「伝えなければ？ ……待てよ、そうか、その手があつた！」

むしろ単純すぎて、喜びより先に呆れの感情が来た。

（はは、何を間抜けなことをしていたんだ俺は。声が届かないのなら通信機を使えば良いだけだと言うのに、なぜ今まで気づかなかつた？）

グラバルカス帝国は、文明圏外国なんて骨董品では断じて無い。通信手段はとうの昔に確立している。

それなのに何故、

（いや、今は理由を考えている暇なんて無い。情報の伝達を優先しなければ）

彼は無心で機材の調節を行った。



一分でも早く、一秒でも早く。

奴らが動き出す前に終わらせる一心で、調節を続ける。

そのためか、

「こちら臨時防衛小隊、副隊長車！ 作戦は失敗した!! 我が隊は一両を残して全滅。その車両も砲身を吹き飛ばされている！ これ以上の戦闘継続は不可能!!」

何とか、間に合わせる事ができた。

後はすべてを伝えるだけだ。

「敵戦車の火力は想像を絶する威力だった！ まるで機関銃のように、大量の砲弾を撃ち込んで来やがる!! とても勝てない!! 俺が生き残れたのも運が良かったからだ!!」

軍規通りの形式的な通信をする余裕などなく、言葉尻は大いに乱れた、が。

だからどうした。

必ずこの情報を伝えなければならないのだ。

しかし、応答はない。

一笑にされたか？ 馬鹿なことを。

「これは事実無根の言葉遊びではない!! 現に我々は全滅、生存者は俺以外残っていない!! なあ頼むよ、降伏してくれ! あいつらは化け物だ、俺たちの戦車じゃ相手にならない、正真正銘の化物だ!! 薄っぺらい意地張ってないで、早く降伏しろ

よおおおツツツ !! !! !!」

応答はない。

もしかしたら、こちらの通信機が故障しているのか？

いや、スピーカーが故障しているだけかもしれない。

そうか。それは悪いことをした。

ならば今は白旗を掲げる準備をしているということだな？

だって、ソウジヤナイト。

「は、はは……」

安心して笑みを漏らしてしまったのと同時に、ようやく動いた。

有名な昆虫の形を模倣した、形状に合理性を見いだせない謎の戦車が、重い腰を上げたのだ。

けれど、もう遅い。

もうすぐ降伏の旗が上がるはずだ。

なぜなら、脅威は既に伝わっているのだから。

(そうだ、俺が救った。はは、あとで同期に酒を集<sup>たか</sup>ろう。それだけの活躍はしたと思うんだがなあ……)

なのに。

ガシリという不気味な音が響いた。

——もう遅い。

なのに。

死神の鎌が戦車中隊に向けられる。

——もう遅い。

なのに。

火を噴いた。

——もう、遅い？

「……………え？」

直後。

無数の火花が

視界を席捲し

味方だった

残骸が

戦車が

次々と

「……………なん、だよ……………これ」

誰も答えない。

「だって、おれは」

答える者は、いない。

「……………なのに、どうして」

この場には、彼以外の人間は存在していないのだから。

不快な虫の羽音が、徐々に近づいてくる。

恐らく生きていることがバレたのだろう。

捕虜にされるのか、それとも殺されるのか。

それでも、あんな大虐殺を平気で行える人間が捕虜を取るはずがないと、なんとなく

考えていた。

(すべてどうでもいい。もう、おしまいだ)

事実、デンマークでもバゲージシティでも、『彼ら』は一切の捕虜を取らなかつた。『彼ら』の根底にあるのは0と1。数字の羅列のみで、そこに感情というものは存在していなかつた。

理事会から下された命令はただ一つ、敵戦闘員の抹殺のみ。

『彼ら』は忠実にそれを履行する。たとえ残酷な命令であっても一切の疑問を持つことなく、ただ従うのみ。

だから、合成された女の声が響いた。

『残存する敵戦闘要員を確認。脅威度ゼロ。ただちに撃破します』

対する隊員は絶望のなか薄っすらと笑う。

「……ははっ、そうかよ」

そこにどんな意味が込められていたのかは、理解されなかつた。

しかし、装置の大半がスクラップと化した通信機を持ちながらも、彼は静かに囁いた。「だったら好きにしろ、クソ野郎が」

ガオンツツ!!!! と。

機械仕掛けの無意味な一撃が、容赦なく反響した。

## 第三十四話 仮想展望、その相違 the Dark

## Continent — "LEIFOR".

1

旧レイフォル領。

現在はグラ・バルカス帝国、レイフォル州と改名されたその地域に——いいや、その呼称すら既に過去の物になろうとしているのか——一人の軍人が足を踏み入れた。

「なんと、凄まじいな」

現場視察に来たムー国指令、ホクゴウは戦車の残骸らしきモノを見て、思わずそう呟いた。

レイフォルに駐屯していたグラ・バルカス帝国軍は、学園都市の軍隊と交戦して壊滅したらしい。

すべてを確認した訳ではないので、らしいとしか言いようがないが、彼らの実力を考える限り嘘ではないのだろう。

わざわざ再確認するまでもなく、目の前にその実力行使の結果が示されているのだから。

「俄かに、信じられません……。これほど一方的な戦いになるなんて……」

あるいは、断面が中空となっている筒状の金属塊。

あるいは、赤黒く焦げた液体が癒着している立方体のような何か。

あるいは、四方に棒切れを突出させる炭化した直方体。

一名の生存者もない絵に描いたような地獄が、視界を完全に占拠していた。

「戦車の性能も、業腹だが我々は帝国に劣っていた。一点に集中して運用する最終兵器としての戦車とは違い、帝国のそれは限りなく戦車の理想形に近づいていたのだ。……我々だけでは確実に、対処はできなかつた筈だ」

「……仰る通りです。ですが、今の私たちには心強い同郷の友がいます。そう悲観的になることは——」

「分かっている。だが、第二文明圏で起きた事変だというのに、その長であるムーが事態を座視するだけでは世界二位の大国の名が廃る。……実質的な順位は兎も角としても、な」

ホクゴウは手持ち無沙汰に煙管を弄びながら、

「ただまあ、今はアルーへの被害無く帝国を大陸から追い出せたことを素直に喜ぼうか。最悪の想定である、キールセキ防衛計画も発案せずに済みそうなことだしな」

学園都市の介入が無ければ、確実にアルーは陥落していた。



都市構造や立地などの地形の構造が、陸軍を展開するには致命的に都合が悪く、大規模な軍隊を送り込むことは不可能であることは軍の内々問わずに周知されていたのだ。

実質的に住民や防衛隊を見殺しにするという決定であるため、ホクゴウも強く反発していたのだが、他に良案が思い浮かぶ訳でもない。

そのため、決定には不承不承で従っていたのだが……。

「それにしても」

カイオスはため息を吐くように言う。

「半刻も掛けずに軍事基地を殲滅する程の大火力を持つ軍隊を、僅か半日で世界の裏側まで運び込む超音速輸送機群、か。ははっ、下手なSFでももう少しマシな性能をしているぞ、学園都市め」

自嘲的に笑うも、その目には確かな光が宿っていた。

見る人によつては寧猛とも取られる眼光を迸らせながら、壮年の最高司令は嘯く。

「だが、味方であるなら心強い。……彼らを敵に回すとどうなるか。後学の為にもしっかりと見学させてもらおうじゃないか？」

ガタンツツ!!!! と。

豪華な装飾が施された椅子が音を立てて倒れ、軍本部の会議室に静かに反響した。

「つ……、ツ……!!」

帝都防衛隊長イジスが、声にならない絶叫と共に立ち上がった際に発生した音である。

然しものカイザルもその光景を横目に見ながら冷や汗を流すが、やはり帝国一の切れる者の称号は伊達ではなかった。すぐに思考を回転させて必要な発言を行う。

「それは……事実なのだな？」

半ば諦念を含みながらも絞り出されたその問いに返されたのも、同様に平凡な答えであつた。

飛び込んできた衛兵の返答を以つて状況を再確認したカイザルは、他の三将へ向けて言い放つ。

「……極めて深刻な事態だ。ここで判断を誤れば半年も経たないうちに帝国は崩壊する。後で詳細な情報を収集する必要があるが、ひと先ずは今の報告が全て事実であることを前提とした話し合いを行うべきだと私は考える。……異論はあるかね？」

「だ、だが、あり得ないだろう!! 先の世界会議侵攻から一週間も経っていないのだぞ! その期間内に学園都市が戦力を集めて、第二文明圏のレイフォル州まで送り届け、

挙句の果てにはバルクルスを通信途絶にまで追い込んだと!! それもたったの数十分でだ! 冗談にも程が——」

「イジス、心情は痛いほど分かるが、今は彼の提案に従った方が良い。もし事実なら相当に厄介な問題だぞこれは……」

監査軍を統括するミレケネスが、熱された鉄のようになったイジスを宥めるも、状況は何ら好転していない。

早急に事を進める必要がある。

「誤報であるならそれで構わない。だが、『襲撃を受けている』という通信の直後に突如途絶。通信の内容には、空挺部隊と超高密度の爆撃、そのうえ兵器開発部門の機密事項である空挺戦車らしき存在まで確認できた」

「前線の兵士にはまだ伝えていない情報でしたか。となると、……不味いですね」

「これが集団ヒステリーで見えた幻覚であれば良かったのだが、それにしては随分と戦略性が見えてくる。空挺戦車もそうだが——特に気掛かりなのは爆撃機だ」

カイザルは一言おいて、

「常識外の速度で爆撃を行ったとされる謎の航空機。爆撃規模から超大型機と推測されるが……この技術を転用すれば、超高速で空を駆ける大型輸送機も生み出せる筈だ。少なくとも、私なら部下にそう命じるだろう」

そう仮定すればすべてが繋がるのだ。

不自然なほど素早く展開された学園都市の軍勢。

ムーに学園都市の戦力が集結したという情報は未だに入っておらず、どこから襲撃されたのかも不明。

しかし、たった一つの前提さえあれば全てが覆る。

「まさかっ、……いや、そうなるのですか……ッ!!」

「ああ、先ほどは仮定と言ったが——」

ただでさえ締まった表情をさらに引き締めて。

その決定的な一言を、告げる。

「レイフォルは既に堕ちたと見るべきだ。それも、データラメな航空機を利用した、前代未聞の強襲作戦によって……、な」

バルクルスが、ではない。

規模こそ劣るがレイフォル州には他の陸軍基地も多数点在している。海軍基地も、空軍基地も同様だ。

だから。

そこに嘖みついたのはやはり、今の今まで黙り込んでいたイジスその人であった。

「何故だ!! バルクルスが陥落するだけでも非常識だというのに、他すべての基地も同時にだど!! あり得ない、絶対に! あり得るはずがないだろうが!!」

「敵の実力は我々の想定よりも高かった。恐らくは、海上戦力においてもそうだったの  
だろう。だからこそ派遣艦隊が破れ、バルクルスも墮とされた」

「しかし——」

「お前ほどの実力者なら分かるはずだ。……いいや、心の底では本当はもう分かっている  
だろう?」

「っ」

「世界各地に高火力の打撃部隊を展開し、軍事基地を撃滅することが可能な輸送機。それでいて、並みの戦闘機では追跡することすらできない怪物的性能を誇っている……。この場の情報だけで類推してもこの有様だ。学園都市は科学で発展した国家だと聞いていたが、これが科学の領域だと? 冗談にも程がある、魔法だと説明された方がまだマシだ!」

吐き捨てるように愚痴を叫び、らしくないと考えながらもカイザルは続ける。

「あるいは、本当に魔法を取り入れている可能性もあるが……。いずれにせよ非常事態であることには変わりはない」

「そんな、な、馬鹿げた話が……」

「今では、他の帝国軍基地との交信も途絶しているのだったな。……バルクルスのように襲撃の知らせがあつた訳ではないが、報告をする時間もなく全滅した可能性も十分に考えられる」

「じ、磁気嵐がつ！ この世界には磁気嵐があるだろう!!」

「その可能性も否定できない。だが、襲撃があつたこのタイミングでだと？ 笑わせるなよイジス」

「つ……、だがつ!!」

「そこまでだ、話を進めてくれ。軍神とも呼ばれる——カイザル、貴方の結論を知りたい。この状況をどう見るのか。そして、我々軍部はどう動けば良いのか。是非とも意見をお聞かせ願いたい」

涼しい顔で収めたのはミレケネスであった。

カイザルも僅かに考え込み、顎に当てていた二本指を離す。

「この新世界で我々は、文明レベルの差という強力なアドバンテージを以って諸国を屈服させてきた。しかし今はその性能差の優位が、打って変わって我々に牙を剥いてい  
る」

「……、」

「単純に、今までの帝国と植民地の関係を再確認すれば済む話だ」  
つまり、と常勝の英雄は神託を放つ。

「場合によっては講和も——いいや最悪の場合、降伏も視野に入れる必要がある。ということだな」

誰もが反論をしなかった。

旧世界でも新世界でも栄華を誇ったグラ・バルカス帝国。その最強の軍隊には、敗北の文字など有り得ない筈であった、が。

予想される兵器の性能は荒唐無稽の一言であり、事実であれば確実に帝国は敗れ去るだろう。

だが、異常も異常。予想と言うより、妄想の産物という言葉の方が似合っている。しかし。

直後に裏付けられた。

「緊急事態です！ レイフォルに近い無人島基地から、海軍基地壊滅の報が!! 小型艇で脱出したとされる少尉からの口頭伝達で、中には戦艦が輪切りにされたという情報まで——、とにかくつ、緊急事態です!!」

これはあくまでも序章。  
後年の歴史書によると、帝国軍本部の会議室の明かりは一昼夜、絶えることなく燃え  
続けていたとされている。



## 第三十五話 破滅を伝える急転直下 Operatio

n  
— Megiddo.

(Timeline —???)

『さて、グラ・バルカス帝国の征伐に関する案件だが』

『……、案件と言われましても。我々が動かなければ同盟国ムーが墮とされるから、という理由だけで参戦しただけでしょうに』

『弱いとは言え友好国であることには変わりない。見捨てると、世界で学園都市主導の力関係が築けなくなる。これは我々にとつても不都合な問題ではないかね?』

『だが扱いに困るのも事実だ。帝国は資源大国という訳でもない。となると件のパーパルディアのように、政府を乗っ取る必要性も薄くなる』

『ええ、彼らは役に立ってくれましたよ。帝国などに比べれば断然、ね。……おかげで、余計な金を浪費せずに済みました』

『転移直後は何より資源獲得が最優先事項だったからな。懐かしいものだ』

『それで、グラ・バルカス帝国の扱いについては』

『——決まっているだろう?』

『待つてください。結論を出すには早すぎませんか？ 征伐はこの際必要な物だとしても、もう少し穏便に済ませなければ、周辺国からの批判の声が——』

『奴らは全世界に宣戦布告をした。今更批判など出んよ』

『そうですね。もつとも、神聖ミリシアル帝国からは面子の問題で非難される可能性もあるでしょうが……』

『奴らは帝国の派遣艦隊に惨敗している。外面はどうあれ、正面から戦争を仕掛けたい訳ではないだろう。……秘蔵兵器は魔法帝国戦まで残しておきたいようだしな』

『馬鹿なことを。だが、我々が動いても吠えるだけで何もできんよ。そのためにもわざわざ、先進十一カ国会議に戦艦を送り込んだのだからな。多少の効果は出てもらわんと困る』

『ざつと諜報を行いました、世界への波紋は凄まじいものがありましたよ。あれだけ動かなかつたミリシアル帝国が、自分から各国に使者を送り込み、事態の収束を図っていますからね。帝国との関係をより強力に、共に力を合わせようと。……名目はあくまで、グラ・バルカス帝国のような無法国家が出ないように、今後は各国が協調して行くべきだとしていますが、ねえ？』

『放っておけ。自分の支配域が縮小していく際の気分は、君にも理解できるだろう？』

それよりもだ』

『……もう決定でいいでしょう？ 理事長からは自由裁量権を頂いている。「計画」に悪影響をもたらす因子は一切ない、君たちの好きにしてくれたまえ。とね？』

『そうは言うが、わざわざ戦費が嵩む方法を選ぶ必要はないのではないか？』

『……あれは中途半端に叩いても意味がない。どう足掻いても勝てないと思わせなければ、いずれ再起してくる。ならば、答えは一つだ』

『ええ、その通りです。どうしても受け入れられないと言うのであれば、多数決でもしてみますか？ 折角の機会です。一度、お二方の意見がどれ程異端なのかを、ご自身の目で確認してみても如何でしょうか？』

『……、』

『それでは』

『以上の決議を以って、我々統括理事会はグラ・バルカス帝国の殲滅を決定する。そして本会議は事前の通告に従い、派遣軍の選定に移行する。意見のある物は挙手を——

——』

1

そして、だ。

ガカアツツツツ！！！！と。

季節外れのプレゼントが一斉に、大気を引き裂きながら無慈悲に降り注いだ。

2

蜂の巣をつついたように、と表現する他なかった。

「繰り返します！ 第一格納庫、応答してください！！ 第一格納庫——」

「無駄だ、もう止める。……少尉っ、サージ電流で基地内の有線通信が駄目になっています！ 期待は薄いですが、予備の通信機を使う許可を——」

「こつちもダメだ、本部との通信が遮断されてる。これは本格的に修理しないとマズいぞ……」

「非常用電源への切り替えに失敗。落雷箇所によつては、回路そのものが焼き切れている可能性もあります。あの規模の落雷ですからね……。というか、自然にあのレベルの落雷は発生しうるのか……?」

「確かに一部に雲があるとはいえ、落雷を誘発する程天氣が悪い訳ではない。一切の予兆もなかった。ならば一体何故……?」

帝国空軍基地・グラディオス。

本土で二番目に巨大な空軍の飛行場であつたが、今ではその威厳も失われつつあつた。

なぜならば。

「余計なことを喋っている暇があるならさっさと手を動かせ、お前たち!! それとも外で消火活動でもしてくるか! 今じゃ過電流で電子機器の大半が発火している!! 直撃を受けた第二格納庫は既に炎上もしている! 下手をすればこの基地自体が地図から消え失せるのだぞ! 分かっているのか!」

薄暗くなった部屋の中から窓を覗いてみると、職員、飛行機乗り問わずにてんやわんやと走り回っている。

大量のバケツを持ち運び、あるいは、着陸失敗で炎上した航空機を消火するための機材とホースが台車で運搬されている。

すべては、真つ赤に燃え盛る格納庫のため……という訳でもない。

どちらかと言えば、サージ電流で発生しようとしている火災を未然に防ぐために行動している者の方が多いくらいだ。

だが、不思議なことは無い。

単純に、もはや鎮火は不可能であると一目で理解できるほどに、炎が成長しているのだ。航空燃料が詰まった爆撃機や戦闘機が轟めいていたのも原因ではあるが、主には電気抵抗の熱によるものであろう。

そんな悲惨な現状を見渡し、空将のレイテスは囁くように言う。

「だがなジュレイ。手を動かせとは言うが、今は計器類が作動しないのも事実だ。ここに居ても意味がない」

「つ、それは……」

「総員で現場指揮に向かうぞ。格納庫自体は周囲の建物と切り離されているが……、万が一が無いとは言いい切れない。それこそ、第一格納庫にでも延焼すれば大惨事だ」

「では、」

「私は第二格納庫で指揮を執る。十人ほどを残して、残りの全員は各所に散らばれ。い

いな？」

「「はっ、了解しました！」」

レイテスの言葉で各長の下に人員が集まり、それぞれの現場へ向かう。

音頭を取った空将もまた、当然例外ではない。

「無理に鎮火させようとは考えさせるな！ リソースはなるべく他方へ回し、我々は第

一格納庫への延焼を防ぐことだけに終始する！ 現場に到着次第、各人に伝えよ！」

部下へ命令を出しながらも、全速力で駆け抜ける。

実働部隊でないにもかかわらず動きが良いのは、やはり軍人としての誇りが奥底にあるからだろうか。

だが、それよりも。

（やはり不自然だ……。あれだけの落雷、前兆くらいは見えても良い筈なのにそれが無かった。異常気象にしても何かがおかしい。いつそのこと、因果が成立していないと言  
い換えてもいい）

空にはペンキを溢したかのような青が広がっている。所々に雲は見られるが、決して雷雲に属する類とは呼べない。

明らか二、何力がオカシイ。

「なら、一体何が原因となって——

そして、建物の隙間を通り抜けて、

——絶句した。

「……はっ、あ?」

「っ? ???」

あまりの衝撃に、この場の全員が口を閉ざす。

滅多にあり得ないようなそれが、あり得てしまう。そんな光景。

そんな景色が、一面へ広がっていた。

つまり。

「なん、だ……? これは、血液? それも、放置されて固まったものじゃない……。鮮

血、なのか……?」

何度も再確認をしようとして、レイテスはやはり目を背けた。

格納庫を取り囲むように、『赤』で彩られたコンクリートが占拠しているのだ。

見渡す限りの『赤』。



狂気の殺戮でも発生しなければ、いいや、それでも血液は足りないだろう。

大勢の人間から一滴も逃さずに搾り取らなければ、この状況は決して再現できない。

「レイテス空将！ これはつ、これは、どういふことなのでしょうか！」

「わ、私にも分かんよ……っ。だが見る限り、おびただしい量の血液が撒き散らされている。たとえ四肢を切り落とされても、こうはならない……」

「で、ですが、何にしてもおかしくないですか？」

そう。

この場には決定的に足りない物が一つある。

部下の一人が叫ぶように言う。

「この血液を振りまいた当人は——、消防隊員たちは何処へ消えたのですか？」

聞きたくなかったことを聞かされた最高指揮官は黙り込んだ。

この場には無駄な足掻きと分かっていながら消火に向かった職員も、一定数は存在している筈だった。

それなのに、まるで存在そのものを抹消されたかのように。

血液だけを残して、その全てが消滅。行方不明になっていたのだ。

（いいや、血液というより液体成分だけが消滅を免れた……、と言う方が正しいのか？

いわゆる吸血鬼とは逆のパターンの生物か……それとも、これほど下劣な魔法がこの世界には存在しているのか。……、どちらでも結果は同じだ。今はそれよりも！）

レイテスはこの場に留まるのは危険と判断し、

「総員、速やかにこの場から退避しろ！！ 何が起きているかは不明だが、多数の死者が出ている！ 気を付けろ、恐らく何かに攻撃されて

「——ツツ！！！！ 空将、後ろですつ！！」

レイテスが振り向こうとしたその後方。

僅かに、五メートルの距離であった。

ザザザザザツツツ！！！！ と木の葉が擦れるような音が連続し、薄っすらと漂っていた綿のような牢獄が砕け散った。

その綿埃の正体が、目に見えない程細かい微細な金属の粒で。

それでいて電磁波に呼应して細かいアームを開閉することで、人間から細胞の一つ一つを塗り取る事を可能としたミクロな兵器であることに気づけた者は、一人でも存在していたのであろうか。

しかし。

いずれにせよ、彼らにとってそんなことは些事であつた。

「巨大な、何だ……ッ!! いや違う、コイツらは!!」  
牢獄。

先ほど確かにそう述べた。

ならば中には何が囚われていたのか。

直後に、答えが明らかになつた。

「ハナカマキリ……ッ!! ——いいやつ、擬態ではなく本当に植物質で作られた、昆虫型の植物か!!」

動物よりも速く動き、力強く体を動かして、そして自らの養分に変換する。

そんな、植物質の捕食者が。

すなわち。

フラワーレジスタンス  
食物連鎖の反逆者。

遺伝子操作技術、その最果てに。

歪んだ科学者の執念によって生み出された、哀れな被害者が君臨していた。

第三十六話 光明、あるいは底なしの闇 From  
| Science.

1

宇宙を発端にした異変は、帝国の各地で続いていた。

「おいつ、どうなっている?! 状況を報告しろ!」

「わ、分かりません!! 突然光の柱が降ってきて、寄港していた艦船が湾港ごと全て消し飛ばされたとしたか!!」

「だから何故そのようなふざけた現象が起きたか説明しろと言っているのだ!!」

「分かる訳ないじゃないですかそんなことツ!! 無茶を言わないでください!」

あるいは、グレートアトラスター級戦艦の三番艦が補給に訪れていた海軍基地、グラディオスが。

「なにつ、が起きて——ごがつ?! 喉が焼け……ツ!!」

「今は外に出ないように!! 水蒸気の爆風が収まるまでは、瓦礫の中に隠れていて!!」

「おいつ、カーゴの中から何か出てくるぞ。あれは、なん、だ？ 戦車、なのか……!!」

「だ、だがキヤタピラが無いぞ……。あんな奇怪な恰好で、まともに動けるはずが」

あるいは、精鋭部隊が集結している帝国最大の陸軍基地、グラビディウスが。

「は、ははっ、何だよこれ。星が、降ってきやがる……」

「早く逃げるぞ！ 念のために、基地直下のシエルターに避難するんだ！」

「いやっ、おい待て——この隕石、空中で静止して……ッ!!」

「っ!! ふざけるな……直撃コースっ、なのかよ!!」

あるいは、機械文明を極めに極めた集大成、帝都ラグナの防衛を担う陸軍基地が。

あるいは。

あるいは、

あるいは、

あるいは、あるいは、あるいは、あるいは、あるいは、あるいは、あるいは、

雷光が、光線が、衛星が、兵装が、怪物が、爆弾が、毒ガスが、液状物質が。

科学の帝国に容赦なく降り注ぎ、致命の破壊を顕現させる。

それぞれが、樹木のように分岐した各分野の成果物。

その性質にも、目的にも。普遍的に居座る共通項は存在していない。

しかし、結果として出力された事象がすべて似通っていたのは、彼らの根底に狂科学の理念が等しく存在していたからなのか。

それとも、彼の街の最暗部に起因する悪意そのものなのか。

既に、賽は投げられていた。

## 2

「——以上の理由から、学園都市とは速やかに講和、もしくは……。いいえ、講和をすべきであると私は考えます。無礼を承知で申し上げますが、……。どうぞ、御一考を」

「……」

科学文明として栄華を誇る帝都ラグナ。まさにその中心部。

光化学スモッグに薄汚れた、ある種の象徴的な灰空を貫くように佇むその城の最上層に、二人の男の声が響いていた。

「……カイザルよ。情報が正確でない限り、どれほど智謀を巡らせようとも益が生じないことは、常日頃から言い聞かしていたな」

「はっ、その通りにございます」

「ならば包み隠さずはつきりと申せ。そうでなければ、貴様が嫌っている都合の悪い情報を隠し通そうとする連中と、同じ部類に入ってしまうぞ？」

「……っ」

どれだけ不都合な事実でも正面から受け止めて、対処に当たらなければならぬ。

グラバルカス帝国皇帝・グラルークスは暗にそう告げて、カイザルの言葉を待った。

「恐れながら」

一言の間をおいて、

「現在我々は極めて危険な状況に陥っております。学園都市は、当初の想定以上の軍事力を持つ国家でした」

「具体的には」

「戦車、艦艇、航空機。学園都市はその全ての領域において我々より勝まさつています。何分未確定な情報が多いのが実情ですが、恐らくは——」

「……」

「文明圏外国と我らが帝国。その両者の間に蔓延る絶対的な力量差が……同じく、学園都市との間にも存在しているものかと」

皇帝の視線を一身に受けながら、カイザルは囁くように告げた。



グラルークスは手にしたワインを口に含み、目を閉じて深い思考の海に潜る。

一 国家を統べる人間として相応しい頭脳を持つ彼にも、今回の一件はカイザルと同様に思う所があるのかもしれない。

「カイザル、貴様がそう考え至った根拠は何だ。……この際未確認でも構うまい、その全てを話したまえ」

「畏まりました」

カイザルは平伏の姿勢から、僅かに目線を上げて、

「先ほどは調査中とだけ述べました。ですが初期の伝達段階で、既にいくらか気掛かりな情報が」

「して、その内容は？」

「旧レイフォルの海軍基地に係留していた戦艦二隻を含む地方艦隊が、高高度からの爆撃で全艦艇が轟沈。これだけでも異常なのですが……少し奇妙な点がありました」

「奇妙、と？」

「曰く、『巨大な炎の刃が突然上空から降り注ぎ、全ての施設と艦艇を薙ぎ払った』と。そしてこれは、バルクルスの線状爆撃痕とも符合しうる情報です」

「なるほど、それでは他の支離滅裂な報告とやらも」

「事実の可能性が多分に。別の基地では『最新鋭の戦艦が、ガトリング砲のように弾を撒

き散らす戦車砲に輪切りにされた』という馬鹿げた報告も挙がっていましたが……」

十中八九の事実。

口に出さずとも、この場の全員がそれを理解していた。

「道理で、貴様がわざわざ報告に来る訳だ」

「恐れ入ります」

これらの兵器群を本当に学園都市が保有していれば、グラバルカス帝国の栄華はこの辺りで打ち止めとなる。それどころか、国家の体裁を保てるか否かの問題にもなり得るだろう。

それだけは、確実に避けなければならなかった。

「……ふん」

だからこそ、なのか。

揺らぐ事のない芯を持った瞳で、科学を統べる皇帝が全てを断ち切ったのは。

「もはや、学園都市が我らの喉元に喰らい付くまでの猶予は殆ど残っていないだろう。情報が確定し次第、我が元へ伝えよ。速やかに情報を解析し、奴らの兵器性能を暴き立てるのだ」

「はっ！ 仰せの通りに、陛下」

そのまま歴戦の猛将は長年培ってきた淀みのない仕草で一礼をし、軍本部へ戻るため

に踵を返した。

無意識的に小さく溜息を吐く。

ここまで上手く事が運んだのも、陛下が聡明な人間であったからこそだ。

もしも、皇帝が代替わりしていたならば。一体この国はどうなっていたのだろうか。

(……いいや、グラ・カバル様も器量に優れたお方だ。もう少し成長なされば、皇帝陛下

にも劣らない為政者となられるだろうよ)

まだ若い帝位継承者の姿を思い浮かべ、薄らと笑みを浮かべるカイザル。

この最悪な戦端から脱した後は、一将兵としてどのように国を支えれば良いのだろうか。

直近まで迫った危機から一時的に目を背け、明るい未来を幻視する。勿論、国の存亡が掛かった緊急事態ではある。

それでも。

どうか、それくらいの事は許してほしい、と。

そんなふうに。

思っていた時だった。

「ゴツツツガアツツツ!!!!!!」と、一瞬の煌めきと共に世界から音が消失した。それほどまでの衝撃音。

遅れて、最新鋭技術の結晶であつた筈の象徴的な城塞が、嘲笑うような衝撃によつて悲痛な叫びを上げた。

「……、っ!!」

「デジャヴとも取れる奇妙な予感。その最悪な想像に突き動かされたカイザルは、急ぎ北側の窓へと駆け寄り、ステンドグラスから目を凝らした。

「一体、何が起きやがった!!」

立ち込めているのは土砂が舞い上がった煙だろうか。ただでさえ蛍光色に曇つた視界を隠匿しているため、原因を掴むことはできなかつた。

だが、カイザルの心には一つの確信があつた。

原因が何であろうと、これは学園都市が保有する兵器によつて引き起こされた事態であるのだと。

「っ、陛下ッ!!」

「分かつておる。……だが、しばし待て」

意見を具申しようとしたカイザルを抑えて、皇帝は静かに動きを待った。豪華な装飾が施された柱時計から、カチリ、カチリと音が響く。

そして、グラルークスが僅かに顔を上げた途端、部屋の外から誰かが駆け寄るような振動が伝わり、

「カイザル様、緊急事態です……ッ!! 急ぎ、お耳に入れたい事が

「そのまま申せ!」

「ッ!! はっ、了解致しました!! 皇帝陛下!」

息を荒げた金髪碧眼の衛兵が、慌ただしい様子で言葉を紡ぎ始める。

「先ほど発生した揺れは、帝都周辺に隕石が衝突した事が原因であるものと考えられます!!」

「隕石だと!! 敵の攻撃ではないのか!」

「いえ、現在のところ、そのような情報は入っておりません! これには複数の目撃証言があり、そして、その情報から判断するには……、っ」

一転して、何かを迷うような表情をした衛兵だったが、強く唇を噛み締めた後にこう叫んだ。

「直径にして百メートル規模のクレーターを作る隕石が、運悪く、陸軍第一軍駐屯地に直撃したのかと思われませぬ!!」

「なんっ!!」

(馬鹿な!!) あり得ない、よりにもよってこんなタイミングで……ッ!!)

さしもの猛将と言えど、その狼狽を隠すことはできなかった。

ただでさえ学園都市の軍勢が迫っているというのに、ここに来て首都防衛機能を喪失するのさ。

そんなこと、認められない。

認められるものか。

精銳と呼ばれる軍隊を失って、どうやって学園都市に対抗すれば良いのだ。これでは最低限度の時間稼ぎも出来ないではないか。

そんな意味のない問いかけだけが頭の中をループする。

だから、そんな停滞を傾けたのは、他でもないグラルクスその人であった。

「カイザルよ。いつもの冷静なお前はどうした?」

「っ!! 陛下……」

「焦りからは何も生まれるものは無い。もう一度考え直してみよ。本当にこれが、単なる不幸の産物であるのかどうかをな」

「……………まさか。いやそ  
んな筈が」

微かな疑念が生まれた後は早かった。

そもそも確率的に考えてあり得ない話ではあったのだ。

旧世界よりも広大なこの惑星で、豆粒以下の帝国首都近辺に直撃するような隕石。

それも超科学文明との交戦中に偶然、首都基地へピンポイントに落下するような自然災害が存在し得るのか？

答えなど、一つに決まっていた。

(そんなもの、あり得る筈がない……ッ!! 奴らの脅威は想定以上に、我々の足元まで迫っていた!!)

だがそれは、学園都市の科学力が神々の領域に達している事を認める事に他ならなかった。

方法論など検討も付かない。そもそも、隕石が落下するメカニズムすら正確に把握できていないのだ。

だからこそ、学園都市が持つ異質さが際立つ。

戦争の初手から敵首都に迎撃不能の隕石群を降らせる事もできた、学園都市の異質さが。

「学園都市へ使者を派遣せよ! 目的は和平交渉、内容は事実上の降伏宣言でも構わな

い!! あくまでも最優先事項は学園都市との戦闘行為の終結だ!! 帝国との直接的な窓口はないが、ムー国を経由した伝達ならば速やかに伝わるであろう!」

「つ、しかと承りました……! グラールクス皇帝陛下」

先の衛兵は深く一礼をし、そのまま走り去っていった。

二人きりの密談ももう終わり。あの衛兵が各方面への伝達を終えれば、すぐにでも人が集まってくるだろう。

「……よろしかったのでしょうか」

恐らく自分でも、なぜその言葉が漏れ出たのかははっきりと分かっていないのだろう。

思わずといった問い掛けに、皇帝はあつさりとした様子で、

「何が、だね?」

「つ、いえ……、何でもありません……」

「……、貴族連中なら皇帝権限でいくらでも黙らせられる。時間が経てば、嫌でも奴らの耳にも学園都市軍から受けた被害の凄惨さが伝わるだろう。何も問題あるまい」

そう言つて、ワイングラスの中身を空にする。

いつもと変わらない超然とした雰囲気醸し出しているが、かのグラールクスでも



ノーダメージとはいかなかった。

これだけの出来事が半刻にも満たない僅かな時間で起きたのだ。いつそ全てを忘れて酒に耽りたかつたが、これから起こることを考えればそうする訳にもいかない。

一切の説得をせずに強引に話を進める手もあるが、それでは余計な軋轢を生みだしてしまう。

そのため、各界トップの集結を待っていたのだが——  
やけに、遅い気がした。

確かに大臣格の人員が集まるのには時間が掛かる。

だがあれだけ大きな振動があれば、普通は皇帝の身を案じて他にも衛兵や侍女が駆けつけてくるはずだ。

いくら密談をしているとは言え、ここまで人の気配がないというのもおかしい話だ。

自分たちの与り知らぬ所で、何か妙な事が起きている。

そう二人が確信に至る、まさにその直前の出来事であった。

カツン、と複数の足音が交響した。

「ほう、これは面白いことを聞いた」

一人だけ一歩前に出ているのは、この集団の代表だからだろうか。

とにかく、金髪にサングラスを掛けた見慣れない服装に身を包む青年は、ニヒルに笑ってこう告げたのだ。

「無事に、俺達との実力差が理解できたようで何よりだ。ならばさっそく降伏のチャンスをやろうか。グラ・バルカス帝国皇帝、グラルークスさんよ」

## 第三十七話 鋼の放物線、その結末 the Para

bola | Deadline.

「無事に、俺達との実力差が理解できたようで何よりだ。ならさっそく降伏のチャンスをやろうか。グラ・バルカス帝国皇帝、グラルークスさんよ」

その不遜なる闖入者は開幕早々にそう宣告した。

もはや騒動の元凶が自分たちにある事を隠そうともしない姿を見て、豪勢な王座に腰かけるグラルークスとその下段で狼狽えたままのカイザルの警戒度が急激な上昇を遂げる。

そして、軍神と呼ばれた男は己の内から湧き出る言葉をそのまま世界に出力しようとした。

「貴様らはっ

「学園都市統括理事長アレイスター・クロウリー直属部隊、グループ。くそ面倒くさい事に今回の戦争に関する全権限を与えられていてな。この降伏交渉においては学園都市と同義だ」

「……、っ」

講和、ではない。

自国民に対する名目上のプライドすら守らせない、そういう類の交渉であるという事なのであろう。

「なるほどな」

科学帝国の君主は小さく息を吐いた。

彼らの進軍速度から考えると、これが帝国史上初の降伏通告でありながら事実上の最後通牒となっている。断つてしまえば、千幾年も続いてきた帝国の歴史の終止符が数時間以内に打たれることになるのは明白だ。

（いいや、そもそもこの者たちがどこから現れたのかが未だに分からぬ。大扉が開け放たれば流石に気が付く筈だが、それを悟らせぬ程の隠密能力という事か。いざとなれば我らを暗殺して帰還するまでを容易に成し遂げる余裕もあるかもやしれん。……手前の金髪は明らかに軍人の体つきをしている。カイザルも優秀な能力を持つていたとは聞かぬが、奴が現役であれば敵う道理はない。だが赤髪の女は保留するとしても、杖を突いた男は直接戦闘担当ではないだろう。状況から察するに恐らくは参謀か何かか）  
いずれにしても、と考察に一間置きながら、思案の時間を目の前の侵入者に悟らせないように稼いでいく。

（単なる知謀担当要員とは思えない。杖というハンデを背負ったうえでの隠密性、たと

え戦闘になつても足枷にはなり得ない筈だ。学園都市統括理事長とやらがお気に入り  
の直属部隊なら捕らえる事である程度の譲歩は引き出せそうだが……、周囲に人の気配  
がない以上一方的に無力化されたと考えるのが自然だろう。素直に交渉した方が賢明  
か)

「……。ならば……………」

(しかし、奴らの能力の方向性と外が騒ぎになつていないことを考慮するに、小さい火力  
で敵を瞬時に屠る暗殺者タイプ。対集団戦闘は不得手と見るべきか。……ならばここ  
は他所の衛兵が応援にくるのを待ち、相手に圧力を掛けて譲歩を引きずり出そうか。い  
くら弱小国とはいえ、主戦力が激減した状態で他国に攻め入られるのは些か致命的にす  
ぎる。最低でも他国との和平交渉の仲介役くらいは担わせたいところだが……)

暫定的な結論を得て、豪華絢爛な外套に身を包む皇帝は静かに顔を上げた途端、辺り  
一面をぬめるような重たい空気が埋め尽くした。

グラルークスは優秀な臣下に目線でアイコンタクトを送り、交渉で優位になるよう時  
間稼ぎを行う事を伝える。

奴も聡い男だ。わざわざ言わなくとも同じ結論に辿り着いているだろうが、たとえそ  
うでなくとも目線だけでも意図する所は通じるはずだ。

「……………仮に我らが、断ると言えばどうする」

「めんどくせエなア、クソ野郎」

代わりに答えたのは白い怪物であった。

「交渉ごっこなんてやってる場合かア？ こっちは中継器の実地試験の段階で、こんな辺境での役目は全部終えてんだよ。軌道兵器にしたってコスパの問題で整備が出来ねエンじやア耐用年数つてモンが出てきやがる。使おうが使うまいがどうせ定期的に入れ替える必要があんならよオ……。……。なア？ これ以上は言わなくても理解できる程度のミスは持つてると思つていいんだよなア皇帝陛下サマは」

「……、」

「お前らだつてホントは理解はしてんだろ？ ここを逃せば、一國が滅びるまで停戦条約は結べねエつてコトをよオ」

一方通行は右腕から伸びる伸縮式の杖で地面を小突きながら、

「言つておくが、上層部は戦争が続く限りは止まらねエぞ。今回の戦争はこの惑星での衛星兵器の試射も兼ねてんだ。弱国相手にコスト度外視で高価な兵器を使つてんだとでも言えば分かりやすいかア？ まあ試射つつてもシミュレーションじゃ完璧な精度を誇つてゐるらしいがア、要はこいつに關しても実地試験が必要つてこつた」

「……それは、他国民の命を新兵器の実験のためだけに使い潰し、弄んだということを公言したものと受け取つてもよいのだな？ 結果が分かり切つていて、なおかつ多数の死

傷者が出る事もすべて承知した上で……!」

「命だア? 言っておくがな、俺アカタギに対しちや博愛を気取つちやアいるが国家戦争で兵士に死人が出るのを許容できねエほど狭量じやねエぞ。学園都市の兵器の精度は良くも悪くも精密だ。民間地区への流れ弾はまずあり得ねエよ」

「それに、それをあなた達が言うのもどうなのかしらね?」

横から割り込むように口を挟んだのは、胸を包帯で覆い上から黒の学ランを羽織ったシヨタコン痴女こと結標淡希であつた。

彼女は帝国東方艦隊の全てを統括するカイザルの方へ視線をやり、武骨なデザインの軍用懐中電灯を手中で軽く回転させる。

「旧列強国第五席レイフォル。かつての戦争では問答無用で首都を撃滅させられて、国家元首含む前代未聞の死傷者を出したことはこの世界じや有名でしょうに。作戦そのものが失敗に終わったとは言え、今回の戦争でもムー国西部アルーでの略奪計画が練られていたという情報まで入っているわ」

「なんの話だそれは……。我が軍は捕虜に対する拷問すら禁じる方針を取っている。戦争時の人権侵害問題にはこの世界の列強とやらよりも遥かに配慮しているのだ。言いがかりをつけるのは止めてもらおうか!」

「あら、末端部隊のコントロールがままならない事に悩んでいるくせによくもまあ。具

体名を挙げるなら、帝国陸軍第8旅団長の……確か、ガオグゲルとか言ったかしらね？  
とは言っても、本国には秘密裏に計画を進めていたという話だから、知らなかったのも無理はないけど」

「……っ」

カイザルは答えなかった。

この一件に関しては、安易に返答することは出来ないと思えたからだ。

ガオグゲル。回数は少ないとは言え、面識はある。

陸と海で所属こそ違うが、侵攻作戦計画の部隊編成にはカイザル自身も大きく関わっていたためである。

素行に難があると問題にはなっていたが、その指揮能力の高さから最前線基地バルクルスの総司令官の任を与えられていた筈だ。

多少の問題行動を起こしてしまうのは薄々感づいてはいたのだが……まさかこれほど大々的に、軍規違反を犯すとは想像も付かなかった。

「ま、これ以上起きなかつたことの話をしても仕方が無いわ。そろそろ交渉に移つてもいいかしら？」

「待て……一つだけ、聞かせろ」

「答えられるものに限るなら」



周囲に人の気配が戻った様子が無いのを見て、帝国の栄華の礎を創った軍神は口を開いた。

「奴は、まだ生きているのだな？」

「どうしてまた？」

「古い友人だ。性格に難がある奴ではあったが、優秀な奴でな。……軍規違反者とはいえ安否を気にするのは当然の事だろう？」

「……さあ、どうかしらね？」

大能力者のテレポーターは衛星通信で送られた情報を手繰り寄せようと思いを馳せて、

「別にこの情報は当人を尋問して入手した訳じゃないからね。バルクルスで捕らえたのは尋問もできないほど憔悴した一般兵だけだったと聞くし。救援作戦前日の情報収集で偶然拾ったんじゃないかしら？」

「っ、それでは——」

「ご友人だったのなら残念ながら。まあ、運よく襲撃時に基地の外に出ていたのなら生存の可能性もゼロじゃないでしょうけど。はつきり言って望み薄でしょうね」

「……………」

直前に軍事基地が攻撃されたとは思えないほどの静寂の中、旧友の死で頭を項垂れさ

せたように見せかけるカイザル。会話で時間さえ稼げれば、外の異常を報告しに来た衛士か内部の異常を発見した侍女が駆けつけてくれるはずだ。この状況さえ外部に伝えられれば、少なくともこちらが一方的な譲歩を迫られる展開にはならないであろう。

大使を脅して妥協案を引き出すのは政治後進国がやるような事であるため気は進まないが、亡国の危機の目の前ではそんな不平は言っていられない。

使えるのであれば何であつても武器にしる。さもなくば、祖国と共に滅ぶがいい。

「では、私も一つ後学のために聞かせてもらおうか」

カイザルの言葉が完全に止まったのを確認したためか、皇帝グラルークスはワイニングラスを持ちあげながら、

「先の情報捕虜からの尋問ではないと申したな。だが、それほど秘匿されるような情報を、単なる通信傍受で入手したとはとても思えない。手に入れる機会があるとすれば、密談の現場に直接居合わせ

「いいやそこまでだ。これ以上無意味な時間稼ぎに付き合う暇はこちらにも無いからな」

「……、なんだと?」

皇帝の発言を遮った無礼者の正体は土御門元春であつた。

「時間稼ぎ以外に考えられないだろう? さつきからの言動はあんたら本来の性格とは

かけ離れているように見えるが。少なくとも皇帝、あんたは降って湧いた幸運を無視してわざわざ回り道をするような奴じゃあない」

「ふん、随分と愉快な観察眼を持つているのだなお主は。ほんの数分間で他人の性格をそれ程までに把握できるとでも?」

「うちのメンバーにはなかなかハイスペックなストーカーもいてね。断片的な情報だけでも一日以上の行動記録があれば完全にその人物のトレースをすることも可能だ。……もつとも、そういう類の忌まわしいバケモンが別にいやがるのも事実ではあるがな」

「ほお、ストーカーか。如何なる方法で付け回したと言うかは知らぬが、24時間もこの城を自由に闊歩できたとはとても思えぬな。よもや、お得意の科学技術で透明人間にも化けていたと言うつもりではあるまいな?」

「なにもこの現代においてストッキングに使えるのは肉体労働だけとは限らないさ」  
 そう言いながら彼は学生服の内側から中型の金属筒を取り出した。

大きさは500mmのペットボトルを一回り大きくした物を想像してくれば良い。物理的電子的問わず見るからに嚴重な封がなされたその筒は、たとえ大気を構成する分子の一粒たりとも通さないほどの密閉力を持つているようにも思えた。

「この世界は我々に何を求める?」

——全く……おもしろき世界よ……さて、誰

の言葉だったか」

初めの数秒間。皇帝の顔にわずかに映ったのは困惑の表情だった。

ただし、己の記憶を辿って内に含まれる真なる意味を理解すれば、それはたちどころに戦慄へと変貌を遂げる。

「<sup>アンダーライン</sup>滞空回線。空气中を漂うように移動し、その対流を利用した自家発電で半永久的に情報を収集する超小型のナノデバイスだ。お宅の庭では半年ほど前から稼働を始めていた訳だが……気づかなかったか？」

起動された投影式のキーボードから暗証番号を入力し、陰陽博士は相も変わらない気楽そうな表情でその不可視の猛威の錠前を解除した。

使われている技術への理解は追いつかないものの、今から何が行われるのかには見当がついた様子のカイザルが制止しようと叫ぶも、

「コイツは警告だ」

言葉と共に内蔵ファンが作動して、指定された数量だけの極細機器が木綿の如く吹き散らされていく。

ただでさえ逃げ場の無かった空間へ無慈悲に追撃が与えられたことを悟り、カイザルの顔から血色が失われる。

「今後、宇宙や空から素敵なプレゼントを受け取りたいと思つたときは、学園都市や世界に対して反抗的な政略を練つてみる事だな。なにも軍事的な物に限らなくても構わないぞ？」俺たちは寛容だからな。政治的プロパガンダでも、世界総植民地化惑星支配計画でも、なんならこの場で知つた学園都市の裏の顔を世界に発信しようとしてもいい。思いついたものは何でも試してみるといいさ」

ああ、と。

グラバルカス帝国機関上層部の兩名は同時に悟つた。

これは首輪だ。真に世界の広さを知らなかつた愚者の手足を封じ込めるための楔なのだ。

これでは二度と侵略戦争など起こせないし、降伏条約の裏で反撃の準備を密かに執り行おうと計画する事すら許されない。大気に溶け込む微細で非情な支配から脱却する方法は検討も付かないし、証拠もなければその惨状を世界に訴えることもできない。仮にその存在が証明できたとしても、その前に国家を灰燼に帰されてしまえば本末転倒以外の何物でもないのだ。

大きく見積もってもほんの三十センチほどの金属製の円柱形。

実態を見れば辺りに漂う綿埃以下の小さな微粒子。

見かけの軍事力などもはや関係が無い。

たったこれだけで、学園都市は栄華を極めたグラ・バルカス帝国へ未来永劫に続くチエツクメイトを決めてしまったのだ。

「ああそれと、これだけの量があれば島国の一つや二つを覆い尽くすのに訳は無いぞ？ 学園都市内であつても特殊なツールか施設を使わない限り逃げられない代物だ。この地にはもはや安息の地はないと考えたほうが賢明かもな」

完全に見誤った。心の中で悲鳴を上げている思考はそれだけだった。

だから、だ。

「……条件はなんだ。言っておくが、我を信奉する帝国国民の数は想像を絶するほどに多いぞ。植民地化するのであれば——」

「いやいやいや。このくらいで音を上げられるのはちよつと不味いんだよなあ」  
なのに。

金髪グラサンアロハシャツの極めて世俗的な大悪魔はかすかに笑って嘯いた。

「第一、この不自然な静寂の種明かしすら済んでいないだろう？ まあ魔術師つてのは普通は魔術のタネが割れないように行動するのが一般的なんだが……」

そこまで言葉を傾聴したところで、数多き勲章の帝国軍人は眉をひそめた。訳語がブレている。

不可解ではあるがどんな些細な事象でも前世界と同じ言語で会話をこなせるこの世界において翻訳にミスが生じるとは到底思えない。

魔術。

従来の技術系統とは根源的に異なる非科学的技法を基調とする新世界固有の『何か』。しかし。

俗衆に広まる言葉で言えば『魔法』ではなかったか？

「存分に気圧されているところ誠に申し訳ないが本国からの命令だ。……お前たちには、我々学園都市のため徹底的に従属してもらおうぞ？」

圧倒的な科学力の前に自尊心の塊が音を立てて崩れ果てるなかで、であった。

情け容赦なく、第二ラウンドの開始を宣告する鐘が鳴り響いた。